940.28
Ki39
3

940.28-Ki39-37
12005007600011

脊

納本

940.28
Kz39
3

木村謹治著

ゲーテ

刊行 弘文堂書房

817
3171

序

本書は、さきに「ゲーテ論攷」として公刊したゲーテ研究に關する諸論文に、それ以後の執筆にかかる分を加へて改題出版したものである。讀み返して、ゲーテに對する自分の視點が著しくファウストとウィルヘルム・マイステルに集注せられ、謂はば兩作品の研究論集の感を今更の如くに新たにする。

此事實は、ゲーテに對する自分の個人的關係を今改めて回想せしめるのである。勿論、此の兩作がゲーテの代表的大作である事はいふ迄もない。從つてそこに觀察の目を集注する事は、ゲーテを愛好し、研究する者として當然であらう。しかし自分の場合、それ以外にも存した執筆の動機に就て此の機會に簡單に書きしるしておき度い氣持がする。

論文のテーマが上述の如くに偏倚した原因は、これらの論文の多くが、これらの作品に對する自分の興味の著しく高まつた時代――一九三二年前後卽ちゲーテ祝典を機緣として――執筆された事に由來する。而して何故に此の兩篇――主として「ウィルヘルム・マイステル遍歷時代」――を觀察の對象としたかを告白すれば、大正の末から昭和の初めにかけて、唯物論偏執の傾向が著しく、とりわけマルクシズムが日本に於ける青年の指導原理であるかの觀があつた時代、それらの

思想に追從しない者は所謂時代遲れの如くに輕蔑せられ、それ以外にたましひの糧となり、心を委ぬべき思想もないかの如くに思はれた頃、自分の立場からすれば、宗教的畏敬を社會生活の根抵となすゲーテの思想こそ唯物的權利強調の主我思想に對し、最も強力に對抗し得るものと確信し、機會の與へらるる毎に若い人人にも話した婆心の結實の一部が本書の中軸をなすに至つたものである。これらの諸篇が他の或種の論文に比して特に啓蒙的であり、學的、研究的傾向が稀薄であり、同一事を反復してゐる事なども、かうした由來に基く事と懺悔する次第である。しかし、これが當時の世相に對する學究としての自分の微かな抗議の聲であり、且つは教育界の末班を汚す者としての自分の義務の小さな遂行であつた理由から此の事も亦許して貰へれば仕合せである。今、版を新たにして此の書を世に送るに際して、ここ數年の間に世界が經驗した思想の變遷を顧み、感懷愈〻深く、自然自分の聯想が此の小さき過去の仕事に導かれたまま、茲にしるした次第である。

他の論文の成立に關しては既に一度「論攷」の序に於て述べたのでここでは贅しない。

昭和十三年十二月

著者

ゲーテ

目次

『若きゲーテ』素描……一
ゲーテに於ける宗教的信仰の基礎を構成するもの……六九
作品に現れたるゲーテの生活感情……九三
ゲーテのスピノーザ研究……一一五
ゲーテと東方思想……一四九
ゲーテとその社會思想……一六五
ゲーテの觀たる理想の社會……一九一
ゲーテの教育思想に就て……二一七
人間創造……二三三

目次

ゲーテと自由……二六九
『ファウスト』……二七七
Die Mütter-Szene を中心として觀たるゲーテの『ファウスト』……三一九
ファウスト頌……四二七
ゲーテに於ける世界文學の概念規定……四四五
ゲーテと世界文學……四六一
『若き詩人に宛てて』……四六九
ゲーテの『死』……四八五

ゲーテ

『若きゲーテ』素描

一

ここで描かうとする若きゲーテの輪郭は、時に關して言へば、その出生時なる一七四九年から一七七五年までの二十六年間を含むもの、卽ち一七七五年十月、彼が故郷フランクフルトを去つて、五十餘年後にその終焉の地となるべきワイマルに移る以前の時代を指すものであり、ゲーテの全生涯に對して持つ意義からすれば、その基礎構造形成の時代を意味する。ゲーテは自らその全生活存在をピラミッド構成の事業に比して、その尖端を出來るだけ高く大空のうちに聳かす事を以て彼の一切の願望の第一に置く事を述べてゐる如く（一七八〇年ラファーテルに宛てた手紙）、偉大なる藝術家ゲーテは、自己の生活を素材として、偉大なる人間殿堂を築かんとする熱望を『殆んど一瞬時も忘却に委ね得ない眞劍なる生活者であつた。而して上述の手紙に於て『予が存在のピラミッドの基礎（バーシス）は、予に與へられ、築かれた』事を述べてゐるが、このバージスこそは大部分ワイマル以前二十六年間の少青年期を意味するものである。從つてその時代が彼の生涯に於て占むる地位、意義の重大性も亦自ら決定せられる。ゲーテはその自傳『詩と眞實』の全二十卷に亙る浩瀚なる告白の筆をこの時代の敍述を以てとどめてゐる。而して、人類の持つ生活記錄中に於て、稀にのみ見らるべきその高き價値は、一

個の天才の魂が、その生成の過程に於て、その內的形式の特質、それが關係する外的諸要素、內外兩者の反應の作用、時代精神と個性の交互作用を、極めて明白直截に描いて、人間生成の歷史的過程に一大照明を投げてゐる點に存する。ゲーテはこの仕事に依つて、自己を對象とする一大藝術家であり、教育者であることの最も雄辯なる證左とする記念碑を建設し得たものであるが、同時に彼の青年期がその多幸なるスタートを惠まれたる運命の裡にも、如何に多くの苦惱と試錬とが、その若き魂を煉獄の焰にかけて鍛錬しなければならなかつたか、豐かな天才は、それだけ多難なる重荷の下に忍苦の時を經驗しなければならなかつた事を回顧する料となつたものである。つまりゲーテにとつては、ワイマル以前の時代は、全體としては、謂はばゲーテの『徒弟時代』(レールヤーレ)である。『全ゲーテ』の基石が如何なる性質のものであつて、それが如何に据ゑられ、斯くしてその上層に如何なる構成が行はるべきかを豫知せしむべき一切が、この時代に提示せられねばならない。而して、此の時代に於てはゲーテの本來の性質が比較的純粹にわれらの前に示され、ゲーテの所謂人格の die gepragte Form 或は Urform が、發生すべき生命の核心として把握し得ると同時に、その新鮮なる純粹生命が、外界の刺戟に應酬して、最も活潑なる活動に入るべき初發的階梯も亦この時代に於て見ることができる。卽ちゲーテの持つ生命の純粹形式、その外部に對する反應の作用形式の最も純粹なる構圖を、この時代に於て求める事を豫定し得よう。この意味に於てワイマル以前の時代は、『全ゲーテ』の一切の萌芽を集めて、その生涯の全程の展望に資すべき時代であると言ふ事ができよう。誠に『若きゲーテ』を、一七七五年、卽ちワイマル以前までと見る事は、單純にゲーテの生活環境の大いなる變化によつて劃らされた區劃だけに止まらない。それよりも更に深い內在的根據に起因するものがある。卽ち種種なる點からゲーテの成長過程がフランクフルト最後の時代を以て一つの完成點に達したと見ることができるからである。若し假に、ゲーテの生涯が二十六年を以て終つたとしても、この間に彼が遺した仕事、彼が示した業績に依つて、時代の最も傑出せる詩人として、同時代及びそれに續く時代に指導的地位を占める事は依然として、變らなかつたらうと思ふ。誠にマックス・モリスに依つて刊行せられた六卷の『若きゲーテ』集を通してわれらに現前する青年ゲーテの事業と風格は、限りなく伸び行かんとする力を內に包藏する一個の生命の最も確かな輪郭を示すものであつて、仕事の上には多くの未完成の作品を遺しては居るけれども、それが決してゲーテの人間としての未熟性を示すものではない。『ゲッツ』、『ウェルテル』、『ウルファウスト』の詩人は、自己の青年期の頂點に立つと共に、これらの作品は嘗て人類の持ち得た最高の藝術創造に列し得べきものであつた。斯くして、青年ゲーテを中心として捲き起された獨逸新興文學の運動、『シュトゥルム・ウント・ドラング』の嵐は、かかる藝術創作に依つて魂を付與せられ、その進むべき道を明示せられたものである。素より無限の成長をその特質とする天才の生命に關して、一の完成を云謂することは、嚴密には意味をなさぬ事ではあるけ

れども、生命の成長過程に於て、その事業の成果と顯著なる轉向とを以て、そこに幾つかの階梯を置く事が許さるべきであるとするならば、是等の事業を遺してワイマルに去るまでの青年ゲーテを以て、その内面的劃期の理由と並んで、一個の統體として取扱ふ事が當然と思はれる。

二十六年は八十三年のゲーテの全生涯に在つては三分の一にも足らない。而してこの二十六年中、事實『若きゲーテ』としてわれらの考察の對象たり得るのは、主として後の十年、卽ち十六歳初めて故郷を去つてライプツィヒ大學に學んだ年から、最後のフランクフルト時代の終りをなす二十六歳までの間である。十年の歳月は、彼の長い一生に於てその一小部分たるに過ぎないけれども、この時代が彼の生涯に對して持つ決定的なる意義と、この間に爲された體驗、果された業績とを考へるならば、その豐かなる内包性に驚かざるを得ない。實際、予に與へられた紙幅を以て、この天才的青年の性格、體驗、業績を追求することは殆んど不可能な課題であるが、この課題を果すべき機會を將來に保留して、『若きゲーテ』の素描を試みることも亦われらの興味をひく。

二

われらは、青年ゲーテの生活體驗を語る前に、先づ青年ゲーテがその周圍の人人に與へた印象を通して、彼の風格に親しまうと思ふ。青年ゲーテの風貌は、一見して深い印象を人の腦裡に刻印せしめねばやまないものがあつた事は、彼に近づいた程のものの盡く告白してゐる處である。殊にシュトラースブルク時代以後、卽ち彼が生死の界に彷徨して甦生せる以後、天才的自覺が強烈にその内部に盛り上つて來た時代の彼に於て、彼の示す全我が、天才の生命に充ち溢れてゐるかの觀がある。友人リースベックは、『その目、歩行、言葉、ステッキまでも全て異常なる人物であることを示すものがあつた。』と言ひ、友人ユング・シュティリングが未だゲーテと未知の頃、シュトラースブルクの晝食の食卓で、初めてその人物に接した時の思出の中で、『わが食卓では約二十名の人人が食事をしてゐた。……特に大きい明るい目と、素晴らしい額と立派な體格とを持つた一人の男が、元氣よく部屋へ這入つて來た。……彼は自ら求めずして自ら食卓の支配權を持つた。』と云つてゐる。これがゲーテである事は後で解つたのである。更に初對面のハインゼは、彼に就て友人に斯う報告してゐる。『ゲーテが我我の許に見えた。二十五歳の美しい若者で、頭のてつぺんから足のつまさきまで、天才と力と強さそのものである。感情に充ちた心、焰に充ち、鷲の翼を持てる魂である。』と。一七七四年の秋、ゲーテが『ウェルテルの惱み』を發表して間もない頃、卽ち彼の生涯に於ける最も強大な内面的苦惱の一つを、漸く克服し得たばかりのゲーテを訪ねたボイエは、その旅日記に印象を記して、『ゲーテは……非常に顏色が蒼かつた。そしてその顏、殊に明朗な褐色の目には魂が宿つてゐた。』

と言ひ、ワイマルの大公の侍從武官で、後にゲーテと親交を結んだクネーベルが、同年の暮にゲーテをフランクフルトの自宅に訪ねた時の第一印象を或る人に語つて、『……自分は彼の事を考へて夢中だ。どうともする事ができない。併し誓つて言ふが、君達とても、苟も頭と心臓を持つ以上、彼と近づきになつて同樣に考へぬものはあるまい。自分にとつては彼は永久に我が生涯の最も異常なる現象の一つとならう。』と感激してゐる。これらの言葉は總て青年ゲーテに就ての第一印象の報告である。最後にわれらは、ゲーテの友人でシュトゥルム・ウント・ドランングの運動の同人なる詩人クリンゲルの言葉を聽かう。彼はある作品の中でゲーテを以て、『……不思議な人間だ。予が曾つて見た人間中の第一のものだ。予が伴侶となし得る唯一のものだ。……後に來るものは、斯かる人間が曾つて存在した事を驚くだらう。』と讃美してゐる。これらの人人は皆それぞれ性格と立場とを異にして、自己の觀點からゲーテを語つてゐるのであるが、而も彼らに與へたゲーテの印象は盡く、『異常なる』人物であり、『天才者』であるといふ點に於て一致してゐる。チゥリヒの豫言者と言はれたラファーテルの如きは、ゲーテを以て、一國の王者たり得るものと言つてゐる程である。何れにしても青年ゲーテの人間的輪郭は、極めて鮮明に力强く太陽の樣な明るさを以て人に迫るものがあつた。

彼の人格に依屬するこの『異常性』、『迫力』は明らかに彼の素質に屬するものであるが、彼の詩人としての天才、その創造的業績の過程は、多くの努力と外的影響によつて特色づけられたものを見る。

天才は時代と方處とを超脱した天來の啓示であると考へてゐる或る人人に對しては、ゲーテ自らこれを否定してゐる。そして自己の生涯に關しても、若し自己が十年世に出づる事が遲いか早いかに依つては、自己の人格內容、外部への作用に於て、全然異なれる結果を招來したであらうと言つてゐる。故に彼は、自己の青年期を語るに當つて、人間の生活觀察に於ては、時代的環境の描出が必須の要件である事を擧げてゐる。勿論人間の有機的人格の構成要素は、自然科學的分析を以てつくす事は不可能である。遺傳的諸要素と時代思潮的影響、環境の地理的關係、種族的特質の種種相を考究して人格內容の諸要素を列擧し得るにしても、是等無數の諸要素が、一個の人格に渾然と綜合せられて、有機的活動を示す生命の根源力は、畢に不可思量の存在である。而もこの力こそは、人格の核心を構成するものであり、人格生成の根本命題である。勿論それは構成諸要素の外部に超絶的に存在するものとは考へられない。諸要素を活かして、一個の小宇宙的合目的的活動を得しむる統合力として考へらるべきものである。人間生成の過程に於て見らるべき興味は、この核心が外部の限りなき諸要素に對して如何に働きかけ、これらの諸要素から如何なるものを攝取し、如何なるものを排除するか、又その攝取量と消化能力との關係、更に素材が人格の生成過程に於て如何なる特殊性を付與せられ、彼の有機的構成要素として顯現し來るか、是等の關係を明らかにすることに依つて、一人格の特異性も亦明らかにせられ、それらの作用の上にかの不可思量の人格の核心の光景を彷彿せしむることができる。

天才性の優劣も亦これらの相互關係によつて決定せられるのである。

三

一人格の渾然たる綜合體から迫る全人的印象を若きゲーテの上に見たわれらは、次にその生成過程の輪郭を描く事に依つて、構成要素の分析的素描を試みよう。

ヨハン・ウォルフガング・ゲーテは一七四九年八月二十八日、マイン河畔のフランクフルトに生れた。彼の父ヨハン・カスパール・ゲーテはチューリンゲン出身の裁縫師の子であり、母カタリーナ・エリーザベト・テクストールはフランクフルト市長ヨハン・ウォルフガング・テクストールの女であつた。卽ち父の系統からすれば一職工の孫であるが、母系からはフランクフルト最高支配者の一族に屬してゐた。此の事は、後にワイマルに於ける最高爲政者として最も有能なる才幹を示すゲーテと、晩年の人生觀に於ける『働くもの』、『手工者』に人間の最もよき姿を見んとするゲーテを豫想せしめるのであるが、われらは、先づ若きゲーテの生活態度、彼の生命の根本形式を知る爲に、彼自らがその兩親に就て述べてゐる言葉から出發して見よう、ゲーテの有名な告白に、

われ父より享けたるは體軀と
眞劍なる處世の態度、
母よりは快活なる天資と
物語への興味となり。

と言ふのがある。この言葉は、最もよく兩親よりの稟性を說明するものであつて、生に對する最も眞劍なる態度、卽ち自己の人間創造に對するプロメートイス的熱意と、詩の世界に逍遙遊をなして、そこに忘我の三昧境に沈潛する藝術的天才の歡喜との兩性を豐かに付與せられてゐる事を告白するものである。此の生に處する實際性と、詩に憧るる歡喜とは、明らかに二つの對立性を示してゐる。此の對立的稟性は、ゲーテの生涯を貫いて、その生活態度に於て、その藝術作品の上に、その思想構成の上に跡づける事のできるものである。謂はば全ゲーテを構成する二條の生命線である。この矛盾する傾向が、一人格の有機性內に於て、如何に相剋し統合し、唯一者の全一的活動光景を提示し來るか、卽ちこの兩者の相關關係の間に營まるる生の活動形式、或は生命のリズムを觀察考究することが、ゲーテの研究者に課さるべき大なる任務である。ゲーテに於けるこの生の活動形式は、彼の生涯の初發的階梯に於ては、その衝動的、爆發的提示のうちに、所謂シェトゥルム・ウント・ドラング時代の諸相に於て、他の何れの時代にも優れて明瞭に跡づけることができる。彼の生の根本形式がその青年期に最も際立つてゐる所以は、矛盾せる二つの傾向が最も激しい相剋對立の形に於て示されるからであ

る。この時代は、ゲーテがその生涯に於て最も激しい自我の分裂に惱める時代である。肉體的にも精神的にも、生命の危機に臨んだ時代である。ウェルテルの惱みとファウストの分裂は、その藝術的形態に於ける若きゲーテ自身の告白である。分極的矛盾を生命の兩翼としつつ、よくその均衡を保持する程の偉大な統合的人格にまで成長した後年のゲーテに於ては、ウェルテル及びファウストの心的鬪爭を再び見る事ができないことは、やがて若きゲーテの生活體驗の特質を語るものである。

彼の生涯は、この矛盾せる稟性の相剋から統合的完成への歴史であるが、その誕生時（一七四九年）より一七六五年、卽ちライプツィヒ大學時代に至る第一次のフランクフルト時代、卽ち彼の少年時代は、謂はば純粹に受容の時代であつて、彼の稟性に於ける兩極が、一人格内にその支配的地位を占有せんとする相剋にまで成長せずに、與へられた諸要素が、並存的存在を保つてゐる時代である。故に、上述の諸句に見られる兩親の性質が、あたかもその性格、年齡、その人生觀、嗜好に於て對角線的對蹠を示しつつ、而も一つの家庭を構成してゐたやうに、少年ゲーテも亦、その父より與へられる多樣なる啓蒙教育と、母に依つて養はれる詩的空想、宗教的情操を、同時に、その限りなく强盛な受容性を以て素直に享け、その間に何等の矛盾をも感ずる處がなかつた。ゲーテの父は、當時の有產階級の享くべき最高の教育をうけ、フランクフルト市に於ける支配者の地位を獲得し得べき充分なる素地を有しては居たが、本來同市の舊家の子弟でない彼は、爲政者としての地位を占める事が出來なかつた。僅に『帝室顧問官』なる稱號と、市長の息女をその妻とし得たに過ぎない。彼はその子ウォルフガングの上に自己の志を實現しようと欲した。その目的を以て自らその子女、ゲーテ及び十五箇月年少の妹コルネーリアの教育をひきうけた。豐かなる天稟に惠まれたゲーテは、父によつて與へられる多面的な智的教育を、何等の苦痛もなく、消化しつくしたのみならず、進んでその藝術的天賦が要求する種種なる試みへその能動的獲得の手をのばした。斯くして彼が十六歲の秋ライプツィヒ大學に學ぶ頃には、ラテン、ヘブライの古語から、英佛伊の近代文明國の國語を充分に支配する事が出來るのみならず、文學、演劇は勿論、繪畫、音樂、舞踊、乘馬、劍道に至るまで習得してゐた。その上早くも、宗教的要求を示し、幼稚な手段ではあるが、直接に神に近づかうとする試みをしたり、リサボンの地震の報に、神の存在を問題にしたりしてゐる。實生活に於ては既に戀愛の經驗（グレートヘンへの愛）をさへ持つてゐる。要するにゲーテは極めて早熟の少年であつた。併し斯うした多面的才幹は、それだけでは決してゲーテの天才を構成するものではない。早熟で才氣ある少年は、必ずしも珍らしいものではない。往往にして或る種の早教育の方法に依つては人工的にさへ達し得るものである。故に斯うした多才を以て直ちに天才と解釋するのは大なる誤りである。われらは、十六歲以前の少年ゲーテに於て學ぶべき多くを持たない。何となれば、與へられた教養の諸材料が謂はば彼の人格構成の基礎材として、彼の内に攝取されたに過ぎない狀態であつて、この諸材料が彼の生命のリズム

の構成要素として、相互に絡み合ひ、嚙み合ふ矛盾闘爭の狀態、卽ち一切の錯綜せる諸要素が自覺的人格統合に參與すべき運動が未だ開始せられないからである。ゲーテの天才性は、單純に廣範なる宇宙性にのみ存してゐるのではない。矛盾せる諸要素を統合せる宇宙的有機性に存してゐる。更に此の諸要素間の强烈なる矛盾對立と、その統合への熱意、精進の異常なる力に存してゐる。此の內面的闘爭は、ライプツィヒ時代に始つて次第に昂進するのを見るのである。

四

ライプツィヒの遊學は、一七六五年十月から一七六八年八月まで約三箇年に亙つてゐる。ゲーテはその生涯に於て、初めて父の監視から放たれて、彼自身の手に自己を委ねられた。此處で初めてわれらは彼の本來の姿に接し得る。ライプツィヒに來た當初、ゲーテは自己を以て『綠の小枝に止つてゐる小鳥』にたとへて、自由なる生活を享樂した。併し初めの程は、生活の喜びと啓蒙主義的道德觀念とが、反省なき並存狀態を以て彼の內に呼吸してゐる。卽ち舞踊にカルタに饗宴に觀劇に浮身をやつして、天晴れ社交界の『大立物』たることを誇りとする彼は、一方旣に一かどの學者、詩人を以て任じ、妹に對してその道學者的支配者的態度を示してゐる消息は、當時の手紙に於て甚だ興味深く讀まれるのである。彼は妹の手紙の文章を訂正し、彼女に讀書の心得を敎へ、讀書の書目まで限定して、道德的敎訓的なるもの、例へばリチャードソンの小說以外は許さず、ボッカチォのデカメロンの如きは嚴禁してゐる。そして自己を、『自分のやうな嚴格な道德家』と言つて平氣でゐる。而もこの道德家は小鳥のやうに生活の喜びを求めて日もこれ足らぬ有樣であつた。

併し斯うした矛盾がいつまでも彼の意識內に無反省に、ナイーヴに並存することは出來ない。彼の心的成長は當然批評的精神の形で現れてくる。斯くして自己反省及び環境の批評的觀察は、當然自己分裂へ導いて行かねばならない。その主要なる契機となつた事件を外部に求めるならば、ケートヘンとの戀愛、ベーリシュとの交友、エーゼル敎授の指導を數へる事が出來る。而して最後に心的生活の分裂はやがて肉體的健康の重大なる破綻を以て此の時代の極頂に達し、遂に宗敎的精神の覺醒を終局としてライプツィヒ時代の交響樂を終るのである。

ケートヘンとの戀愛交涉は、一七六六年の春、ゲーテがライプツィヒに來てより約半年の後に屬する。彼女はゲーテが晝食をとつてゐた酒房の娘であつた。ゲーテが愛好する女性に共通な、善良で優しい、そして明るく受動的な少女であつた。ゲーテがこの少女との戀愛經驗のうちに、種種なる人生の問題、生活の苦味を體驗した。先づ結婚によつて當然豫想さるべき階級の相違である。當時の一般

小說戲曲に反映してゐるやうに、異なれる階級間の結婚は許し難い社會的制約であつた。ゲーテはケートヘンへの愛に依つてこの制約の價値を批判すべき立場に置かれると共に、人と人との間の愛に社會的階級の甚だ無意義である事を認識した。けれども斯うした制約は彼の前に大なる威力となつて臨んでゐた事も亦考へられる。彼はこの社會的制約を一擧にして蹂躙しようとする意氣を示しつつ、他方に於ては、この事件が父に知られる事を甚だしく恐れて、鄕里の友人に極祕を要求してゐるのである。併しながら、たとひゲーテが一切の社會的制約を克服して、この愛を完成しようとする勇氣があつたにしても、彼自らの戀愛態度に、この愛を破壞すべきものを多分に持つてゐた。ゲーテが人生の苦味を滿喫したのもその爲であり、ケートヘンが彼の手から離れ去つたのもその爲である。それは彼の熱情の異常な强さ、その描くカーヴの極度の波動から由來する。善良で優しい少女は、この焰のやうに燃上るゲーテの愛を前にして、その爲すところを知らない。彼の嫉妬の感情は、次から次へと幻の敵を作つてその前にのたうち廻つた。彼の熱情のカーヴは、當時彼自らベーリシュに宛てた手紙に言つてゐるやうに、『天國と地獄』の間を上下した。斯うした熱情人を相手として、素朴なる少女は、實際問題としての結婚は勿論、戀愛遊戲さへ不可能である事は充分に想像される。遂にこの戀愛交渉は、ケートヘンが他の青年と婚約する事を以て終りを告げた。そして形の上からは彼女がゲーテを棄てた事になり、ゲーテも亦斯く解釋することに依つて、自己の責任を輕減し得たと信じてゐる。

少年期の敎育と共に與へられた一種の外被としての型が內面的爆發に依つて打ち碎かれる一つの動機が、上述の戀愛體驗であるとすれば、ゲーテをその本然の彼に解放した他の動機はベーリシュとの交友である。この友は、ゲーテに對する影響に於ては、シュトラースブルク時代のヘルデル乃至ザルツマンにも比すべきものがある。ゲーテは彼によつて、その文明的社交人から、放膽なる野人に轉身した。從つて、曾つて社交界の寵兒として自他共に許したゲーテは、少數の家庭を除いてライプツィヒの社交界から完全に放逐せられた。そして彼等はアウエルバッハの窖を本據として、酒盃に親しみ乍ら、ライプツィヒの俗物を嘲罵して、虹の如き氣を吐いたのである。當時ゲーテは、『われらは恰度、城郭の中に居るやうに、一切の人人から隔絕して、伯爵領なるわれらのアウエルバッハのホーフに御輿を据ゑ、而も厭世哲學者ともならずにライプツィヒの奴等を嘲笑し乍ら、お互に慰め合つてゐるのだ、いつかわれらがこの城郭から力强い手を以て、不意に彼等に向つて攻擊する日こそ彼等の不幸な日なのだ。』と、自分達の生活態度を洩らしてゐる。『ファウスト』のアウエルバッハの窖の一場面は當時のゲーテの生活の直寫である事を思はせる。ベーリシュは明らかにゲーテにとつてはメフィスト的惡友ではあつたけれども、而もこのメフィスト的試みによつて、彼を包む外殼を完全に碎く事ができたのである。

ベーリシュと並んで當時彼の爲によき導きとなつたものは、彼の繪の教師なるエーゼル教授である。ベーリシュが生の解放者たるの役割をゲーテの爲に演じたとするならば、エーゼルは藝術に對する眞實の理解を若きゲーテの爲に手ほどきしたものである。ウィンケルマンのよき友であり、ウィーラントの崇拜者であるこの藝術家は、その表現手法なり、その見解に於ては、たとひ未だ完全に啓蒙思想から解放されて居らなかつたにしても、藝術の正しい理解に對しての確實なる觀念の把持者であつた。自然に對してやうやくその眞實の目醒めを經驗し始めてゐたゲーテは、エーゼルの指示によつて、殆んどエーゼル自身の意味する以上のものを獲得した。沙翁の偉大性を知つたのも彼による。藝術の理解が、智的教示によるべきではなくして、心的自證によるべきである事も彼によつて教へられた。藝術に於て自然の如何に尊きものであるかも彼から知つた。勿論未だ多く概念的指示の域を出でないにしても、シュトラースブルク時代、即ち彼のシュトゥルム・ウント・ドラングの力强い運動に移るべき基礎が、ベーリシュ及びエーゼルのよき刺戟によつて爲された事は充分に認める事ができる。

扨てわれらは再び彼の生活に立ち戻つて、ライプツィヒ時代の終末を物語らねばならない。戀愛の破綻と放縱なる生活は、遂に彼の健康を根柢から破壞した。七月の或る夜、彼は激しい喀血で目醒めたのである。斯くして幾日かの間、生死の境を彷徨した。それはゲーテの生命にとつて極めて重大な危機であつたと共に、彼の心的生活に對して誠に天與の試錬となつたものである。この危機が若きゲーテの內的生活に如何に意味深き體驗となり、如何に大なる變化を與へたかは、『詩と眞實』並びに當時病患克服後に友人に宛てた手紙に於て覗はるる處である。ゲーテはこの大患に依つて全然『異なれる人間』になつた事を告白してゐる。『救世主は遂に自分を捉へたのだ。自分はこれまで、彼には餘りにも永く走り過ぎたのだ。今や彼は自分の毛髮を摑んで捕へたのだ。』と友に書き送つた言葉に於て、ゲーテの心に眞の宗教的信仰が生きて來た事が覗はれるのである。彼の青年時代は極めて濃厚なる宗教的雰圍氣に包まれて居り、從つて、その享けた教育も宗教的に强く色づけられてゐた事は人の知るところである。聖書はゲーテの少年時代から彼には最も親しい書であつた。それにも拘らず、彼は友人ランゲルに、『君こそはこの世に於て予に眞の福音書を說教した最初の人である。』と告白してゐる。即ちゲーテはここに彼が幾度か飜讀した聖書を全く新なる目を以て讀む事を知つた事を告白するものである。これを教へたものはランゲルではなくして、彼自身の魂の宗教的覺醒であつた。彼の教へられたる信仰、その少年の時に神に近づかんとした素朴なる試みは、今や眞實なる神の認識を以て置き換へらるるまでに成長して來た。斯くして彼の生涯を通しての宗教的信念が彼獨自のものと

して、彼の所謂『自家用』として、その基礎を置いたのである。

五

一七六八年八月二十八日、第十九回誕生日を迎へたゲーテは、その廢殘の病軀を故郷に運ぶべき馬車に身を投じた。故郷の街に近づくにつれて、三年前青雲の志を抱いて故郷の地を離れた自身を、今の身にひきくらべて胸塞がるを覺えた。『今や難破者として歸るといふ事は非常に心の張りを挫く』とその自傳に書いてゐる。この病青年を迎へ入れた父の家は決して明るいものではなかつた。嚴格な氣むづかしい父はあらゆる希望をかけて大學へ送つた唯一人の子息が、學業は成らず、瘠せ衰へた姿に僅にいのちの餘喘を保つて歸つたのを見て、一層憂鬱になつたのは充分理解できる。病ゲーテは暗い心を抱いて、三階の彼のベットにちぢこまつた。病魔の試錬は故郷に於ても容易に去らなかつた。殊にこの年十二月、病狀が甚だ險惡になつて、眞に生死の程もあやぶまれるに至つた。彼の主治醫なるドクトル・メッツは、中世神祕哲學に興味を持つてゐる人であり、かねて錬金術の研究家として知られてゐた。彼は獨自の神祕藥を秘藏してゐたが、容易にこれを投藥しないことにしてゐた。ゲーテの父母は我が子の危機に臨んで、メッツ氏にこの祕藥を投ずる事を切望して止まなかつたので、彼は

夜中自宅に走つてこれを取り來つて試用した。その時から青年ゲーテの病は不思議にも好轉して來た。果してこの祕藥が恢復の主因をなしたか否かは不明ではあるが、ゲーテに對して中世神祕哲學への興味は、これを動機として強く起つて來た。この興味は彼の母の友なるズザンナ・フォン・クレッテンベルク孃によつて一層高められた。彼は通風爐を設らへて、しきりに錬金術の實驗を始めるやうになる。蓋し、それによつて生命の神祕をさぐり、宇宙の眞理を摑まうと企てたのである。この時彼の魂には、獨逸に於ける傳說の人物ドクトル・ファウストが既に生き返つた事を想はせる。

クレッテンベルク孃のより大なる役割は宗教的感化である。彼女はライプツィヒのゲーテの友リムプレヒト及びランゲルの後を承けて、ゲーテの宗教的信仰の心を育みそだてた女性である。弱く生れて處女を以て終つたこの女性は、眞に野に咲く一輪の百合の如き淸らかな、敬虔な女性であつた。ゲーテの宗教生活が、如何に彼女に負うてゐるかを知らんとするならば、ゲーテが『ウィルヘルム・マイステル修業時代』第六卷全部をこれに宛ててゐる『美しき魂の告白』を讀むべきである。『美しき魂』こそはこの女性に外ならないものである。而してこの女性がゲーテ自身に對する地位は、『ウィルヘルム・マイステル』全篇に於て占むるこの第六卷の意義を理解する事によつて容易に知られ得る。卽ち主人公の重大なる心的轉機に當つて、彼の心の導きとなつた『美しき魂の告白』こそは、同時にゲーテの宗教生活に於ける導きである。更にウィルヘルムの理想の女性として夢寐にも忘れ得な

かつたナタリエも亦クレッテンベルクの面影を多分に寫してゐる事を思ふならば、青年ゲーテにとつて母の如きこの女性が、如何に深い感銘を彼の魂の上に雕りつけたかを容易に知る事を得よう。されば、一七七四年の春、ゲーテがワイマルに去る前年、彼女がこの世を去つた時、『僕のクレッテンベルク嬢は亡くなりました。危篤の豫感もないうちに亡くなつたのです。僕の留守の間に死んで葬られました。僕にはあんなにもなつかしく、あんなにも多くのものであつたのに。』とラ・ロッシュ夫人に書き送つてゐる。

フランクフルトに於ける約一年半のゲーテの病患時代は、ゲーテの生活リズムに於ける求心的傾向を示す時代である。ライプツィヒ時代に於て見られる遠心的放射性が、病患の試錬のうちに求心的反極に移行し、過ぎ去つた自己の生活を靜かに回顧する事に依つて、その體驗的素材を種種なる形に於て清算整理し、やがて來るべき時代への成長、飛躍に對する基礎を構成する時間をこの時代に求め得たのである。既に述べた宗教思想を始めとして、戀愛體驗の藝術的構成の試み（喜劇『共犯者』）、文藝觀、或は學的考察等のうちに於て、散漫であつた過去の生活に秩序と整理とを與へようとする意圖が覗はれる。かくして約一年半、若きゲーテは故郷の地を出でて再び新しき活動の地に新しき體驗を求むべく旅立つことになる。

六

一七七〇年四月初め、二十一歳のゲーテは、再び得られたる健康の喜びと、溢るるばかりの希望を抱いてエルザスの都シュトラースブルクに來る。五年前、初めて家郷を出でた十六歳の少年は、今や二十一歳の青年として再び父の家を後にする。ゲーテは自傳に斯う書いてゐる。『春になると予は健康を感じた。夫れにも增して予は、予の青春の元氣が再び返つて來るのを感じた。そして予は再び父の家から出たいといふ憧れを覺えた。よしその原因は、最初の場合とは全く異なつたものではあつたにしても。』ゲーテの內部なる遠心的動向は、春と共に鬱勃として動き始めた事が知られる。のみならず、彼自ら言ふが如くに、此の度父の家を出ようとする決心は、第一回の時とは全く異なれるものがある。それは、彼の成長に伴ふ自覺的根柢の差異である。十六歳の少年は今や二十一歳の青年になつた。嘗つては父の意志に隨順してライプツィヒに向つたゲーテは、此の度も父の初志を果す爲に、フランス文化の榮えてゐるシュトラースブルク市の大學に遊學する事に同意したけれども、その動機に於ては、父の家を出ようとする自己の意志が決意の重要なる部分を占めてゐる。卽ちある意味に於ては、父に叛いて父の許を離れようとする決意である。『予の病氣の再發に際し、又その恢復の遲遲た

る爲に、彼（父）は正當以上の焦慮を示し、のみならず、思ひやりを以て予を慰める事をせずに、人力を以ては如何ともする事のできない事に關しても、屢〻殘酷にもそれがあたかも意志の力でどうにでもなるかのやうな事を言つたのは、予の許し難い事であつた。彼も亦色色な仕方で予によつて傷つけられた。』と自傳に書いてゐる如くに、少年時代極めて柔順な子は、今や一個の人格を持つ青年として、父に對立するに至つた。ゲーテは決して、父に對して不孝な子ではない。或る程度までは常に父の求むる處に從つて、その意圖に順應してゐる。大學に於ける學問の選擇でも、卒業後の職業の選擇でも、總て父の言ふが儘になつてゐる。父の求むる夫れらの仕事の如きは、ゲーテの才能を以てすれば、誠に遊戯の一部の如きもので、之れを以て父に反抗する程の原因を造るに至らない。彼が父に於て見出した不滿は、謂はば父を通してその背後に動いてゐる古き啓蒙主義時代に對する不滿である。それはゲーテが新しき時代に目醒め、新しき思潮を自己の生命の糧として成長する事愈〻多くして、益〻明確の度を加ふべき間隙でなければならなかつた。即ち、廣い意味で父の時代と子の時代との間に於ける爭ひと見る事ができる。

美しいエルザスの自然は、甦つたゲーテの生命に限りない悅びと自由を送り、底知れぬ成長の彈力を以て之れを充たすに充分であつた。シュトラースブルク著早早、ライプツィヒの友リムブレヒトに宛てて、『自分は再び學生になつたのだ。そして有難いことには、必要なだけの健康とあり餘る程の快活を持つてゐる』事を神に感謝してゐる。嬾て又、『自分は變つた。隨分變つた。自分はそれを神に感謝する。自分が當然成るべき筈のものに成らないのに對しても亦感謝する。……青年である限り何事にも完全ではない。』とも書いて、自己に於ける全人的完成への欣求が漸くその萌芽を示す事を語つてゐる。嬾て暫く經つて、『われは若い限り中道を歩まうとは要求しない。……事實をできる限り觀察し、それをわれらの記憶の裡に書きとめ、「一日たりとも何等かの事を蒐集する事なしには、過ぎ去らしめたくはないものだ。……そしてわらは、「何者か」であつてはならない。「一切者」たらんと欲しなければならない。而して特に疲勞した精神と肉體の要求が要求する以上に屢〻偸安は爲すべきではない。』と友人に書いてゐる手紙は、やがて自己に向つての警告でもある。その生活氣分に於て、その自己に對する態度に於て、かのライプツィヒ時代とは、如何に隔絶してゐる事であらう。かの小鳥のやうに、唯愉快なる日を追ふ事をのみ知つた青年は、今や克己鍛錬によつて、力强き男子に自己を教育せんとする青年となつてゐる。『輕快にして自由な心を持つ、といふ事は何と云ふ幸福だ！　勇氣はわれらを困難や危險に騙り立てる。併し大なる喜びは、唯、大なる勞苦を以てのみ得られる。』ともゲーテは書いてゐる。大患を經驗して、生命の尊さを知つたゲーテは、當時如何に多くの注意を自己の健康に向けたかを知る事ができる。彼はシュトラースブルクのミュンステル寺院の高塔の上に昇つて、目もくるめくばかりの望樓にわが身を立てたり、夜陰、物凄い卵塔場や、禮

拜堂にわが心膽を試みたり、夕方、衛兵に打鳴らされる歸營譜の、耳を聾せんばかりの太鼓の響きに、強ひて近よつてわが神經を錬磨しようとした。

勿論斯うした精進努力の態度は、その肉體的健康の上にのみ限られて居らない。恢復された肉體は、異常な力を以て成長する事を始めると同時に、彼の心的成長も、まさしくこれに照應して、誠に飽く事のない欲求の衝動を示し始める。大學に於ては、專門の法律學は勿論、化學、醫學、解剖學の講義に熱心に參加する外、その讀書の範圍が如何に廣汎に亙つてゐるかは、當時の讀書日記を瞥見すれば一目にして識る事ができる。文學、美術、哲學は勿論、醫學、動植物學、氣象學、色彩學の書籍文獻に亙つて、その求むる處の知的興味の廣汎なる、眞に驚嘆に値するものがある。それは眞に小宇宙的なる多樣性を示してゐる。若し、これらの知的遠心性の赴くに委せ、これを統制する强力なる天才の集注性が缺けてゐたならば、結局は、何ら得るところなく、人格的破產に終つたであらうことを恐れる。事實ゲーテは、『詩と眞實』に於て、當時の自己を『ファウスト』に於ける學生に比して、自己の散漫性を告白してゐる。ゲーテの多樣性は、單に斯うした好學的傾向のみに止らない。彼は斯うした好學の士ではあつたけれども、而も終日書齋裡にその蒼白なる顏を埋めてゐる底の青年ではなく、社交に遊戲に、旅行に舞踊に、目まぐるしい生活を一方に於て送つてゐる。舞踊の如きは、フランス人の教師に就いて學び、その機緣から悲劇的ロマンスさへ惹起したのである。

彼の斯うした生活は、當時その食卓の仲間なる若き人人の交友を中心にして行はれた。一座の長老ザルッマンを除いては、大概大學生であり、凡ゆる部門の學生を網羅してゐた。ザルッマンだけは、當時既に五十歲に近い獨身者で、シュトラースブルクの生れであるが、極めて純粹なる獨逸精神の鼓吹者であり、ゲーテを初め他の青年達に對しては、指導的立場に立つて强い感化を及ぼした人物であつた。彼を中心にして一つの會合が組織せられ、其處では新刊作品の批評や、自作の詩文の朗讀が行はれた。『獨逸國語促進協會』（レンッの傳ふる處）の名が示してゐるやうに、當時未だフランス領であつたシュトラースブルクに在つて、是等の獨逸青年は、意識的に獨逸的精神の高唱に全力を傾倒したのである。彼等はフランス文化の眞只中に置かれてゐた丈け、愈〻明瞭に獨逸國民性、獨逸精神がフランス文化及びその表現であるフランス文學と相容れないことを、事實に面して直觀し得たのである。ゲーテは『詩と眞實』の中に、『フランス文學は、高齡で高尙である。人生の享樂と自由とを求めてゐる青年は、この二つに依つて喜ばされ得ない。』と宣言してゐる。是等の青年の師表とした處は、實に沙翁であつた。『人若し當時、この生生きした會合に於て、考へられ、述べられ、議論せられた事を直接に知らんとせば、須く「獨逸の樣式と藝術」（ヘルデル編纂の論文集中）にあるヘルデルの沙翁論と、レンッの「劇壇覺書」を讀むがよい。……』とゲーテが言つてゐるやうに、レッシングに依つて獨逸精神と沙翁劇との關係を敎へられ、更にヘルデルに依つて沙翁劇の理解を深めた青年

達にとつては、沙翁以上に偉大なる劇場人は考へられなかつたのである。實に獨逸新興の文藝運動シュトゥルム・ウント・ドランングの潮流は、此の青年の會合からその力强い動きを開始するのである。ゲーテを初めとして、彼の友レンツ、ワーグネルの如き青年詩人、更に彼等のよき教師なるヘルデルもシュトラースブルクに於ける半歲に亙る偶然の滯在によつて、多くのよき種子を蒔いたのである。

これらのことに就て多くを語る餘裕を持たない予は、主としてゲーテの身邊の記述に筆を局限しなければならない。シュトラースブルクに於て、ゲーテの上に起つた最も重大なる事件は、フリデリーケ・ブリオンへの戀愛事件と、ヘルデルとの交友關係である。この二事件は、何れもゲーテの將來の運命、彼の創作性、彼の精神性の成長に關して異常なる關係を有するものである。この二つの事件が、殆んど時を同じうして起つたことも興味がある。此の外部から與へられた機緣は、同時にゲーテの生命のリズムをそれぞれの側面に於て鼓舞し、高調せしめ、それに依つて彼の成長のテムポをいやが上にも促進せしめる結果を招來したものである。卽ちゼーゼンハイムの牧歌は、ゲーテがガニメート的遠心性を殆んど宗教的陶醉にまで高めると共に、一方、ヘルデルの榻下に參じて與へられた警策の、嚴峻を極めた錬磨は、彼の心のプロメートイス的創造の衝動性に炬火を點じたものである。ゼーゼンハイムの愛の體驗は、ゲーテの新しき抒情詩の母胎である。ゲーテの抒情詩の革命は、轉て獨逸文學史上に於ける新しき抒情詩の生誕を意味する。ゲーテに於ける新しき抒情詩とは、換言すれば、若きゲーテがこの時代初めて自己の純眞なる目を以て自然を直觀し、これを自己の樣式に於て表現する事を知つた事實を意味するに外ならない。而して敎へられた一切の表現樣式を一擧にして棄て去つた事は、エルザスの自然を背景としたフリデリーケの純眞なる姿への熱愛が、自らその表現を求めて歌ひ出でた自然の結果であつた。ここにゲーテは初めて眞に詩人として生れ出でたのである。而して一方ヘルデルは、詩人としてのゲーテの生誕に、その確實なる基礎を與へたものである。彼は新しき文學は如何なるものであらねばならぬかを、また詩人の行くべき道、文學理解の態度を敎へ、ゲーテの文藝觀、世界觀に搖ぎなき Begründung を用意したものである。誠に滾滾として盡くるところを知らない詩人の創造的熱情は、これを適當に調節して、形式を付與し、態形化する力に依つて初めて藝術たり得る。勿論詩人の創造的熱情自體の內に藝術的態形たらんとする動向を持つてゐることは言ふまでもないが、これらの熱情が眞に偉大なる藝術の殿堂にまで構築せらるべき爲には、深い明澄なる藝術批判の精神をその種床に持つことが必要であらう。ゲーテに對するヘルデルは、キリストに於けるヨハネより以上に、またよき種子を培ふ耕夫の役を演じ了せたものである。われらは先づフリデリーケの物語から始めよう。

ゲーテがフリデリーケ・ブリオンを知つたのは一七七〇年の秋の事である。ゲーテの食卓の友ワイ

ラントの誘ふがままに、わが求むる女性への旅とも識らず、十月初めの或る晴れ渡つた朝、ゲーテは彼と馬の轡を並べてシュトラースブルクを後にした。牧師ブリオン家はワイラントの縁戚であつた。同家の居住の村ゼーゼンハイムはシュトラースブルクから約六時間里程にあつた。途中、秋晴れのエルザスの野、ラインの川沿など誠に一日の遠乘には限りなく愉快な道であつたのである。二人の青年がブリオン家に著いた時には、家人は總て野良に出て、牧師が只一人彼等を迎へた。ゲーテが自傳に於てフリデリーケの出を描いてゐる手法の巧さは誠に驚嘆すべきものがある。野良から歸る家人が、次次にわれらの眼前に描き出されるが、而もフリデリーケは容易にその姿を現はさうとはしない。家族の人人の彼女に對する心づかひと共に、讀者の興味も亦彼女の上に集注せられる。その瞬間彼女の姿が戸口に現れる。『誠に田園の空に、世にも優しい一つの星が立ち昇つたのだ。』とゲーテは彼女の全印象を寫してゐる。獨逸風の稍〻流行に後れたその服裝、『都會の娘と田舍の娘を取り交せた』樣なその素朴なる風姿は、背景の自然にいかにもふさはしいものであつた。彼女を描いてゐるゲーテの筆は、その儘『ファウスト』のグレートヘンのなよやかな姿を彷彿せしむるものがある。『すらりと輕やかに、あたかも、何物をも身につけぬかの樣に彼女は歩いて來た。そして美しい小さな頭の豐かな金髪の髷の重さに耐へ得ぬ程にもそのうなじは細かつた。明るい空色の目で彼女はあたりをはつきりと眺める。可愛らしい小鼻は、あたかも此世に何の煩ひもあり得ぬやうに大氣を呼吸してゐた。』

と書いてゐる。ゲーテの愛著が忽ちにしてこの少女の上に注がれた事は言ふまでもない。ゲーテの愛する凡ての女性に共通に此の少女は、エルザスの野の自然をその儘自己の本質としてゐるかの樣な明朗さと素朴さを持つてゐた。夜、美しい月光の下に手を携へて廣廣とした野をそぞろ歩いても、彼女のかもす雰圍氣は決してこの青白い月光にふさはしいロマンティックなものではなく、太陽の樣な明るさであつた事をゲーテは告白してゐる。『彼女は、その言葉の明白さで夜を晝にした。そしてその言葉の中には、感情的な思ひを呼び醒すやうな何物もなかつた。』とゲーテは書いてゐる。或は、『本當に生れ乍らの斯うした快活は、予には解し難い。』とも書いてゐる。彼女は斯うした朗らかさを以て、あたかもグレートヘンがファウストにするやうに、彼女の置かれた小さな世界、その身邊の出來事を色色と物語つて聞かせた。斯くしてゼーゼンハイムの牧歌的生活は、この年の秋から翌年の夏まで續いて、二人の若き者に限りなき幸福の時を惠んだ。かの『迎へと別れ』、『五月の歌』等は斯うした喜びの心の表現である。殊に、一七七一年の晩春から初夏に亙つて可成り長くゲーテはゼーゼンハイムに客となつた。此の間の生活、田園に於ける自然の觀照は彼を詩人たらしめずには措かなかつた。『此の清清しい空の澄み渡つてゐること、豐かな大地の輝き、此の柔らかな夕暮、此の温い夜を愛人と寄添ひ、或は彼女の近くで享受する爲には、只目前の風物に身を委ねさへすればよかつた。幾月かの間、清らかに爽やかな朝がわれらを幸福にした。そこには空は大地を溢るるばかりの露でみづ

かひ乍ら、その全幅の豐麗を示して呉れた。又この光景が餘りに單純に終らない爲に、雲は屢〻遠くの山の上に、或る時はここ、或る時はかしこにそそり立つた。それらの雲は、幾日も幾日も、否幾週も澄み渡つた空を曇らす事なく立つてゐた。そして通り過ぎる雷雨は田園を甦へらし、干ぬ間の露をうけて日光に輝く綠を一層鮮やかならしめる。二重の虹、殆んど黑いまでに鼠色の空の飾結びの二色の緣取りは、予が嘗つて見た何物にもまして素晴らしく鮮やかに、而も亦消え易いものであつた。』とその思出に書き記して、直ぐそれに續けて、『斯うした環境の下に、長い事感じなかつた詩興が不意に再び現れて來た』事を述べてゐる。

思出の中に見られる斯うした描寫を通してわれらの受くる感銘は、ゲーテの戀愛の悅びがこのまま果しなく續くかの樣にも思はれる。併し、事實に於てはさうではなかつた。當時の實際生活の反映である手紙を通して、彼の當時の內的生活を覗ふならば、彼の內なるデーモンが、彼を斯うした戀愛三昧の生活內に封じ込むことを欲せずして、激しく苦悶する有樣が明らかにされる。美しき田園の初夏の自然を飽かず眺めた、かの思出の記錄と同じ頃、ザルツマンに宛てた手紙に、『外も內も雨だ。夕方の不快な風は窓前の葡萄の葉にざわめいてゐる。かくしてわが animula Vagula(動搖する魂)は、かの敎會の塔にある風見鷄のやうである。』と書き送る。彼は現在の生活に倦怠を覺え始める。爲すべき多くの事が彼の胸の奧に渦卷き始める。彼の Tatendrang は遂にフリデリーケの愛を以てしても繫ぎ止める事が出來ない。『自分が町へ歸る時も近づいた。實際自分も歸らうと思ふ。……自分の心の狀態は奇異である。……お前の少年の夢は今悉く充たされてゐるではないかと、自分の目がこの幸福の地平線を樂しみ廻る時、屢〻わが心に訊ねる。お前の憧れてゐたものは神仙苑ではないか。事實さうである。友よ、自分はさう感じる。そして又われわれが希望したものに到達するや、毫も幸福を增さないものである事を感じる。』この言葉は、最もよく當時のゲーテの氣持を告白してゐるものである。憧れたものがわが掌中に確保せられた今、此の若き獅子は、再び獲物を求めて曠野に出でんことを欲する。其れは彼の本質に、卽ちそのデーモンに屬する衝動であつた。故にかの愛の憧憬と均しく、運命的な力を以てゲーテを支配するものであつた。併しながら、一方に於ては、倫理人としてのゲーテはかかる必然的なる動向に驅り立てられる自己を、天才の權利として是認する事はできなかつた。そこに天才の悲劇的矛盾がある。ゲーテはフリデリーケを棄てる事によつて、この純眞なる少女の魂を蹂躙つた。『限りなき幸福』の幾頁かを創作した彼のよき伴侶を、彼の旅路の轉換に當つて棄て去つた。それは種種なる事情から全く餘儀ない結果であつた。ゲーテは何故に斯くばかり熱愛した少女を棄てなければならなかつたかに就ては、明瞭には述べてゐない。事實その說明の試みは、恐らく不可能であつたらう。彼が深い用意を以てその思出の中に物語つてゐるところに留意するならば、彼が敢て自己の行動を辯明するところなく、唯深き痛恨、慚愧の涙を注いでゐる心を充分に理解する事

ができよう。ゲーテは、思出の筆をフリデリーケの上に移す以前、多くの伏線を用意してゐる。そして、その伏線の持つ象徴的意義に依つて、讀者に一切の理解の鍵を授けようとしてゐるかの如くに見える。シュトラースブルクに著く早早、憧れのミュンステルの高塔に上つて、エルザスの平野の眺望を樂しんだ事は既に述べたが、その時彼は、その平野の或る一點に唯何となく心がひき寄せられた事を書き記してゐる。次いで舞踊教師の許に於ける娘姉妹との戀愛葛藤に就て可成り多くの言葉を費して、ゲーテの戀を得なかつた姉が激しい言葉で、將來この若者の唇に最初に接吻する女性の上に、永遠に不幸が降ると呪つた旨が物語られてゐる。讀者は唯それを日常茶飯の一挿話として何氣なく見過すかも知れない。ゲーテも亦これを以て後に來るべきフリデリーケへの物語と關係ある如き氣配は示してゐないが、その後彼が意識的に出來るだけ避けてゐた女性接近の禁制が、遂にフリデリーケに於て破られた時、かの姉娘の呪詛に當るべき最初の女性としてフリデリーケが置かれた事を知り得るのである。勿論ゲーテは、この運命的なる關聯に依つて、自己の責任を回避しようとするのではない。只彼は、自己の天才の動向に就いて說明し難い說明を、この象徴的物語の上に委ねたものである。事實ゲーテは、避け難い愛の反逆者である自己を、容易に許すことはできなかつた。純眞なるフリデリーケを、彼の天才の祭壇に捧げらるべき犧牲として冷靜に受けとる爲には、彼には餘りに多くの人道的熱情があつた。彼は彼女と別れた後で、彼の別れの言葉が、この肺を病んでゐる少女の『命の程も危ぶまれる重患の刹那に』送られた事を知つた時、『今にして予は初めて彼の女のうけた損失を感じた。それを償ふ事の可能、否、緩和する可能さへも見出せない。彼女は常に予の心を去らず、絶えず彼女を失ふことが感ぜられた。そして一番惡いことには、予は予自身の不幸を許すことができなかつた事だ。グレートヘンは予から取り去られた。アンネッテ（ケートヘン）は予を棄てた。そして予は今初めて罪を得たのだ。予は最も美しい心をその最も深い處に傷つけたのである。』と書いてゐる。フリデリーケに對するゲーテの自責の感が、如何に深く容易に消え難いものであつたかは、若きゲーテの偉大なる作品の多くに、彼女の面影が深く刻み込まれてゐる事で知られる。『フリデリーケの境遇を傷む心が、予を落ちつけなかつた時、予は予の習慣通りに再び詩作に救助を求めた。予はこの自責の贖罪によつて內面の放免を得さして貰ふ爲に、いつもの詩的懺悔を續けた。「ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン」「クラヴィホウ」の中に出て來る二人のマリイと二人の不實な男とは、恐らく斯うした悔恨の考への結果であつたのだ。』とゲーテ自ら書いてゐる。それよりも尙一層高いフリデリーケの姿は、『ウルファウスト』のグレートヘンに於て見られよう。誠にゼーゼンハイムの體驗なくしては、『ファウスト』のグレートヘンの如き純眞なる少女の描寫は遂に期し難いものであつた事を思へば、彼女のゲーテに對する意義を知る事ができよう。

ゲーテがヘルデルを知つたのは、一七七〇年九月の事である。ヘルデルはホルシュタイン・ゴットルプ・オイテンの王子の教育掛として漫遊の途次、シュトラースブルクで豫ねて持病の眼疾の手術を同地大學の有名なローブシュタイン教授から受けようとの考へから、唯暫くの滯在を豫定してゐたに過ぎなかつた。けれども、手術の結果は彼をして容易に此の地を去る事を許さなかつた。不遇の裡に人となつて、その本質に常に沈鬱の影を宿してゐるこの才人は、斯うした病患によつて、一層その生活氣分を暗くされ、無聊の日日をシュトラースブルクの客舍に送る事を餘儀なくされてゐた。此の時ゲーテが彼を知つたのである。『彼は予よりも五歳の年長であつた。この事は、青年時代に在つては、確に異常な差別をつくるものである。』とゲーテ自身が言つてゐるやうに、文藝批評家としてのヘルデルの當時の名聲と地位、その學識と判斷は、確にゲーテの師長たるに足るものがあつた。それは單に僅僅五歳の年長を以て量る事のできないものであつた。ゲーテの魂は、この新文化の指導的巨匠に震撼せられて覺醒する。ゲーテの内に芽生えの形に於て存在してゐた新興文化運動への種種なる傾向は、ヘルデルの力强き支持によつて一擧にして異常なる速度を以て成長し始める。併しながら、ヘルデルのゲーテの上に果さるべき役割は、その知的啓發よりも、人間的交渉によるゲーテの天才の本質に對する强烈な鍛錬刺戟に在つた。素より、當時ヘルデルの具へてゐる該博なる學知とその批評的精神の高度は、到底ゲーテの及ばざる處であつたにしても、それはゲーテの穎才を以てすれば、必ずしもヘルデルを俟つて初めて達し得べき性質のものとは限らない。けれども、ゲーテの天才の根を深く土壤の内に埋め、これを踏みかためて、如何なる嵐にも耐へ得べき强靱なるものたらしむる試錬は、ヘルデルを通して、ゲーテの上に下されたものである。ヘルデルは斯うした意味に於て、ゲーテのよき師であつた。たとひ、ヘルデル自身は彼の師たる自覺に立つてゲーテを鍛錬したのではなく、寧ろその不機嫌の爆發をゲーテに於て惜しみなく發散せしめたに過ぎないにしても、その爆發のうちに含まるるメフィスト的批評と、神の如き叡智の啓示をゲーテの天才は殘りなく享受して、これを自己の成長の素材とした。そこにゲーテの天才の獨自性がある。唯にヘルデルに於てのみならず、いやしくも自己の成長の爲の素材のある處、彼は本能的敏感性を以てこれを認識する事を知つてゐた。然も攝取力の異常性は、たとひ、その對象が彼に對して如何に苛酷であらうとも、攝取すべき最後の一滴まで殘さない程の執拗さを以て對象にとりすがつた。ヘルデルに對する態度は、その好例である。ヘルデルの前に現れたゲーテは、正にヘルデルの嘲笑の的たるに極めて適應する若者であつた。貧困の裡に人となつて、人生行路の慘苦を具に嘗め、未だ三十にも達せぬ青年ながら、その全人格の老成の面影がはつきりと刻まれてゐたヘルデル、それに對するゲーテは、富裕な家庭に人となつて、人生の體驗極めて淺く、伸伸びと成長した温室の花か、或は放たれた小鳥のやうに明るく快活であつた。その年齒に比して、異常な智能の發達は、ヘルデルの如き人物の目からは、彼の素朴性を賞づる前

に、輕薄にして上滑りの感じを禁じ得ないものがあつたらう。ゲーテはヘルデルと親しむにつれて、ヘルデルの嘲罵を絶えず眞面に浴びねばならなかつた。當時ヘルデルはゲーテを稱して『雀』とも『啄木鳥』とも言つてゐる。ゲーテが極めて素直に、極めて多辯に、その思ふところを述べた時、その悉くが、ヘルデルに依つて排けられ、嘲笑せられると言つてよかつた。『予がこれまで交際した年長の人人は、手心を以て予を教育せんと努め、恐らく寛大を以て甘やかしさへしたものである。ところがヘルデルからは、どんなにして見ようが、是認を得る事ができなかつた。』とゲーテは書いてゐる。ゲーテと雖も勿論これを愉快に思ふ筈がない。併しヘルデルの持つ魂の偉大さは、斯うした嘲罵によつてゲーテを怒らせ背き去らしむべく餘りに魅力あるものであつた。『予が彼の美しき偉大な性質、彼の廣範なる知識、彼の深き卓見を日と共に愈〻尊重する事を知れば知るだけ、彼の叱責、非難に慣れた。』と言ひ、又『それ（苛酷なる嘲罵）は予を怒らせはしなかつたが、面白くはなかつた。併し予は、予の教養に資する一切事を尊重する事を知つて居り、幾度か以前の見解や思考を棄てたので、それにも慣れ、予の當時の立場に於て、予に可能である限り、正當なる非難を不正當なる誹謗から區別せんと努めた。斯くして予にとつて、auf das fruchtbarste lehrreich でない日は一日としてなかつた。』とも書いてゐる。ゲーテが如何にヘルデルに依つて正しき判斷を教へられ、人格的陶冶を受けたかはこれによつて想見する事が出來る。ヘルデルと別れて間もなくゲーテは、彼に宛てた手紙の中

で『ヘルデルよ、ヘルデルよ、大兄はわが爲に大兄が現在あるものとして變る勿れ。予が若し大兄の遊星である運命ならば、予は喜んで、忠實に、地球の友愛なる月たらむ。けれども――これは大兄も全く感ぜらるる處であらうが――土星の周圍を廻る五箇の衛星中の第一のものたるよりも、寧ろ大兄と共に唯一の太陽の周圍を廻る七箇の衛星中の最も小なるもの、卽ち水星となりたいと思ふ。さらば愛するものよ。予は大兄を放たじ。決して放たじ、ヤコブは神の天使と爭うた。たとひ、予はその爲にあしなへとなるとも。』と言ひ、更に、『予若し一日一夜アルキビアデスたるを得たらむには、死すとも可なり。』とも書いてゐる。當時ゲーテのヘルデルに對する傾倒は斯うした言葉の端に生生まし く述べられてゐる。

シュトラースブルク時代、ゲーテがヘルデルから受けた人格的鍛錬の外に、教示された內容に就ては、ゲーテが『詩と眞實』に於て、ヘルデルによつて原稿の儘で示されたと言つてゐる、『言語起原論』以外に、具體的に跡づける事はできないけれども、ヘルデルがその當時まで發表した文藝批評や、彼の『旅日記』から大體の輪郭を知る事ができる。獨逸のルッソーと呼ばれるヘルデルの意圖は、單純に文藝の領域のみに限らず、一般文化に亙つての革命であつた。卽ち理智偏重の啓蒙主義に囚はれた人間の、その完全なる形に於ける解放にあつた。人間の自然性の完全なる教化がその眼目であつた。併し在來の主知主義の立場に對する反動として、勢ひ、主感主義的傾向をとつて現れる事は

當然であつた。これが文藝の要求としては、在來の理智の文學を排して感情の文學を强調する。理智の文學は客觀的法則に準據する文學であるが、感情の文學は個性尊重の文學である。「法則を超越した個性の特質を認め、そこから文學作品の獨自なる價値を生み來るべきを主張する。卽ち文學に於ける天才主義の主張である。天才主義は個性の尊ぶべき事を敎へる。これを國民文學に移して考へるならば、各國民はそれぞれの個性に根ざす文學を生まねばならぬ。それのみが長き生命を持つ文學である。ヘルデルに於ける民謠の重要性はそこから發する。沙翁への傾倒も亦同一なる精神から發する。沙翁の藝術がソフォクレスの藝術と並んで尊いのは、それが深く國民性に根ざして、國民の求むる表現に最も鮮やかな形を付與する事を知つてゐたからである。新しい時代の文學は、徒らに外國文學、例へばフランス古典文學等の模倣に終始すべきものではなくして、民謠の精神に立つて、獨自なる文學に生きねばならないと言ふのである。是等の主張は同時に盡くシュトゥルム・ウント・ドラングの中樞を爲すものである。この主張は、ゲーテもヘルデルによつて初めて敎へられたものではないにしても、ヘルデルに依つて更に一層その思想的輪郭を明瞭ならしめ得た事實を認めねばならない。ゲーテの詩的天才はこの思想的基礎の上に立つて、その創造的活動に入る意味に於て、ヘルデルの主張をタートに依つて實證し完成したものである。

七

一七七一年八月、ゲーテはシュトラースブルクの大學を終へて再び故鄕に歸る。嘗つてライプツィヒから病軀を携へて歸つた難破者は、此度は兎にも角にも父の希望たる法律學の研究を完了して、ドクトルには一歩前のリツェンチアートの學位を得て歸つて來た。年來の希望を我子の上に果し得た父の喜びは想像に餘りある。暗い家庭の空氣は久しぶりに明るく、なごやかなものになつた。父は我子の上にその夢想の半ば成つた事を感じたのであらう。歸著早早時を移さず、ゲーテはフランクフルト市廳に辯護士としての登錄を濟してゐる。登錄願書の中には數年間、『出來るだけの勤勉を以て法律學に身を委ね』て、遂に有名なシュトラースブルク大學に於て、Licentiatus Juris の學位を得た旨を書き誌してあるのも興味深い。更に、その獲得した知識を辯護士として祖國の爲に有用に用ゐんとする所以は、やがて將來フランクフルト市の市政に參與して、有名な役割を演ずべき準備である旨を書き加へてあるのも一層皮肉に響く。事實素晴らしい辯護士ではあつた。その辯論書の作成の早さは、父をさへ驚嘆せしめた。父は、ウォルフガングが若し我子でなかつたならば、恐らく彼を羨望するだらうと洩らしてゐた。併しこの詩人辯護士は間もなくその職業に興味を失ひ始めた。仕事の大部分は父

の消閑事として引渡されたも同然であつた。沈滯せるフランクフルトの生活雰圍氣は、天才力の醱酵を内部に深く自覺し始めてゐる青年ゲーテを、永くつなぎ止める事ができなかつた。故郷の空氣は、常に、傷ついて歸る若きゲーテの爲に、休安の臥床を用意して呉れたけれども、それは唯傷手の癒ゆる間の暫くの時に過ぎない。彼の内部なる詩的創造の欲求は、斯うした倦怠そのものの如き生活には耐へ得なかつた。同年十二月、ザルツマンに宛てた手紙に於て、當時の彼の内的消息を覗ふことができる。彼は自己の職業にも全く倦み果てて、自己が置かれてゐるフランクフルトの巣を、Spelunca ともein leidig Loch とも呼びつつ、自己の生活に對して、『神よこの不幸より救ひ給へ。』と叫ぶ。彼に對する最も大なる不幸は、生活に於ける内外均衡の破綻に外ならない。即ち『予を圍む一切は死である。』といふ言葉と、『わが精進欲の強さは殆んど自らの心を制して、息を入れ、振返り見る餘裕さへない程である。』といふ言葉の間に横はる間隙に外ならない。彼は斯うも書いてゐる。『われらの活動が、内部にのみ集積せねばならぬ樣な處に、生活するのは悲しい事である。自分は君に代るべきものを得ない。それでひとり野を歩いたり、原稿紙の上を歩いたりしてゐる。誠に我が魂は、自己に沈潛して、散漫なるシュトラースブルクの生活に於ては萎縮してゐた飛翔を身に感ずる。』ゲーテの創造力は、その内外生活の不均衡に依つて、愈〻高まつてくる。即ち外的生活が彼の自由を束縛する事が強いだけ、内面的集注、從つて外部に向つての爆發的表現衝動が增大してくる。かかる場合、『野を歩く』事も『原稿紙の上を歩く』ことも、力の放散に於ては同一であつた。殊に新に得た畏友メルクを介してダルムシュタットに、新しい友人團を得た以後は、彼は好んで徒歩フランクフルトと同市間を往來した。そして屢〻冬期の荒天をものともせず、その荒れすさぶ風雨の中を、わが肉體を打たせながら即興の詩を口吟んだ。彼の有名なる『旅人の嵐の歌』はかうして出來たものである。人はこの歌に於て、ゲーテの内部なる『天才』の力强き自覺を知るであらう。夫れは嵐が如何に吹きすさぶとも、畢に吹き倒し得ざるものがある。嵐が心的鬪爭の動搖を包攝する廣い意味の象徵である事は言ふまでもない。彼の胸の中なる悶え、フリデリーケに對する罪責の感情は容易に消燼すべきよすがもなかつた。野や杜をあてどもなく歩き廻る當時のゲーテの氣持には、斯うした心的煩悶に驅り立てらるる動機をも見る事ができるのである。更に『原稿の上を歩き』廻つては、遂に雄篇『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』の戯曲を完成した。即ち『旅人の嵐の歌』と均しい生活氣分の内から生れたものである。

當時ゲーテが、メルクを友として求め得た事は大なる幸福であつた。ヘルデル、ザルツマンと別れた今、メルクはゲーテにとつては、兩者を補ふに足るものがあつた。メルクはダルムシュタットの主計官であつたが、その學識と趣味の廣範な事は、後年のゲーテを想はせるものがあり、加ふるに、その鋭い批評の精神はヘルデルに劣らないものがあつた。而してその全體の風格は、ヘルデル以上に

メフィストを思はせるものがあつた。メルクのメイフスト的性格に就いては、ゲーテが反復して述べてゐるところである。併し、彼はゲーテにとつては、誠によき友であつて、ヘルデルの痛烈苛酷なる態度に比較するならば、メルクは均しく皮肉ではあつても、常に親切な心を内に湛へたよき友であつたのである。深く實際生活の苦楚を嘗めつくした點に於てヘルデルに似てはゐるが、眞にゲーテの天才を理解し、尊敬する點に於てはヘルデルに優つてゐた。彼は『フランクフルト學藝評論』刊行の目的を以て、一七七一年の末にフランクフルトに赴いてゲーテと識り、且つ彼をその同人に得たのである。この評論誌に對してゲーテが筆をとつた期間は約一年間に過ぎなかつたけれども、此の雜誌が當時新興文藝思潮の宣傳機關として極めて重大なる役割を演じた事は注意に價する。

ゲーテがメルクを通して知り得たダルムシュタットの交友圏はヘルデルの婚約の婦人フラックスラント嬢を初めとして、所謂『感傷主義』婦人の一味であつた。この人人の間に伍する若きゲーテは、あたかも羊の群に交はる若き獅子の觀があつた。彼は彼女等から受くべき多くを持たなかつたのは自ら明らかであつたけれども、傷つける胸を抱いて檻に捕はれた獅子には、彼女等の優しい愛は、それ丈けで彼の心を慰むるに足るものがあつたらう。彼は翌年の春、ウェッツラーに去るに臨んで、これらの女性の各〻に詩を送つて友愛の思出を抒べてゐるのも自ら理解ができる。

八

一七七二年春五月、ゲーテは再び故郷の地を去つてウェッツラーに赴く。それは同地所在の獨逸高等法院の實習生として法律の實際を習得せむ爲であつた。此度も亦父の發案に從つたのではあつたが、ゲーテの内面生活から觀察するならば、それは彼に對する一つの新なる解放を意味してゐた。當時わが内心の思ひを托して、象徴的に歌つた『鷲と鳩』に於て見らるるやうに、傷つける鷲が青天の外を望み乍ら、現在の安逸なる家庭生活を享樂する番ひの鳩の忠言に耳を傾くる事ができなかつた。陋巷に屏息するのは、遂に鷲の本質ではない。傷ついて與へられた安息の求心的沈潛は再び甦る健康と共に、壓へても壓へ切れない青雲の志となつて動いてくる。春は不思議にもゲーテの運命に幾度かその遠心衝動の飛翔を許すことを反復する。あたかもウェルテルの運命が自然のリズムを自己のリズムとして、なごやかなる春から、灼熱の眞夏を超えて、軈て物悲しい秋から凋落の冬に移りゆく如くに、ゲーテの身邊にも斯うした試錬が不思議に繰返へされる。傷つける鷲の翼は、春と共に漸くその健康と力を恢復したやうに感じる。彼は父の希望に應じて、故郷の地を離れる。ウェッツラーの町の生活氣分は、決してフランクフルトのそれと大なる變化のあるものではなかつた。否、そこにはフラ

ンクフルトに見らるる小市民的偏見が支配してゐる外に、一層惡い事には、高等法院附屬の官僚團體が、稱號を唯一の生命として人間の價値を決定する階級意識に生きる耐へ難い空氣が淀んでゐた。ゲーテはそこに何の悅びも希望も期待し得る筈がなかつた。それだけ、此の町を圍む自然の美は彼を喜ばし、その胸に健康なる大氣を注ぎ込んだ。而して少數の交友が組織した『騎士卓』が僅に『人』への關心を繫ぎ得るに過ぎなかつた。若しゲーテが此處でロッテを知る事がなかつたならば、ウェッツラーの四箇月は、少數の交友と美しき自然の思出以外に、ゲーテには多くの不快なる印象を以て交錯された滯在に過ぎなかつたらう。そしてわれらは遂に名篇『若きウェルテルの惱み』を持ち得なかつたらう。

ゲーテのロッテは、ウェルテルのロッテを通して、ゲーテの愛人中最もよく知られてゐる女性である。事實彼女は、ウェルテルの中に描かれてゐるロッテの極めて忠實なるモデルである。彼女がゲーテの求むる女性の典型的なる多くのものを持つてゐた事は、フリデリーケに似通ふものがある。その楚楚たる風姿、素朴なる自然性、『春の朝の太陽』にも似た明朗さ、彼女の前には如何なる祕密も遂に祕密たり得ない明るい心、純眞なる母性型、十六人の兄弟姉妹の第二女として生れ、母を失うた後の家庭の主婦として幼きものを母に代つて育んだこの少女は、誠に『母』以外の女性ではなかつた。彼女の婚約者ケストネルの語るやうに、彼女に命をかけて戀する男性は、ゲーテのみではなかつた。

けれども、彼女は彼等を逃亡させるか、乃至友人たらしめる不思議な手腕を持つてゐた。所詮『母』なる彼女は、感傷を知らない明朗の感情と叡智によつて、遂に『男性』の求むる『女』たり得なかつた。ゲーテは、ロッテを知る事によつて、事實極めて危險なる境遇に置かれたのである。彼女は他の男性の婚約者である。かかるものに對する制し難い熱情は、必然的にウェルテルの運命に彼を驅らんとする危險を孕む。而もゲーテの如き熱情の子がこの運命を克服し得たのは、ロッテの母型的素朴性とケストネルの賴しき男性的寬容とに負ふところが多い。後ゲーテはケストネルに書を寄せて、『予の死なないのは大兄に負うてゐる。卽ち大兄がアルベルトならざる所以である。』と述べてゐるのもげにもと頷かれる。勿論この極度の愛欲の誘惑から彼を救うたのは、ゲーテの中なるデーモンの力强き導きにも依る事は明らかな事實である。彼は正しき事態の認識によつて、この三角關係から自己を撤去する事が愛する者の幸福完成に唯一の必要事である事を知り、いしくもこれを決行する金剛の意力を示して吳れる。ロッテからの別れは、『ウェルテル』の第一卷の最後に見らるる如き世にも悲しき別離ではあつたけれども、而もゲーテは、彼女に別れを告ぐる事なくしてウェッツラーを去つた事は、彼の斷乎たるデーモンの意圖を端的に實行したものである。斯くしてなつかしき四箇月の思出は、寶玉の如くに彼の胸の裡に深く祕められて、盡くることのない詩の泉となつたのである。言ふまでもなくウェッツラーの嵐は容易に靜まるべくも見えなかつた。フランクフルトに歸つた後の一年有

半、『ウェルテル』を書き了へる事に依つて、内的動搖の解放を求め得る迄の間、誠にゲーテは、ロッテの魅惑圏内に捕はれて、懊惱する一個の若者であつた。彼はケストネルとロッテに斷えず手紙を送つて此の自己告白による不斷の自己解放を必要とする程、ロッテへの愛慕は切切たるものであつた。われらは先づ時の順序に從つて、この間の消息を描いて見よう。

九

一七七二年九月十一日早朝、ゲーテはケストネル及びロッテに短い別れの言葉を殘してウェッツラーを脱れる。彼は直ちに故郷に向はずに、コーブレンツのほとりなるラ・ロッシュ夫人を尋ねる爲の數日の旅に上る。嘗ては詩人ウィーランドの愛人として、今は名門貴族の夫人として、且は閨秀作家として、當時の文壇交友の中心をなしてゐる夫人は、青年ゲーテの此の度の訪れによつて、彼に非常に親みのある女性となる。彼はその後彼女を呼ぶに Mama 或は、Mamachen といふ愛稱を以てする。彼女を愛慕するゲーテの氣持には、多分に『母性』を求めるゲーテの本質的なる欲求を見る事ができるが、一つには彼女の長女マクシミリアーネとゲーテとの交渉から由來する。ゲーテが夫人を訪れた時マクシミリアーネは、未だ十六歳の少女であつた。彼女の黑い瞳と美しい風姿は、ロッテへの愛にかき亂されてゐるゲーテの心を和げる爲によき働きを爲した。思出の中には、『古き愛情の未だ全く消え去らぬに、新しき愛情がわが心に動き始めるのは、極めて愉快なる思ひである。夕陽の沈み行く頃、東の空に月の出づるを眺めて、此の二つの天上の光の二重の光輝を喜ぶ思ひがある。』と書き記してゐる。この思出の描寫によつて、『菜の花や月は東に日は西に』の句を想はしめるのどかな戀愛享樂者をゲーテの上に聯想する事は正鵠を缺く。彼のマクシミリアーネに對する愛は、ゲーテ自ら告白してゐるやうに、兄妹の愛情を出でなかつた。從つて、ロッテの愛の代償として彼女にその愛を移したかの樣に思ふのは正しくない。彼女が一年半の後にフランクフルトの商人ブレンターノと結婚する爲に同市に來た時、ゲーテの感じた喜びは、わが妹コルネーリアを結婚によつて失うて、更に新に妹を迎へ得た喜びであつて、そこにはわが戀人を結婚によつて失うた悲みの片鱗だにも見る事は出來ない。從つてブレンターノ夫人に對する甚しき愛著は、淋しき彼の身邊の生活を考へ合せるならば、ゲーテが告白する geschwisterliche Liebe を言葉の充分なる意味に於て信ずる事ができよう。併しブレンターノ氏はこれを許さなかつた。先夫人を失つて新に若くして美しい妻を迎へた『夫』は、ゲーテに於て危險なる『男』を見たのである。素朴なるゲーテはブレンターノの態度によつて、突如自己の『男性』に挑戰せられた。『ウェルテル』の中なるロッテの風姿にマクシミリアーネの面影が忍ばれ、アルベルトに於てブレンターノを見る事のできるは、斯うした理由である。ゲーテの氣持が

純粋であつた丈け、彼を戀仇として彼に臨んだ中年の男の壓力が彼を反撥奮激させた。ロッテの體驗と友人イェルーザレムの自殺の材料が、一團の焰の内に燃上つて、一の藝術たり得た直接の原因が、マクシミリアーネとの交渉に求め得る事も亦充分に理解ができよう。それは一七七四年の春の事である。一七七二年の九月、マクシミリアーネの上に求め得た心のやすらひは、ゲーテの戀愛移行性の迅速さを説明するものとはならない。事實ロッテへの愛著は、フランクフルト歸來後容易に消え難い焰として彼の心をこがしたものである。

フランクフルトに歸つた彼の上には、再び一年前の生活が戻つて來た。唯『婚約せる Braut への愛著』と、身邊の寂寞とが、自己の生活を前よりも一層暗いものたらしめた。歸つてから間もなく、ウエッツラーの友人イェルーザレムが、人妻に對する不幸な戀愛の動機によつて自殺した報が彼を驚かした。『ウェルテル』への動機の一つをゲーテは彼の自殺に求め得たのである。この秋から翌一七七三年にかけての一年は、ゲーテにとつて最も陰鬱な試錬の時代であつた。殊に七三年の春には、彼の身邊うたた索寞たるものがあつた。ダルムシュタットの女友は、或るものは死し、或る者は結婚して同地を去つた。メルクはヘッセンの伯爵夫人に隨伴して露都に旅し、更にロッテはケストネルと結婚した。ゲーテは『詩と眞實』に於て、屢〻自殺を決行しようとした事を述べてゐるが、それは恐らくこの時代の事と考へられる。彼が初めて眞劍になつてスピノーザの『エチカ』を讀み出したのもその年の春の事である。嘗つて病魔の試錬に際して、聖書が生命の書として彼に甦つて來たと同じやうに、此の惱亂焦熱の心境の上に明鏡の如きスピノーザの思想がいかに強く働きかけたかの消息は、ゲーテがその自傳に告白するところである。

此の年の夏、ゲーテは彼の處女作『ゲッツ』を公刊して、文名一時に高く、遂に詩人としての自己の天職が時代によつて承認せられた事を知り得た。『僕は勝つた。譯もなく勝つた。』とその頃の手紙に書いてゐる。詩人としての彼の確信が斯うした言葉に覗はれる。なやましい一年の試錬は、この年に入つて次第に退潮し始める。生と死の戰ひ、それは眞に血みどろの戰であつた。『詩と眞實』では、『併しこの事（自殺）が一度も成功しさうにもなかつたので、予は遂に哄笑一番、一切の憂鬱症的澁面をかなぐり棄てて生きようと決心した。』と死から生への轉向を事もなげに述べてはゐるけれども、抑へ切れない taedium vitae は幾度彼の手に短劍を握らしめたか知れなかつた。而も遂に彼の内なる rechter Kerl は一切を征服したのである。軈て、十二月にはメルクが歸つてくる。七四年早早には、マクシミリアーネの結婚が期待せられる。彼は來るべき年を新なる希望を以て迎へる青年であつた。此の年の最後の手紙に um um um! herum um um! ists nun. と言ふ風な言葉が見える。逝くものは流水の如し。總てを克服し、力に充ち溢れた青年ゲーテの、新しき年を待望して歡呼する姿

が鮮やかに讀まれる心地がする。

けれども來るべき年も、必ずしも快心事のみを以て充たされてはゐなかつた。なつかしきマクシミリアーネは、フランクフルトに來はしたけれども、間もなく前に述べたやうな不快な關係がブレンターノとの間に釀され、彼女からも遠のかねばならなかつた。『ウェルテル』はさうした氣分のうちに、二月一日から筆を起して數週にして書き終へた。夢遊病者のやうに書き續けた事をゲーテは告白してゐる。斯くしてウェルテル的苦患は、この創作によつて完全に清算する事ができた。

此の年に於ける最大の事件は、夏、ラファーテル、バゼドウとラインの旅を共にし、最後にヤコビ兄弟と交りを深くした事である。殊に弟フリッツ・ヤコビの哲學的思想傾向は、當時のゲーテに對する好餌を提供した。スピノーザ研究に於てゲーテより一日の長のあつた彼は、如何に多くゲーテを啓發したか知れなかつた。二人の間の話題は、行を共にした短い旅行中、常にスピノーザを廻つて離れなかつた。殊にケルンに宿つた夜、ライン河に近い客舍に、『七つの岡』の背後からさし昇る美しい月の光が、洋洋たる大河の小波に銀を碎く夏の宵に、心ゆくばかりに語り合ひ、夜更けて寢に就いた後に、ゲーテがヤコビをその臥床に驚かして、スピノーザを論じたのもこの旅の出來事であつた。ヤコビもゲーテと均しく、此の夜の思出を數十年後、尙昨日の如くに忘れ難いものとしてなつかしんで

ゐる。

一七七五年が來た。それはゲーテのフランクフルトに於ける最後の年である。此の年は、若きゲーテの最後の愛人なるリリイ・シェーネマンに捧げられたものであると言つても、誇張ではない。誠にこの年五月の半から七月の末までなされた瑞西の旅行も、十月の末フランクフルトを立つて伊太利へと志し乍ら、遂にワイマルに客となつて、圖らずもそれが彼の終焉の地となるべき運命も、リリイなしには全て考へられない事であつた。若きゲーテの上に次次に起る戀愛譚の連鎖を綜合して、その最後の主環を爲すリリイとの交渉は、ゲーテの女性に對する愛と、彼の『ゲーニウス』の關係を最も純粹なる關係に於て示すものである。ここにも他の場合と同じやうに、愛人からの逃避を以て、ゲーテはそのロマンスを惜しげもなくひきちぎつて、未完成品に終らしめてゐるが、他の場合に見らるる樣な隨伴的な障礙條件が最も少く、從つて最も多く愛の完成の可能性を持つ場合であつたにも拘らず、これをしも敢へてしなかつたゲーテのうちには、如何に愛に殉ずる事を肯じないデーモンが執拗に自己を主張してゐたかを知る事ができよう。ケートヘンの場合は、女性に背き去られたと信じてゐる。フリデリーケの場合に於ては、自責の念を深うしたにしても、實際問題として彼女の健康や境遇が愛の完成を不可能にする原因は認められる。ロッテからの逃避は、言ふまでもなく道德的危險が彼の態度を是正する。リリイに至つては、さうした一切の障礙が存在してゐない。擧げられ得る障礙は、兩

家の家庭生活の不調和、その屬する宗派の相違等の外在的なる原因に過ぎない。是等の事は、若き相愛の二人にとつては言ふに足らない障礙であつたらう。實際リリイは、ゲーテを尊敬し愛してゐた。兩者の間に多くの障礙が立塞がつて、彼等の愛を危くした時、彼女は、これら一切の障礙を克服する爲に、ゲーテと共にアメリカへ渡航せんとする計畫をさへめぐらした程であつた。ゲーテも亦彼女を熱愛した。後年ゲーテは告白して、『眞に彼女は、予が深く眞實に愛した最初の女性であつた。而して最後の女性であつたとも言へる。』と言つてゐる言葉は、單純なる思出の言葉であるに止らない。彼の愛が純眞で深ければ深いだけ、その純眞性を保持せしめようとする試みが、種種の障礙に觸れて、激しい嫉妬の形をとつて燃上つた。一方斯うした愛の苦鬪によつて挑戰せらるる彼の本質、卽ち、創造的衝動の滯頓は、フリデリーケの場合に見られたと同樣に强烈なる反撥力を以て、彼をこの渦の中から撥き出さずには措かなかつた。それが戀愛からの逃避として現れてくる。ゲーテは戀愛の天才と言はれるけれども、事實に於ては累累たる戀愛のトルゾーを殘した戀愛の拙工に過ぎない。愛の衝動の魅惑には、凡ゆる場合、惜しみなく我身をうち委せ乍ら、それによつて目醒まされる裏なるデーモンの至上命令が、氷の如くに自己の愛欲を斷つ事に對しても、彼は極めて素直にこれを受け容れた。そこに彼の態度の矛盾があるにしても、彼はそれを辯明しようとはしない。多くの場合、かかる矛盾は在るが儘の二つの事實として、人人の前に提示せられる。これを解釋するのが彼自身の任務でないかの如くに。

ゲーテがリリイ・シェーネマンを知つたのは、一七七五年の一月の事である。彼女はフランクフルトに於ける有名な銀行家の家に生れて、代表的ブルヂョアの息女である。當時父は既に亡く、母と共に豐かな生活を送つてゐた。ゲーテの彼女に對する戀愛鬪爭は、ライプツィヒのケートヘンの場合に類似する多くのものを示してゐるが、ゲーテ自身の立場からすれば、あたかもケートヘンの場合と正反對に、財力でも、社交生活の華華しさでも、ゲーテの家庭とは多くの隔りがあつた。彼は斯うした社交的雰圍氣に包まれてゐる愛人を多くの焦慮と嫉妬を以て眺めねばならなかつた事は、ケートヘンの場合と同樣である。而してライプツィヒ時代、彼の懺悔僧として彼の告白をきいたベーリシュの役は、此の度はゲーテの未知の一女性に振り當てられた事は、甚だ興味深いものがある。人若し、ゲーテと彼女との關係を知らずに、ゲーテが當時ひたすらに、彼女に宛てて書き送つた手紙をよむならば、彼女も亦ゲーテの愛人の一人であるといふ印象を打消し得ないだらう。然も事實ゲーテは彼女をその長き生涯に於て一度も見ず、リリイとの交渉が解けると共に、彼女との交渉も亦いつの間にか冷めて行つた。それ程純粹なる懺悔僧の役をゲーテに依つて押しつけられた女性である。彼女、ナウグステは、ゲーテの友シュトルベルク伯の妹で、『ウェルテル』に感激してゲーテに書を寄せたのが緣となつて得られたゲーテの手紙の友であつた。彼女がこの役割を喜んだか否かは知らない。兎に角ゲーテ

の戀愛闘爭の記錄は彼女の手許に次から次と書き送られて、如實にゲーテの內面的動搖、矛盾の相をわれらに傳へてゐる。この動搖はリリイを知つて一箇月も經たぬ內に記錄され始める。二月の半ばに斯う書いてゐる。『愛するものよ、御身が若し笹緣のある上著に、頭から足まで可成りしつかりした身の飾りを設へて、色色な人人の間に立交り、壁燈や王冠燈の目立たぬ光に照され乍ら、食卓に就いてゐる二つの美しい眼に見守られてゐる或るゲーテの姿を、更に斷えざる放心のうちに、社交の集りから音樂會へ、そこから又假裝舞踊會へ追ひやられ、輕佻なあらゆる興味を以て、一人の美しい金髮の娘の愛を求めてゐる一人のゲーテの姿を想像し得るならば、御身は現在の「謝肉祭ゲーテ」を持つでせう。……けれども更に今一人のゲーテがある。それは、鼠色の海狸の上衣に褐色の絹の頸卷と長靴をはき、吹きつける二月の風に、既に春の來る事を豫感し、聽てなつかしい廣い世界が再び開かるるを想ふゲーテである。更に、斷えず自己の裡に生き、精進し、仕事をし續け、時には短い詩の內に青春の無邪氣な感情を表現せんと努め、時には種種なるドラマの內に人生の力强き香料を、時には彼の友人や、風景や、したしみある家具をチョークで鼠色の紙の上に、彼相應な力で表現せんと努め自分の制作が他人によつてどんな風にうけとられるかを、右にも左にも訊ねる事をしないゲーテである。何となれば、彼は仕事をしつつ常に一階段づつ高く昇り、決して理想へは飛び上る事をせず、戰と遊戯のうちにその感情を練達の境地へ發展せしめんとしてゐるから。』斯うした對立せる二人のゲーテは、時が經つにつれて益々その抗爭を深化して行く。リリイはゲーテの愛する女性に見らるる樣に、極めて明るく、素朴な自然兒であつた。愛人ゲーテの目の前で、シューネマン家に出入する『をぢさん』達の愛撫を何氣なく受け、その頰に接吻を許す程無邪氣な少女であつた。後年の彼女の生活態度に依つて證明せらるる樣に、彼女はその本質に於て、決してコケットではなかつた。只ゆたかな環境が、花の如く美しい此の少女の無邪氣さにコケットの外觀を與へたに過ぎなかつた。しかし、ゲーテはその爲に多くの苦味を嘗めた。ゲーテの言葉通り、彼は再び天上の幸福と地獄の苦患を體驗したのである。フランクフルトの近くにあるオッフェンバッハの春は、如何に幸福なる愛を二人の上に惠んだかは『詩と眞實』を讀む者の均しく知る處であると共に、アウグステに宛てたゲーテの手紙に於て、次から次と激しい苦惱の昂進し行くのを同時に跡づける事ができる。かくして、此の交渉は遂に婚約にまで進んでその最高潮に達する。それは、三月の末か、四月の初めの事である。しかも此の當時からかけて、それ以後のゲーテの手紙の調子には決して婚約者の幸福は覗はれずして、恐ろしい不機嫌と落著かない動搖をのみ示してゐる。『事情は予を旅へ强ひる。』と書いたり、『一つの混亂から、他の混亂へ落ちて行く。』とか、『自分は例によつて渦卷の中に生活してゐる。』とか書いて、遂に五月半ばにヘルデルに宛てて、『最近僕は家庭的幸福の港と地上の眞の苦樂を持つ不動の基礎に近づかうと妄想したが、遂に不快な方法で再び廣い外洋に投げ出された。』と書いてゐる如くに、シュトルベ

ルク兄弟と共に瑞西、伊太利を志して、リリイにも告げず悠悠旅立つたのである。それは、リリイへの破約の宣告に均しい結果を齎らした。しかしゲーテ自身は極めて素朴に考へてゐた。彼がリリイから遠ざかれば遠ざかる丈け、彼女への憧憬が切實になつて行くのを如何ともする事ができなかつた。七月の末、ゴットハルトの山巓に立つて、南の方伊太利を眺めやりながら、ふとリリイから贈られた金の心臓が、頸に懸つてゐるのを見ると、すべてを打ち捨てて眞に矢の如くに、再びフランクフルトに歸つた。

歸來、形勢は旅行前とは全く變つてゐた。シニーネマン家では、ゲーテのタクトロースなる態度を破約の宣告と解釋したのは、世の常のならはしとして當然のことであらう。ゲーテと雖もリリイとの結婚を實現せしめる意志は次第に低減して行つたにしても、その反對に、彼女に對する愛欲は愈〻强く燃上るのを如何ともする事ができなかつた。永遠に失はれた者に對する思慕は、秋のメッセが始まつて、やがてリリイが賑かな社交の中心となればなる程、戀愛の苦味を滿喫する事を餘儀なくさせられた。『自分の氣持は、毒を食つた鼠の樣なものであつた。鼠はすべての穴に走り込み、凡ての液體を啜り込み、手當り次第の食ひものを食つては見るが、彼女の胸は消し難い毒火に燃える。』とその時の自分の胸中を述べてゐる。何人も、これは『ファウスト』のアウエルバッハの窖の場面に見らるる歌の心であるのに氣が附くだらう。

かくしてゲーテは再び旅を思ふ樣になる。豫てワイマルの大公がゲーテにワイマル來遊を慫慂してゐたが、十月半ばに迎への馬車が來る事にまで此の招待が具體化した。ゲーテは決意した。定められた日が近づいた。ゲーテは友人達に別れを告げて、一切の旅裝が整へられた。それにも拘らず、約束の日が來ても迎への馬車は見えなかつた。もはや旅に出た事になつてゐるゲーテは、その日から部屋に閉ぢ籠つて詩作に專念した。その時書かれたものは『エグモント』の草稿である。馬車は容易に來さうにもなかつた。夜、マントを頭から被つてフランクフルトの街をさ迷ふゲーテの姿が時時見られた。リリイの窓の下にも幾度か立つた。遂に彼は十月末ワイマル行を斷念して伊太利を志した。リリイには暇を告げなかつた事はロッテの場合と同樣であつたが唯密かに自己の日記に、彼女に宛てた別れの言葉をかきしるした。『リリイよ、さらば、リリイよ、二度目のさらばだ。第一回は、まだわれらの運命を結合せんとする希望を以て別れた。事は決した。われらは、それぞれ、自分自分の役を演じ終らねばならぬのだ。……und du! どう自分はおんみを呼んでいいか、自分が春の花の樣に心に抱いたおんみを。』

彼の馬車がハイデルベルクまで行つた時、ワイマルの馬車が彼のあとから駈けついた。かくして彼はワイマルの客となるべく再びその旅程を變へた。彼はつくづく運命の不可思議なる動きを感じねばならなかつた。『見えざる靈に鞭うたるる如くに、「時」の日輪馬は、われらの運命の輕車をつけて疾

驅する。われらに殘されたるは、勇敢に手綱を堅く握り、時には右に、時には左に、ここには石、かしこには轉落から車輪を避ける丈けの事である。それがいづくに行くかを誰か知らん。いづくより來れるかも思ひ浮ばぬに。』ゲーテは、此のエグモントの言葉を以てその若き日の思出『詩と眞實』の筆を擱いてゐる如くに、われらも亦、ここで若きゲーテの生活の素描を了ることにする。

洵にゲーテの生活行藏は、彼の衷なる『ゲーニウス』の動きにわが全身を委ねて、全幅の力に大地を踏みしめ踏みしめ、不斷の精進を熄めない『眞男子』の姿を最も鮮やかに提示するものである。その姿は最もよく彼の歌『旅人の嵐の歌』に見られる、わが衷なる『ゲーニウス』に托乘して、嵐をついて進む力强き青年は、ピィートンの龍を蹂躙るピティウス・アポロの姿である。彼の生活態度は、常に自己の行藏を道德的批判の下に反省する事をやめない主知的啓蒙思想から脫却して、よしあしの批判のかなたに宗教的とも見らるる熱情によつて、その全人を生かし切らうとする態度であつた。それこそは、シュトゥルム・ウント・ドラングの思想を自らの生活態度のうちに如實に實證したものに他ならなかつた。彼は最も勇敢なる生活者であつた。生活の冒險兒であつた。安全なる生活は、敎へられたる生活の道を進む者にのみ與へられる。敎へられざる道を突き進むものは常に大なる危險に曝される。衷なる『ゲーニウス』を信ずるものは、此の危險に挑戰してそのゲーニウス自體の持つ力の進展を生の限り享受せん事を求める。此の力の進展の道が卽ち彼の生命のリズムとして跡づけられるものである。ゲーテの生活は、あたかも、愛の物語の連鎖であるかの如くである。事實、愛は彼の若き生命の大動脈をなす。此の動脈の搏動に於て最も鮮明に彼の生命の分極的律動を見得た。求めては逃れ、逃れては求むる目まぐるしい動搖、遠心と求心の衝動の交錯、プロメートイス的創造の迫進と、ガニメート的歸依の法悅は、此の愛の生活を中心にして最もよく見る事ができるものであつた。かくして、それが恰も無限の反復を提示するかの如くにして、而も事實に於ては、人格の無限の昂進成長を意味する。ゲーテの持つ本質的生命のリズムは常に常恆なる基調をなすものであるけれども、その基調の上に築かるる人格構成は不斷に、自覺の至純境に向つての高揚を語る。不斷に、不純から純粹へ、材料的なるものから解放されて、純粹形式への生活の進展がある。これがゲーテの生活態度の本質をなすものである。而して若きゲーテに於て、此の生活態度が、最高度の强さ、速さ、明澄さに於て示されてゐる。父から享けた『力の人』、人格的統合の意力は、母からの賜物である、限りなき『愛の人』『我』の解體の衝動と融合して、そこに微妙なる『人間ゲーテ』の交響樂を奏で出づる。『若きゲーテ』は、此の交響樂のすばらしい序曲であり、それ丈けで已に全曲を偲ばしむる完璧の藝術である事は前に既に述べた如くである。

十

ゲーテが反復して云ふ様に、彼の藝術は常に彼の體驗の告白である。否懺悔である。それは單純なる藝術化といふ以上に、藝術が自己の存在と成長の依存する生命の重大要素である事を意味する。彼は自己の生活の苦惱を藝術に構成する事によつて、初めて之を克服し、より高き世界に超躍する事ができたのである。故に藝術はゲーテに取つては、遊戯ではなくして運命であつた。自己の存在に對する必然的條件であつたのである。『詩と眞實』の中で、孤獨と苦惱のうちにおかれて、たよるべき何のものも失はれた時、卽ち『最も救濟を必要とした刹那』に彼に呼ばれたことは、『醫者よ、汝自らを救へ』といふ聲であつた事を述べ、遂に此の窮地から自己を救ふべき最も確實なる基礎は『自己の創造的才能』である事を知つた事を附け加へてゐる。若きゲーテは、此の創造の力によつて、次次ぎに彼に現前し來る苦惱の試錬から自己を解放し得たのである。故に彼の藝術はそのまま彼の生活體驗の最も純粹なる反映である。彼の生命のリズムは、最も純粹なる形に於てその藝術に現れねばならない。若きゲーテの素描は、人としてのゲーテの姿を彷彿せしむると共に、詩的業績の上に刻印されたゲーテを觀察する事によつて、更に彼の本質性を明らかにしなければならない。予の最初の計畫は、『生

活人』と『詩人』なる二つの側面から若きゲーテを見る事によつて、彼の姿を描き出さうとするにあつた。けれども、予に與へられた紙數は、充分にその目的を遂行する事を不可能にする。唯、若きゲーテの藝術境に關して、僅な言葉が許さるるならば、そのライプツィヒ大學時代から、フランクフルト最後の時代に至る十年間に於て、彼の藝術境が如何に急速なる成長の跡を示してゐるかを擧げねばならない。ライプツィヒ時代の彼の制作は、尙、時代の影響のもとに立つて、抒情詩はアナクレオン詩派の作風を脫する事ができず、劇作の試みの如きも、舊來の牧人劇の模倣を出でない。自己の體驗を材料のうちに盛らうとしても、自己の詩的構成力が未だ充分に力强く動いて居らない爲に、素材が一つの有機的統體たる藝術作品としての形式にまで生きて來ない。素材と形式とがそれぞれの存在として併存するに止まつてゐる。素材は自己の體驗であらうとも、これを盛るべき形式が未だ獨自の構成力を持つ所謂內的形式の具現にまで成長せずして、依然として舊來の藝術態形の領域を出で得ないのが、ライプツィヒ時代の詩風であつた。

然るにシュトラースブルク時代に入つて、その詩風が一變する。恰もその思ふ處を充分に語り得なかつた幼兒が、或る期間を經過して、突如としてその舌のもつれを解かれて、語り出づる樣に眞に自己のうちにある創造の軌道から一切の障礙が取除かれ、感情はそれ自らを裝ふべき言葉を容易に見出し得るに至る。試みに、ライプツィヒ時代に屬する處の詩集『新詩集』とシュトラースブルク及びそ

れ以後の抒情詩、例へば『五月の歌』『迎へと別れ』『旅人の嵐の歌』『湖上吟』等を比較するならば、誠にその作者が別人であるかの感を受ける。それは詩人としてのゲーテの著しき成長を語るものである。詩人としての成長は、感情がおのれ自身の言葉、おのれ自身の形式を發見する事に外ならない。尙一層適切には、感情の强さが遂に外在的一切の强制形式を破碎するまでに、自己の内的必然性を以て盛上つて來た事を意味する。それ丈け又、その表現内容が詩人の生命の端的なる提示の度を強めて來る。プロメートイス的傾向とガニメート的傾向が、生命の分極的リズムとして抒情詩の上に次第にその純粹さを增大し來るのはシュトラースブルク時代以後である。

この傾向は抒情詩以外の作品に於ても見る事ができよう。勿論、劇乃至小說にあつては、詩人の感情の直接的表現以外に、取扱はるべき材料、詩人の外界に對する關係の複雜性、又詩人の思想領域の一層廣い範圍と關係してゐるが故に抒情詩に見らるる生命のリズムの單純さはないにしても、それにも係らず、若きゲーテのそれらの作品のうちには、彼自身の生命のリズムがそのまま、シュトゥルム・ウント・ドランングの潮流の最も代表的なる光波として輝いてゐるのを見る。在來の劇風に一轉期を齎らした『ゲッツ』は、當時の若き人人の均しく求めてゐた純ドイツ精神の本質的表示として、中世騎士の剛健誠實なる人物を主人公として描くに成功した。ゲーテは、此人物のうちに自由と正義の爲に一生を戰ひ拔いた『眞男子』卽ち力の人を描いてゐる。此の意志と力の人物に對して、『ウェルテル』はまさしく一つの反極を示してゐる。彼は殉情の人であり、自己の内的生命に沈潛して、そこに幸福を見出さんとする青年である。彼は自然の美に陶醉して宗敎的忘我の境地に入る事を喜ぶ。けれども自己に抵抗する外界の力に對してプロメートイス的意力を以て克服せんとする事は不可能であつて、他くまでガニメート的放我の人である。而も、ゲッツと通ふ處は、自己の本質に忠實であつて、その純粹性を冒され或は感情の自然なる流露を阻止せらるる時、卽ち自己の本質の存在を續ける事を不可能と考へる時、自殺によつて、その生命の純粹性を護らんとする決意を持つてゐる事である。卽ち彼も亦自己の自由の爲に死を恐れない青年である。唯ゲッツは能動的といふ事ができるならば、ウェルテルは實人生に對して、受動的である。兩者均しく當時の青年の類型であると共に、若きゲーテの分極性を示す代表的人物であらう。

その他未完成の作品であるが、劇詩プロメートイスと劇マホメットの對立に於ても亦、同樣なる分極關係を見る事ができよう。神に反抗して人間を創造する前者は、神への切なる憧れの心に、自然の至る處神の息吹きを認知する後者に對して好個の對立である。而して此の分極對立が一個の藝術品に於て、その渾然たる統一たらんとする傾向を示すものは均しく未完成の『ウルファウスト』である。『ウルファウスト』は卽ち現在われらの持つファウスト第一部の未完成形のものであるけれども、前二者に比較すれば殆んど完成と言つても過言ではない。殊に『グレートヘンの悲劇』の部分は、大部分

完成してゐると見てよい。未だ筆を染めない部分と雖も、全體的には必然的に補はるべく豫想せらるるものである。例へばファウストとメフィストの契約の場面とか、グレートヘンの悲劇に移る前にファウストの青春復歸等の動機づけは、未だ、『ウルファウスト』に見られないにしても、それは決してファウスト劇全體の相を崩す程のものではない。巨大なる大理石像の全相が已に成つて、唯細部に於ける仕上げが完成しない程度のものである。洵に此の素材、十六世紀に發生した純ドイツ精神を象徴するファウストの傳說は、ゲーテに取つては、自己のたましひ、自己の感情を注ぎ入るべく最も適切なる材料であつた。若きゲーテはその思想と感情の全幅を傾けて此の素材に向つた觀がある。その巨大なるプロメートイス的精神、卽ち自己を『神に均し』と見るファウスト的創造の精神と、素朴なる少女に全我を擧げて慕ひよる優しき愛の心とは、いづれも、その最强度の深さと純粹さを以て、こに脈搏つてゐるのである。此の作品が若きゲーテの制作系列の最後に立つ事は、彼の青年期の完了を、それによつて象徴し得る意味に於て極めて興味深いものである。ゲーテに於ける內面的成長の顯著なる一特質は、彼の分極性が漸次自覺のうちにその抗爭の强度を加へて來る事である。ファウストの所謂『二つのたましひ』の爭である。若きゲーテの最後に立てる地點は、此の分極矛盾の一階梯の頂高にある。そこから彼は、やがて來るべき調和の世界を遙かに見渡し得るのである。そこに立つゲーテの携へた『ウルファウスト』が、或る意味に於ける完成の相を示しつつも、尙彼の創造生活の不斷の伴侶として遠き未來のかなたに、その完成の日を保留する事は、若きゲーテに課された任務をわれらに想見せしめ、彼の進むべき限りなき精神の道、異常なる成長の道を深めやるよすがとして興味深い。深き知的要求と個人的愛の苦惱から始まつたファウストの道が最後に『行』の世界に、人類への愛のよろこびに廻入し終る事は、そのままゲーテ自らの生涯を象徴するものである。『ウルファウスト』は、此の進展過程をその萌芽の形に於て暗示すると共に、『若きゲーテ』の相も亦、彼の全生涯のピラミッドを構成すべき基底として置かるる意味が明らかにされる。

ゲーテに於ける宗教的信仰の基礎を構成するもの

——『牧師の手紙』を中心として——

『われらの口にする一切事は信仰の告白である。』――といふゲーテの言葉は、彼の宗教觀の標語として最も明白に彼の宗教觀の內包性を表示し得るものである。卽ち彼の宗教は、彼に對する學としての對境でもなく、興味の對象でもなく、彼の存在と相分つことのできない生命の根幹である。『人』としての彼にその特殊性を付與する力である。彼の一切の表出はこの力を背景としてのみ考へられる。故にゲーテは『詩と眞實』の第十五卷に、『信仰とは、各人がその感情、その悟性、その想像力をできるだけその爲に犧牲にせんとして要意する聖なる容器である。』と定義してゐる。彼に於ては信仰は卽ち彼の存在の大前提である。彼の一切の活動は、一度その聖なる容器に捧げられ、そこに燃ゆる淨火にその刻印を受けて初めてその特殊性を得來るものである。勿論ここにゲーテが意味する信仰は、一定宗教に於て規定せらるる信仰箇條に對する信順ではない。基督教國に生れ、最も宗教的世紀なる十八世紀に人となつて、而も正統基督教徒間に於て、場合に依つては『異端』としてさへ排斥されねばならなかつたゲーテの信仰は、決して一定型の宗教に隨從する性質のものではなかつた。寧ろその從順ならざる事實が最も多く彼の信仰內容の生命に充ちたものである事を指示する。何となれば、信仰が生命に充ちてゐる事は、信仰が『人』に卽してゐる事を語るが故である。生きたる信仰は、生きたる『個性』にのみ依屬する。この事は、ゲーテが不斷に反覆し述べてゐるところである。

『詩と眞實』の中で、『各人はその獨自の宗教を持つ』と言ひ、自己に關しては、『予の基督は、予の意味に於て彼獨自の形態をとつた』ものであり、從つて『予は一の基督教を予の個人用（Privatgebrauch）の爲に構成した』ものであると言つてゐる。この意味に於ては、彼も亦一個の基督教徒である。併し彼の信ずる神乃至基督は、當時の神學が思惟するが如き意味に於てではなくして、最も原始的な素朴な宗教感情に映じた基督乃至その神であつた。併しその事は、彼の宗教性が、原始基督教徒と均しい素朴性であるといふ事ではなくして、その深い宗教的體驗と、當時の宗教思想に對する鋭い批判的精神から由來する獨自の宗教觀が、偶〻彼を原始基督教的態度に近づけたものである。青年期のゲーテの基督教に對する態度を極めて如實に傳へてゐるものは、彼のウェッツラーの友人ケストネル――ロッテの婚約者――がゲーテに就て書き記した言葉である。『彼（ゲーテ）は、オルソドックスと呼ばるべきものではない。……彼は教會へ行かない。聖餐にも行かない。祈禱する事も稀である。何となれば予はさうする程僞善者ではないと言ふのである。……基督教に對しては、彼は尊敬を持つてゐる。併し、神學者諸氏が抱いてゐるが如き姿ではない。彼は來世を信じてゐる。一つのよりよき狀態を信じてゐる。彼は眞理を求めて精進する。而もその眞理の誇示よりは、眞理の實感を重んずる。』ケストネルのこの言葉は、當時宗教に對するゲーテの態度が、彼の接觸する人生の他の分野と等しく、飽くまで獨自の立場をとつて進まうとする彼の天才性を示すものである。當時ゲーテがラファーテルやフリッツ・ヤコビ等の宗教界及び哲學の先進に對しても、信仰を論ずるに當つては、自己の信仰的體驗の上に立つて一歩も讓らない論理の確かさを用ゐた。基督教徒の間に不評なるスピノーザを以て最も眞實なる基督教徒なりと主張し得た事も、要するに自己の宗教的體驗を通して色讀したスピノーザの認識に基くものである。

ゲーテの宗教的體驗及びその純眞なる信仰から生れた彼の宗教觀の內容が、如何なるものであるか。之を檢討することがこの小論文の目的である。殊にゲーテの青年期の宗教觀の綜合的敍述と見らるべき『牧師の手紙』を中心として、彼の宗教的體驗の內容を檢討せんとするものであるが、それに先立ちて、彼の宗教論が上述の如くにその根柢を當時の神學的思惟の上に置いたものでなくして、彼の宗教的信仰の內發的要求から發したものであることを强調する必要がある。何となれば、彼の宗教論の特異性がこの事實によつて初めてその意義と價値を增加し、彼の人格存在と不分離の學的表白であることが明らかにし得るからである。且、宗教的雰圍氣の內に人となつて、定型的信仰をその少年期以來注入教育せられたものにとつて、この甲殼を碎破して獨自の信仰の新天地を開拓することは極めて困難なる事情であることを了解するならば、この點に於てもゲーテの天才の異常性を知ることが出來るのである。

ゲーテは『詩と眞實』の中で、自己の青年期、卽ち十八世紀中葉以後の時代を總觀して、『當時思

想問題は俗世界から宗教界に遁入した』と述べてゐる。宗教問題が思想界の中心を構成して居り、從つて文化運動に參加する程のものは盡く、宗教に對して、自己の態度を明にせんとしてゐる。故にゲーテも、宗教と文學以外に哲學を必要としなかつた事を述べてゐる。何となれば哲學は既に前二者に包攝せられてゐたからであると言ふ。然して宗教と文學の關係も亦極めて緊密なる關係に立つて居り、文學は宗教觀の告白であり、宗教的信仰は文學によつてその具象的表現を得るの觀がある。ゲーテの青年期の偉大なる諸作品の系列を追うて考へるならば、何人もこの事實を否定する事ができない。偉大なる未成品、『ウルファウスト』『プロメートイス』『永遠のユダヤ人』『ザテイロス』等悉く詩人の宗教觀の告白ならざるはない。告白小說『若きウェルテルの惱み』さへも、詩人の宗教的觀點の理解なくして充分にその思想內容を了解することが困難であらう。更にゲーテの自傳『詩と眞實』は青年期の描寫といふよりはむしろ一學者否一神學者の夫れであると評してゐる言葉に多くの妥當性を見ることが出來る程宗教觀的色彩の濃厚なるものがある。

ゲーテの青年期の制作が、かく宗教的色彩を以て織り成されてゐる事は、彼の成長した世紀が宗教的であり、從つてその受けた宗教教育が自らこれらの發表の上に反映してゐるとのみ見るべきではない。時代的反映は否定し得ないにしても、與へられた宗教思想に對するゲーテの本質的生命の潑剌たる反應の表示、卽ち強き曲折度をもつ反映であることに注目する事が重要である。この反應乃至曲折を招來すべき契機は、彼の生涯の如何なる時期に見らるるか。彼の宗教性の初發的なる徵候として好んで擧げられるリサボンの地震に對する少年ゲーテの感懷、或は神に近づかんとする素朴なる試みの告白の逸話は嚴正なる意味に於ては、少年期の宗教的雰圍氣、或は當時受けたる宗教的教育の單純なる反映と見るべきであつて、未だ宗教的自覺のファーゼに達せざるものである。彼の宗教性の覺醒と宗教觀の決定的な基礎は、ライプツィヒ時代の末期に於て見られる。彼のライプツィヒ在住の三年は、一般に知られてゐるやうに、學的成業は全然失敗に終つたものではあつたが、嚴格なる父の檻から初めて解放され、人生の自由なる外氣に觸れてその人格的試錬を受けた方面から考へるならば、『人間ゲーテ』の爲には寧ろ惠まれたる時代でなければならない。而してこの惠み多き時代は、同時に彼の生活に於ける最初の危機を以て終る。戀愛の苦味と放恣なる生活の結末は、彼の精神も肉體も共に破產に瀕した事は傳記の示すところである。激しい喀血に續く苦惱の幾日かは、若きゲーテの驕れる心をその根柢より碎破折伏すべき鐵槌として彼の上に打下ろされたものであつた。彼は眞に生死の巖頭に立つたのである。斯うした境遇に於て示される人の好意は最も深く人の心にゑりつけられる。友人の心をこめた看護はその人人が平素傲岸なるゲーテによつて傷つけられてゐた人人であるだけ、ゲーテに深い印象を與へた。ゲーテは『詩と眞實』の中で、自己がこの好意に『値しない』もの

なる事を述べてゐる。殊に彼に忘れ難い感銘を殘したものは、彼の同宿の神學生リンプレヒト及びランゲルである。この二人は、ゲーテの打ちひしがれた心に基督の福音の種を新に蒔いたものである。ゲーテは、病軀を擁してフランクフルトに歸つてから間もなくリンプレヒトに書を送つて、『大兄こそは、小生に眞實の福音書を說いた最初の人なのです。』と言ひ、更にランゲルには、『確かに大兄の教示が小生に如何なる結果を招來したことかは、小生の承知してゐるところです。卽ち宗教に對する愛と寬容、福音書に對する友愛、言葉に對するより聖なる崇敬、要するに大兄の爲し得た一切に對する崇敬がそれであります。』と書き送つてゐる。或は、『大兄の愛と大兄の誠實のみが、これら一切を爲し得た。』とも述べてゐる。これらの告白に依つて知られる如くに、少年時代からゲーテの最も親しみ來つた書なる聖書が、今にしてその生活の危機に再び彼の魂を以て讀みかへさるべく蘇生したのである。『救世主は遂に予を摑んだ。予は彼にとつては、餘りにも長く、餘りにも早く走つたのだ。彼は予を毛髮を摑んでとらへたのだ。』ともランゲルに書いてゐる。斯くしてゲーテは甦生する。彼が是迄とは全く異なつた人間になつたとの告白は、『詩と眞實』の思出の中に於てのみならず、當時既にフランクフルトからの手紙に於ても見らるる所である。更にこの『難破者』を迎へてその宗教的信仰をはぐくみ育つべく運命づけられた『美しき魂』ズザンナ・フォン・クレッテンベルクとの故鄕に於ける魂の交友は、餘りにも有名である。次いでシュトラースブルク時代に入つて、ヘルデルとの交友によつて愈〻宗教的信念と見地が確立するに至るべき歷史的過程はここに述べる餘裕もなく又その必要もないであらう。唯我等の必要とするところは、彼の宗教觀が敎へられた信仰箇條の上に立つものではなくして、大死一番の後に獲得せられたる體驗の上に築かれたものである事の充分なる認識である。この認識の下にわれらは若きゲーテの信仰告白とも言ふべき『牧師の手紙』を檢討しよう。

此の論文は一七七三年の春に發表されたものである。形式は或る牧師が隣接の教區に新任された若き牧師に宛てて、自己の信仰を告白しその所信を述べたものである。卽ち亡き先任の牧師が嚴酷狹量なる基督教徒で、『異教徒が永遠の業火に燒かれなければ基督教徒たるの喜びを覺えない。』といふ人物であつた。その爲彼の教區も自然その風になじんで極めて苛酷であつた。從つてそれと隣接する自己の教區もその影響に依つて甚だしき迷惑を感じた事を述べ、新任の牧師にその事のないやうに警告し、併せて斯くあるべき信仰を說いたものである。先づ自己の立場は、亡き牧師とは反對に、自己にとつては、『異教徒斷罪の教理はあたかも熱鐵の上を急ぎのがれるやうに囘避してゐる教理の一である』事を告白してゐる。此の『寬容』(トレランツ)の思想がこの手紙に見られる重大なる點の一つである。嚴格なる基督教徒は、寬容と無關心とを同義に解して、異教に對して嚴峻なる事が卽ち自宗に熱心なる證左であり、從つて他宗を寬容することは自宗に對して無關心であると斷定したのである。併しそれは大なる謬見であらねばならぬ。たとひ『眞理の永遠にして唯一なる泉が、寬容であるからとて、それが

無關心とは言ひ得ないと同樣に、自己の救濟を確保せんとする心が無關心を應面もなく公示するのはあり得ない事である。』この求道の心は眞理を求むるには全人的なる熱を以て不斷の精進努力を惜むものではない。その意味では極めたる自利の心とも見られる。短き人生に於て自己の求道のために、他を顧る暇のあらう筈がない。先づ第一に己れ自身の Seligkeit（淸福）こそ大事であつて、他を責める暇はない筈である。然るに多くの宗門の學者達は、己れを顧るよりは他宗を責めるに急であつて、それらに指導せられる信者は誠に不幸なる信仰生活に終始せねばならぬ。絶えず爭鬪のあらしの海に漂蕩して心は常に靜まらない。誠に諍論の場には諸〻の煩惱起る。パストール＝ゲーテが『我等の魂は單純で平和に生れてゐるものだ。この魂が諸種の對象に分裂する限り、懷疑するものの最もよく身に覺えのあることを感ずる。』と言つてゐるのは、正さしくこの諍論より起る煩惱によつて眞實の道を忘失する事を說明してゐるものである。眞信を求むるものの唯一の關心事は、神であり基督のみである。その他の事は總て無關心事である。而して異敎徒に對して寬容であることは、この唯一の關心事、卽ち『眞理の泉』の認識愛慕から自ら發する態度であつて、不自然に外部的道義の命令から出たものではない。この消息を說明する爲には、どうしてもゲーテなるパストールの神に對する考方を見る必要がある。これが彼の宗敎觀の最も重大なる點である。彼の神觀を說明する場合に忘れてはならない前提は、彼の信仰は決して神學上の知識から發したものではなくして、經驗から生れた認識であることである。『自分は年老いた。そして、人間が敬虔な靜けさのうちで爲す事を許される限り、主の道を觀察し來つた。君も自分程の年配になればやはり悟れるだらう。』云云と述べてゐる。故に聖書をよむ態度でも決して宗學者の學智的態度ではなくして、經驗的に感受する事を主としてゐる。『聖書の神聖さを、感じ得ないものにそれを證明し得ようとは思はれない。少くともその必要があると思はれない。』と言つて、主知的なる理解を排斥して、『われらの僧侶が最早直接的なる啓示に就ては何等知る所のないのは悲むべきであり、聖書を註解書から理解しようとする基督敎徒は悲むべきでもある。』とも歎いてゐる。『よしんば、幾百度書き誌されてあらうとも、各人の心に於て證明され得ないやうな事は述べぬがよい。』と言ふ風な警告から考へても、彼は飽くまで生きた信仰、生生ましい感情にうるほされないやうな言葉は、如何に論理的な正しさを誇つても、信仰の立場から價値を置く事ができないと考へてゐる。勿論神と基督に接し得る唯一の手掛りは聖書の文字である。從つてその文字の解釋は必須の條件であるが、文字の解釋は文字の背後に在る神の相に接する事が大事であつて、文字そのものの詮索が問題ではない。聖書の解釋者の多くは唯この詮索に終始して、體驗を以て文字の背後に生動するものを色讀する事が出來ない。信仰を以て讀まないものには聖書と雖も死書にすぎない。牧師はその長き信行によつてこれを讀んで來た。その理解は正さしく fühlen といふ文字を以てのみ現はし得るところのもの、全身的なる理解である。この全人的認識によつて悟り得たところの

ものは何かと言ふに、『神と愛は同義である。』と言ふにつきてゐる。神は愛なり。何といふ直截にして簡明に、且つ徹底した表現であらう。この命題からこの牧師の神觀が發展してゆくのである。

神は愛なり。愛としての神の認識は直接的でなければならぬ。個人的體驗的でなければならない。何となれば、愛は論理的なる推理からは生れず、この命題は學的研究の結論としては生れることが不可能であるからである。愛は常に直接なる感情である。愛は感じ得る人にのみ存在し得る經驗であつて、感じないものには如何なる說明を以てしても全く理解することのできない性質のものである。先に聖書の神性を感じ得ぬものには理解され得ないと言つたと同一轍である。牧師の結論は聖書のこの言葉の新しい體驗に基いてゐる。二千年近くの間言ひ古された聖書の言葉は、常に新に體讀色讀せられなければその意味が生きて來ない。換言すれば、言葉が Tat となり力となり得ないのである。眞理が常に古くして而も常に新しいのはここにある。眞理が嘗つて偉大な個人の體驗に裏づけられ、表現を得て、それが更に新に他の個人の體驗として無限に再生してゆく可能性を持つ所に眞理の尊さが在る。今牧師の上に神は愛なりとの言葉が再生し來つた時、その愛は神の愛、卽ち絕對的の愛として現れて來たのである。從つてこの愛に對する彼の態度は自ら決定されて來る。夫れは愛に對する絕對的なる信仰と、深き感謝でなければならない。『兄弟よ、我が信仰の確實性にもまして神に感謝すべき何事もない。』信は愛に對する解答である。絕對愛の認識は絕對信の形式として現れて來る。信仰は神の愛に對する神への愛である。卽ち人間を通して現れて來る神の愛にほかならない。あたかも太陽の光線が物に觸れて反射するやうに同一なる光線の屈折せるものに他ならない。故に信の源も亦神の愛である。從つて又必然的にして絕對的なるものである。個人に屬してゐるやうで個人の意志に據らないものである。『わが信するはわが責任に非ず。』(Is ist meine Schuld nicht, dass ich glaube.) である。凡ては否應なしである。而してこの超個人的なる力、強制的とも見らるる力が個人の意志と渾然として調和して自由の天地を開發するところに信の世界が生れる。それは法悅の世界である。その悅びは絕對者に對する感謝以外の何ものでもない。神の愛の認識は信仰と感謝として表れそれ以外に何等の德行も神は要求しないのである。神の國に入るものは、信仰が唯一の手掛りであつて、所謂自力修業の雜善は、一つとして絕對なる神の愛を購ふの代償とはなり得ないものである。我が罪を購ふ代償として德行を勵むならば、夫れは神の愛を必要とせざるものの態度である。而も神の愛を目當てと稱してゐるのは、その事既に矛盾であらねばならぬ。パストール"ゲーテは言ふ、われをして selig ならしむるものはわれらの Werke ではなくして、Glauben である。若し Werke によるものとすれば、原罪の重荷を負うてゐる我我は、永劫に救はるべき筈がない。この救はれ難いものを救ふ不思議を現はしてゐるものが神の愛である。『何となれば原罪に對してはわれらが責を負ふことが出來ない。現實の罪障に對しても亦同樣である。夫れは足を持つものが歩くと

同樣自然の數である。それ故に神は Seligkeit のためには何等の Taten も Tugenden も要求せずして、最も單純なる信仰 (einfältigster Glaube) を要求する。』これが牧師の信念の眼目である。彼はこの信仰一つで天國に入ることを信ずるものである。

扨て神は愛なりといふ命題が、如何にして人間の體驗となり得たか。如何にして『永遠の愛』が人間の認識たり得たか。卽ち絕對者が相對者に理解せられ得るやうになつたか。有限者が無限者を理解することは無限者の善巧方便なくしては絕對に不可能であらねばならない。卽ち無限者が假に有限者の形として現れて來ることが必要である。基督こそ實にこの『永遠なる愛』が方便として現れた人間である。『われわれは信ずる、永遠なる愛が人間となつた所以はわれらの欣求するものをわれらに齎らす爲に他ならない。』又言ふ。『予は千幾百年前にイエス・キリストの名の下に暫時の間世界の一小區域にさまようた神の愛 (Die göttliche Liebe) への信仰を我が Seligkeit の唯一の基礎と考へる。……』何故に神が人間になつたかと言ふに、『そは、神が人間となつたのは、われら憐むべき官能的生物が、神を理解し得んが爲である。故にそれを再び神に爲さんとするのは極力避けねばならぬ。』と言ふのである。切なる神の愛がこの不思議をなしたものであるが故に、われらは唯この不思議をそのまま受けて感謝すれば足りる。神がその愛を基督の上に示した端的なる事實を率直に受けるのが信仰人の態度である。然るにこの人間基督を更に理論の遊戯によつて神にまで高め、絕對の世界を種種に忖度することは、不遜な態度であらねばならない。『永遠なる神の愛は、この世の不幸の中に混入して自ら不幸となつた。それはこの世の不幸がこの愛と共に光榮を得る爲である。』牧師にとつてはこの神の永遠なる愛を告知せられるより以上の幸福はないのであつて、これを經驗すれば最早死してうらみなしと言ふのである。たとひこの世に於て不幸のうちに沈湎しようともそれは基督と共であると言ふことが心を常に明るくさせる。何となれば、『われは基督を愛する。そして彼を信ずる事を神に感謝する』ものであるが故である。彼と基督との關係は、端的なる愛でつながれてゐる個人的愛情の強さにまで高まつてゐるから、基督は常に彼の上に活きて働いてゐる。故に『偏に親鸞一人の爲』と言ふかの歎異鈔の言葉に照應する切實なるものとなり、本來普汎的全人類的なるべき宗教愛も、實感としては神とわれと對坐する個人關係に集注せられるのである。あたかも、空間に充ちてゐる太陽の光線が凸レンズに會つて集注せられ再び鋭き熱となつたと同樣である。生きたる宗教はまさしくそこまで行かねば眞實の信仰たり得ない。ゲーテが他の論文で『唯一の有用なる宗教は單純にして温かでなければならない。』と言つてゐるのは誠に至言である。世に太陽の光ほど鮮明であり温いものは無い。

かく牧師は自己の救濟の道を神の愛が人間となつた基督への愛と信に求めて、その辿つた道を自己が天國に生きるべき唯一の道としてゐるのであるが、然しそれかと言つてこれが神の愛の現れ得る唯一の道であるとは考へない。自己にとつては成程唯一無二の道であつて、それ以外には救はれ得る手

段方法があるべしとも思はれないが、神に對する感謝と悦びの急なる餘りに、これをのみ唯一無二の神の愛の表現方法であると斷定するのは危險である。神の意志を忖度する事は最も不遜なる態度であらねばならぬ。『天文學者の誤算は、幾百萬哩であらうか。況して神の愛の局限を測定しようと思ふ者は尙一層の誤算をなすことであらう。神の道は幾通りあるか自分は知つてゐるか。自分の知つてゐるのは、自分は確かに自己の道によつて天國に至ることである。而して神は、他の人人がそれぞれの道に依つて天國に入る事を助けることを望む。』この寛容の態度は愛の絶對性を信ずるものの自然持たねばならぬ態度である。神は自己の個性に對して唯一者であるが如くに、他の個性に對しても絶對の唯一者として現れ得ることを認容せざるを得ない。「神の愛は唯一絶對である。それ故にこそ無限の差別相に轉移する自在性をもつてゐる。唯一絶對性とは、石のやうな唯一ではなくして、無限の個をそれぞれ滿足せしめ、生かし得るだけの無限の性能を意味してゐるのである。„Wenn man's beim Lichte besieht, so hat jeder seine eigene Religion“ これが生きたる宗教の眞實相である。麓の道は多岐に分れてゐてもやがては同じ高嶺の月を見るべきである。インドレラントなるものは神の愛を充分に認識し得たといふことができない。自分の考へを他に強ひる事に依つて、如何に神らしからざる結果を齎らし來るか。『人に自己の見解を強ひる事だけですでに慘酷である。然るに人の感じ得ない事を感ずべしと要求する事は暴虐な無意味である。』緣なき衆生は暫く濟度を止むべきである。『われらの爲し得る事は、道を求むるもの（Heilbegierige）を導くことである。』さればとてこの緣なき衆生を憎む必要はない。唯暫く彼等を神の手に委ね置くだけのことである。『斯くして君は、自分が何故に又如何に寛容であるかの原因を理解した事でせう。君の見る如くに、自分は總ての不信仰なるものを永遠に救濟する事を止めない愛に委ねて、夫れが、不滅にしてけがれざる炎なるわれらの魂を死の肉體からひき離して、新しき不滅の淨衣を以て裝ふことを最もよく知つてゐるのに信賴するのである。而して自分は、平和を愛好するこの淸福を、高德の最高僧位とも交換しようとは思はない。自分を犬とさげすんだトルコ人、自分を豚とさげすんだユダヤ人がやがては我が同胞となることを悦ぶ日の來るを見ることは、思ふだに言ひ難い悦びである。』「レッシングの『ナータン』に先立つこと已に數年、嚴格なオルソドックスの宗教思想の行はれつつあつた時代に、この眞實の寛容の精神を高調してゐるバストール＝ゲーテは、正に二十四歳の青年の身を以てして二十年の先輩なるレッシングの先を歩むの觀があるのである。彼は世界人類の多樣性をそのあるがままの姿に於て取らうとする。そしてそれが盡く神の種子であつて、やがては色とりどりの美しき實を結ぶものである事を思ふならば、異なれるものに對しても同胞的なる愛を感ずる事ができると思ふのである。『神の種子が種種なる方法で實を結ぶのを見るのは、何といふわれらの喜びであらう。その時われわれはかう叫ぶだらう。ああ、神の國は自分が求めないところにも亦見出されるのだ。』と。斯かる考方、卽ち神は唯一であつてもその働きの方

面、その現れ方の方面からすれば、無限の多様であるといふ考方、全てのものうちに神の種子を見ることができると信じて異教をも寛大に見る態度は、やがてそこから成長すべきパンテイスムスの萌芽を充分に覗はしめるものがある。

以上が牧師の手紙の概要である。われらはこれに依つて青年ゲーテの宗教に對する態度をその最もコンデンスせられたる形に於て知る事ができると思ふ。而してこれを中心にして、當時尙宗教に關して隨想的に發表された手紙乃至評論等を以て補足するならば、彼の宗教觀の輪郭は、愈〻明確の度を加へる事と思ふ。勿論ここにはそれら總ての文獻に亙つて檢討し、これを一つの體系に構成する餘裕を與へられてゐるのではないが、牧師の手紙を補足し得べく思はるる代表的なる發表を擧げて見たいと思ふ。

當時ゲーテ一味の文藝評論の機關紙『フランクフルト學藝評論』紙上に、啓示宗教に關するある著述に就てゲーテの批評が發表せられてゐる。この著者の論旨は、人間の性は本來惡である、『人間は一切の惡の根源、卽ち我意を以て生れてゐる。』故に彼によれば人間中の最良のものと雖もその心中を割れば盜賊であり殺人者であると言ふ。而してこれに對する神は永遠の處罰者である。神に於ては忘却といふ事がない。冒された惡に對する不興は、永遠にその強度を弱めることがない。若しさうでなかつたならば、神は最早世界の裁判官なりと言ふ事が言はれなからうし、且つ善行に對しても何の報償もない事にならうといふのである。かく主張する事によつて著者は自ら知らぬ間に自己の非難する我執の念から神の存在を必要とするものであることを暴露する。自己の行爲は神の報償を目當てとしてのみ爲されるのである。ゲーテはこれを揶揄して、『然らば神が明白に汝の兄弟を憎むなかれと禁じなければ、我が憎惡は、何等有害なる結果を齎らさず、不攝生も我が身體を破壞せず、罪障もわが魂の靜平を亂すことがなからう。』と述べてゐる。ゲーテがここに見出した重大なる宗教問題は、神に對する人間の善惡の問題である。人間が眞實なる神への愛なくして徒らに對立概念をもつて神の意志を忖度する事である。成程人間には多くの惡の要素がないとは言へない。『けれども搔き立てれば濁る水が必ず悉くどぶであるとは推斷し得ない。』要するに人性を惡と主張するも善と主張するも、神をのけものにした狂信者の爭ひは是認し得ない。人間に於ける善惡の爭論は決して神の意志に副ふものとは思はれない。『人間のあらゆる考方、神に對する關係を神の事項（zur Sache Gottes）とするのは最高者に相應するか否か』問題である。卽ち『神がわれらについて善とか惡とかと見定めたと言はれる事柄が、果して神の前に善であり惡であると意地惡く主張するのも』どうかと思はれる。寧ろゲーテをして言はしめるならば、『善惡の差別は悉く人間の事であつてそらごとたはごとに過ぎない。』のである。彼は言ふ。『われらの目に二つの色に分析せられるところのものは神の爲には唯一の光に還元し得る。』のである。ここにゲーテの思惟法の根幹を爲す分極的本質が明瞭にその相を示し來る。

絶對者の前には相對的なる諸相は悉く一つである。唯救はるる道はこれら善惡怯勇を徒らに審議することを止めて、眞にあるが儘の己れ自體を生かし切る事である。ゲーテは言ふ。『怒りも寛恕も常恆なるもののもとに於ては眞に思考樣式以外の何者でもない。人間はよしその魂がどぶであれ、乃至美しい自然の鏡であれ、或は自己の道を進むだけの力を持つて居ようと、乃至は病弱で杖を必要としようと、われら總てが善とよぶところのものを爲すべきである事は誰しも異論がない。杖と力とは同一なる手から來るのである。』これがゲーテの結論である。自力の足の力をたよるものも、他力の杖にすがるものも、等しくその全力によつて絶對者に向つて精進すべきである。自力と言ひ他力と言ふも、絶對者の目から見るならば全く同一であつて、悉く彼の力以外に出る事はできない。唯表象方法によつて分れるのみである。故に行の方向に於てこの唯一者に向つてゐるのであれば、やがて到達點は同一となるであらう。この考方は神は愛なりと言ふ命題から出發した牧師に對して、人間の神に對する關係の方面から觀察する事によつて、更に牧師の說明を補ひゲーテ自身の信仰を明白ならしめてゐるものである。

要するに、眞實の信仰、卽ち體驗によつて神の愛を深くわが魂のうちに感じたゲーテの宗教觀は一言以てすれば大乘的なるものである。そこには宗論に拘束せられる何ものも見られない。自在無礙なる人間が極めて放膽に神を論じその愛を讃仰してゐる。然もその言葉が常に絶對者との愛の交感から發せられるが故に、小心翼翼として神の意志に違はざらんとする戒律者流の左顧右眄の態度がない。當時友人トラップが世俗の種種なる問題に對し、信仰の立脚點から如何に判斷すべきかをゲーテに訊ねた時、上述のゲーテの宗教觀が最も明白に實際生活の態度に反映し行く消息をその返事のうちにしのばしむるものがある。たとへば、勝負事に關してこれを信仰上から如何に判斷すべきかの問ひに對して、ゲーテはいかにも無造作に斯く答へる。『君がそれを罪惡と考へるならやらぬがよい。何故君は愚かにも他の人人の氣に入る爲に自分の良心を惱すことをするのだ。』となげつけるやうに答へてゐる。この兎角の判斷を常に神の事にまで關係せしめずには措かない律法的人間は、ゲーテには殆んど考へられない存在であつた。彼はこの友人を稱して、『奇怪なる人物よ』と呼びかけてゐる。『君は亦もや色色の事に關して僕の意見を徵せんとするが、それが何になる。僕は君と意見が違ふし、神樣は僕達二人と意見が違ふ事を君は知らんのか。』とこの主知主義者の神に對する態度を抑揑する。『君は神に對して畏敬をもつてゐる。それこそ不幸な事だ。神の遍在はあたかも君の身邊に選擧候が居るかのやうに君を小心翼翼たらしめねば止まない。誠に若し君が遍在する神の愛に就て、眞實なる感情をさへ持つならば、君はそんなに思ひわづらふ事はないだらう。』ととどめをさしてゐる。他力主義者は自己と神とを常に二元的に對立せしめて、その間に超ゆるべからざる溝を設けてゐる。その溝を彼等は畏敬と稱して居る。彼等にとつては神は自己より隔絶して無限の彼方に君臨する存在である。

彼等は如何にもしてこの君主の機嫌をそこねざらんが爲に、日夜心膽を碎く臣下であり奴隷である。彼等は神を見る前に先づその目を自己に向けて、自分を粉飾しなければ安んずる事ができない。如何にしても神へ自己の全部を委ね切る事ができない。神若し絶對者であるならば、自己の絶對的歸依が必然的歸趨であらねばならない。然るに彼等は、理論上は神の全能性絶對性を認容しつつ、實際に於ては、自己といふ除外例を神の世界の裡に求むるのである。絶對界の裡に一つの自我の王國を要求するものであつて、それは卽ち神の絶對性を事實に於て拒否するものである。飽くまでも自己を粉飾して然る後神の前に出でんとする。故に彼等の自我の殼を貫いて、神の愛の光は容易に透入する事ができない。この棄て難い外殼の爲に彼等の惱みは止む時がない。『君が若し遍在する神の愛に就て眞實なる感情をさへ持つならば、君はそんなに思煩らふ事はないだらう。』何と言ふ鮮明なる斷案であらう。神を知らしむるものは、神に就ての知識ではない。この『神の愛についての眞實の感情』のみである。要は神の愛に目醒める事である。絶對と相對、無限と有限の矛盾命題をして、矛盾にして同時に可能ならしむる唯一の楔はこの愛以外に在り得ない事をゲーテはここに最も鮮やかに言ひ切つたのである。

宗教問題の死活點は正にこの矛盾を如何にして可能ならしむるかの一事に懸つてゐる。これを可能ならしむるものは有限相對の世界には存在する事は不可能である。然もこの矛盾が相融通することなくしては、宗教が存在し得ないならば、これを可能ならしむるものは卽ち大なる奇蹟でなければならない。それは卽ち愛である。神の愛である。神への愛はやがて神より來る愛である。それ故にこそこの神を介して有限者が無限者の中に攝取せらるる奇蹟が事實として行はるるのである。ゲーテはこの愛を豐かにもその胸にたたへてゐた爲に、彼の信界は絶えず無礙自在なるものがあつた。この信仰の光景が如實に詩的表現を得てゐるものの一つは『マホメットの歌』であらう。高山に湧く溪泉はその生命を天上より受けて大理石岩の上に踊る。その若やかなる流れは、歡呼しつつ山を走り下る。そして道道友なる細流を併せつつ、自己の足跡の至る處、花は笑ひ、青草もゆる。彼のひたぶるなる旅の心は、これらのものの愛著も媚態も彼の足を留むるに足らない。彼は平野に出でて遂に洋洋たる大江の姿をとり、百千の巨船をその強靭なる肩に負ひ、彼の力と光榮とは殷賑なる都市の姿がこれを示してゐる。併しながらこれら生活の榮譽も亦彼の心を留むることができない。彼の終局の憧憬は、彼の父なる『永遠の大洋』の胸にその身を投ずるまで止む間がない。斯くして、同胞なる力弱き細流が、大洋を憧れつつも砂漠の中に消えんとするものあるを勵ましつつ、遂に彼を待つ父の許に『歡喜に泡立ちつつ』急ぐのである。この流れは、創造の父の子としてその懷より躍り出たのである。彼の新鮮なる力は、全人的活動となつて沃野を拓き、同胞を救け、都市を築いたものである。これらを招來する力は彼の天才の力であるが、同時に彼を創造する父の力である。彼は自己の力を知るだけ愈〻父へ

の愛慕を強める。彼の永遠に息む事なき旅は、生活の上には強大なる事業となつて現れつつも、これらの事業に落在し滿足し難き心、卽ち父への憧憬の心は、その流れが強大となればなる程、內面的運命となつて、如何なる障礙をも破碎しつつ精進せずには措かない。ここに彼の自由なる意志は完全に運命と融合する。活動は卽ち歡喜である。有限の存在は、無限者への愛慕を基底とする無限なる Tat によつて無限となる。かくして人生の活動は、無限者より有限者につらなる一大圓に貫かれて初めてその意義を得來る。若しこの大圓に參與することのない活動であるならば、それは砂漠の中に行方も知れずに消えゆく細流の如くに、斷片的な仕事に了るであらう。ゲーテの存在は、神より發して神に還るこの巨流であつた。彼の Tat の一切は、永遠への意志に貫かれる事に依つて一つの大なる圓に統合せられるのである。若きゲーテの信仰告白は、實にこの活動の基礎づけをなしたものである。ここに『われらの口にする一切事は信仰の告白である。』――と言ふ最初にあげた言葉が愈〻その意義の深さを加へる。

作品に現れたるゲーテの生活感情

一

ゲーテは自己の作品の全部を『大なる告白の斷片』と呼んだ。それ程彼の作品は彼の生活と密接なる關係にある。しかし彼に於ける作品と生活の關係は單純に生活の報告、直寫が藝術をなすと言ふ所謂身邊小說とは趣きを異にする。彼の『告白』は、彼の『懺悔』である。天才の持つ魂の惱みは此の『懺悔』によつて克服せられ得た。その餘りにも强大なる感受性は、外界との交渉から由來する行爲の結果を往往堪へ難い重荷としてその背に受けねばならなかつた。此の重荷を清算する爲、彼はこれを藝術的表現に求めたのである。例へば『ウェルテル』に就てエッケルマンに語つて『それは予がペリカンのやうに予自らの心臟の血を以て養つた』ものであると云つたり、『親和力』に就て、『容易に閉ぢ難き深い熱情の傷』を認め得る事を語つたりして居るその傷ましい體驗の藝術的構成である。從つて彼の所謂『告白文學』は、單純なる生活の記錄ではなくして、生活の『或るモメント』の把握强調である事が知られる。此の『モメント』は言葉によつて表現する事なしには克服する事のできない重大なる生活の契機である。この契機は換言すればゲーテの生活感情の或る高度を指示する。その感情の持つ內包性及びその高度は、彼が對象として交渉するものの性質とそれが持つ迫力の如何によつ

て、その質と量を異にするものであるにしても、彼の本質がこれに反應し行く感情的態度、卽ちゲーテの持つ生命のリズムは常に不易なものとして、その藝術表現の上に示されるのである。彼に於ける『懺悔』は此の生命のリズムが高いカーヴを描いて屈折するその屈折度の記錄と言ふ事ができる。彼の藝術が彼の生命のリズムの表現に他ならない所以は玆にその根據を持つ。

ゲーテの作品の研究は謂はば、そこに表現を與へられて居るゲーテの生命のリズムの研究といふ事ができる。そこに示されるゲーテの生命のリズムは如何なる性質のものであり、それが彼の生活の進展に伴つて如何なるカーヴを描いて進み行くかを見る爲には、われらは言ふ迄もなく彼の作品全部にわたつて觀察する事によつて初めて最後の推定に達する筈である。此處では勿論充分にその任務を果す餘裕はない。けれども生命の流れはそれが有機的一全である限り、その示すリズムの高度こそ場合場合に異なつてゐても、しかも如何なる部分も、その全相を彷彿せしめ得べきが故に、玆にその最も典型的なる作に就てこれを說明し、以て作品の全豹を覗ふよすがとしよう。

此の典型的詩作をわれらは先づ、ゲーテの靑年期に於ける抒情詩に就て見よう。一般に知られる如くに、ゲーテの詩人としての獨創的天才が、眞實の意味に於て目醒めたのは、彼のシュトラースブルク時代以後である。所謂シュトゥルム・ウント・ドラングの運動によりて、ドイツ文壇に高く新しき標識をかかげた時代である。彼の汪溢する創造的熱情は、これまで彼を掣肘して居た古き詩的形式の局

限を遂に打破つて、內發的必然性を以て、その獨自の表現形式を發見し得た時代である。彼が『ファウスト』の『パラリポメナ』に於て Gehalt bringt die Form mit, Form ist nie ohne Gehalt. と云つた、內容と切りはなす事のできない形式、生命の律動が生生ましくもそのまま言葉の形式に動いて來るものが此の時代の詩作である。從つて此の時代の感情の表現は、最も純粹なる相に於てゲーテの生命のリズムを端的に表示して居る事は他の如何なる時代にも優れて居る。而して此の端的なる感情表現に於てわれらは明瞭に二つの相を分つ事ができる。一つは Wandrers Sturmlied; Adler und Taube; An Schwager Kronos; Prometheus 等を以て代表せらるるものであり、他は Mailied; Ganymed; Auf dem See; Neue Liebe, neues Leben 等を以て代表せらるるものである。前者は天才の力の讃歌、自己の內部なる創造のゲーニウスに托乘して一切の局限をふみ越え、一切の權威を拒否する英雄的精神の高調である。謂はば自我の强調である。反之後者は自己の一切をあげて愛するものへゆだね行く宗敎的殉愛の態度である。そこには『我』の局限がいつの間にか絕して、愛によりて物我一體に融合する境地を現ずるのである。これをゲーテが『詩と眞實』のうちに述べた言葉を借りて云へば前者は卽ち sich verselbsten (集我) であり、後者は sich entselbstigen (放我) である。これを詩の系列中最も典型的なるものに就て云ふならば、前者はプロメートイス的であり後者はガニメート的であると言ふ事ができよう。ゲーテが自作の詩を編纂するに際して特に此の二篇の詩を並べて、プロメートイスの後にガニメ

ートを置いた配慮にも彼がこの二篇に持たしめた意味を覗ひ知る事ができる。われらは先づ此の二篇に就て、稍〻詳細にわたつて觀察しようと思ふ。

二

ギリシヤ神話に見らるるプロメートイスは人も知る如く人間の世界に天上の火をもたらした人類文化の始祖である。彼はその罪によつて、多くの苦難を嘗めねばならなかつた。ゲーテはその詩のうちに彼を人間の創造主として描く。彼は世界の主宰者なる主神ツォイスに對して敢然として反抗の宣言をする。プロメートイスは此の大地を創造し終つて初めて自己の内部なる力を實證し得たのである。本來彼も亦ツォイスの神の眷屬としてその支配のもとにその絶對なる權威を信じて成長して來た者である。しかしながら此の天才兒はいつまでも主神の支配を無批判に盲目的に信奉する事ができなかつた。彼の内部なる創造的衝動は外部からこれを局限規定せんとするものに隨順する事ができない。それは決して無道なる反抗ではなくして彼と雖も自己の行くべき眞實の道を求めて幾度かこれまで權威として仰がれて居る神の聲を聞かうとした。『われ幼かりし時、なすべきすべも知らず、わが迷へる目を太陽に向けて、かしこにぞ、わがなげきを聞くべき耳、われの如く惱めるものをいつくしむべき

心あらんかと思へり。』しかしながら此の天才兒の求むる如き獨自の道は、因襲的なる神の敎へから何等の答も得られなかつた。ゲーテは『詩と眞實』の中に彼が如何にして此の詩のモチーフに想ひ至つたかを說明して、此の詩が同時に彼自身の内部的告白である事を示して居る。卽ち人はたとひ兩親にはぐくまれ、兄弟知友の温き愛にかこまれて居てもやがて何時かは自己の孤獨を痛感する時が來る。殊に『精神の力』が早く發展するものに於て此のなやみが多い。ゲーテも亦その多幸なる環境におかれつつも早くも此の孤獨の感情、自己の求むるものに對する解答をいづこにも見出し得ないたよりなさを嘗めたことを述べ、最も救援を必要とする刹那に『醫者よ、汝自らを救へ』と云ふつれなき聲のみを聞くに過ぎなかつた。『かくして予が獨立の實證を求めた時、その最も確實なる基礎としてわが創造的才能を見出した。』と云つて居る。わが存在の唯一のたよりたるべきものは此の創造性のみである。限りなき孤獨の海にただようた後に、此のゆるぎなき巖に泳ぎついた時、もはや如何なる權威も、救濟も必要としなくなる。ゲーテが創造の天才プロメートイスのモチーフをわがものとなし得たのはかかる刹那であつた。プロメートイスは叫ぶ。『予を死より、奴隷より救つたものは何者であつたか。聖に燃ゆる心よ (Heilig glühend Herz)、一切を汝自らが完成したではなかつたか。』今のプロメートイスに取つては此の『聖に燃ゆる心』のみ唯一の尊き財寶であり、生命である。彼は此の心を今自ら創造せんとする人間の魂として吹込まんとするものである。『玆にわれ坐し、わが姿になぞら

へて人間を創る。それはわれと均しき種屬、われと均しくなやみ、嘆き、享受し、歡喜し、かくして汝を顧みざる種族なるぞ。』これが此の詩の最後の句である。全篇、ちぎつて投げつけるやうな言葉から成つてをり、滿幅の鬪志と不屈の意志を示す力に盛り上つた詩であるが、わけても此の最後の句が最も男性的なるプロメートイスの目的を躍如たらしめるものである。玆にゲーテの自己强調のリズムがその最も純にして高き强度を以て表現されて居る。それは一切の權威を打倒し、一切の束縛から離脫して絕對の自由を求むる心である。

三

プロメートイスの此の男性的なる姿から眼をガニメートに轉ずる時、又何と云ふなごやかな心境がわれらの前に展開される事であらう。それはほのぼのと明け行く春の朝である。すべての生命をはぐくむ春の温き『聖なる感情』は限りなき愛の心を傾けて我が心に迫るを覺える。われをかこむ萬象は悉く愛のささやきを以て緊緊(ひしひし)とわれに迫る。萌え出づる草、さき匂ふ花、柔かな風、而して霞こめたる谷の中からは愛の妙なる聲にわれをよぶ鶯の聲がする。かうした中にあつて我等はどうしてぢつとして居られよう。『われ往かん、われ往かん、ああされどいづこへ？　空へ空へと、求め行く。』ガニメートは自ら意志する事なしに、しかもおさへ難いあこがれによつて空へ空へと上つて行く。その時雲はあたかもわが『あこがるる愛』を迎ふるものの如くに自分にせまつて來る。彼は此の雲のふところに包まれつつ『抱きつつ、抱かれつつ、汝の胸をめざしつつ昂る。一切を愛する父よ。』何と云ふなだらかなるメロディーであらう。一切は唯一色の愛の雲に包まれて、そこには物我の分境を絕して絕對者の攝受の中に融け入つた宗教的法悅の極致を味了する境地が示現せられて居る。プロメートイスの『我』の强調は、ここに完全なる『我』の放下となつて現れて來る。前者を集我の極點とすれば、後者は卽ち放我の極點である。ゲーテは、かの美しき少年ガニメートがツォイス神の鷲によつて、天上に運び去らるるモチーフを用ゐて、此の遠心的自我の生命のリズムを、玆に示したのである。

四

上述の典型的なる詩篇によつて示されるやうにゲーテの生命のリズムは、此の自己の求心性と遠心性を兩極點として此の分極の間を振子のやうに動いて居るものである。この兩極はそれ自體として考へるならば明らかに矛盾をなす對立である。もしこれが一人格內の事實として單純なる並存關係にあるにとどまるならば、それは明らかに自我の分裂である。神を求むる心と神を拒否する心とは同時に

存立し得ない。一切の法規も權威も捨離して、唯わが內心の法則による態度は、絕對者の愛を認識してそれに歸命する態度とは一致し得ない。もし一人格がかうした二樣の態度に平然として生くるならば、その不統一はやがて人格的破產に導かねばならない。ゲーテの持つ矛盾の問題は、最も好んで取扱はれる題材である。そして所謂彼の自我の分裂はあたかもそこに全ゲーテの一切の謎がひそむかのやうに好んで指摘せられる處である。成程上述の如くに、彼に於ては明らかに分極的なる矛盾がある。しかしこの矛盾を指摘して、これを以て單純に天才の一特質であるといふに過ぎなければ、ゲーテは、或は世の所謂天才であるかも知れないにしても、統一ある人格たる事を許す事ができないであらう。彼が事實あるやうに、偉大なる人格、整然たるミクロコスモスとしての有機制たる事を立證する爲には、此の分極性の指示よりも此の分極性の持つ相關關係を究明する事が遙かに緊要であらう。何となれば分裂矛盾はゲーテ以外にも容易に見らるる現象であるけれども、此の矛盾を統合する強き力のみが、人格の異常性を示すものである。その分裂の程度がはげしければはげしい丈愈〻これを一人格內に包攝統合する力の强度卽ち偉大なる人格を示すに至るからである。ゲーテはかかる意味に於て偉大であつた。

然らばゲーテに於ける此の矛盾は如何なる關係に立つか、それは一人格內に於ける並存の關係乃至單純なる否定關係にあるものではなくして、相破と同時に相成の關係に立つ。否定と同時に肯定する。換言すれば一の分極が常に他の分極を包攝する。表現の表面に於ては著しく一元的な姿相を示しつつも委細に觀察すれば、必然的に他の分極をその存在の前提豫件として背景に持つ事を發見する。兩者は相卽不離の關係に立つ。かくして此の矛盾の全容が一全の有機制として現れて來る。更に振子に就て考へるならば、一方への動は必ず他方への動に移行すべき豫件をそのうちに包藏して居る。そこに初めて生のリズムを云謂する事ができる。もし此の分裂が一の統合に整調せられる事のない單なる分散であるならば、そこには何等の求めらるべきリズムがあり得ない。

われらはゲーテに於ける此の矛盾の相關關係を實例に就て考へて見よう。それには上述の詩作に就て見る事が最も適切であらう。何となれば、これらの詩篇は已に分極性の典型的なる好例として役立つたからである。先づプロメートイスの神に對する態度を見るに彼は『日輪の下に汝等程憐むべきものをわれは知らず。』と眞向から神の權威を否定し、僅に小兒、乞食、愚者に依つてのみ憐むべき命脈を維持してゐるに過ぎないその存在に對して、極度の侮蔑を投げてゐるものであるが、しかし彼の神に對する侮蔑は決して無神論者の侮蔑ではない。否彼は天才兒である丈け、絕對者を求むる宗敎的精神に早くも目醒めたものであつた。彼が如何に眞劍にその全生命をあげて、神の扉を叩いたかは前に已に述べた所である。彼は神に對する反抗兒として、出發した者ではなくして、飽迄神に求むる者としての傷ましい努力を示して居る。此の求むる心が報いられずに、苦惱の體驗が遂に彼を一箇獨立

の男兒にまで修錬せしめたのである。かくして『聖に燃ゆる心』が、わが生命の根源力としてわが内部に鼓動する事を感銘した。しかしかうした絶對主義の境地に到達しつつもプロメートイスは、われをして眞男子たらしめた力を單に此のわが一心にのみ歸せずに『時劫』と『運命』にその原動力を認めて居る。『かの全能なる時劫と永遠なる運命、卽ちわが主にして汝の主なるものこそわれを男子に鍛へあげたではないか。』と言つて居る。更に此の詩と密接なる關係にある劇詩『プロメートイス』の斷片に描かれて居るプロメートイスに就ては一層此の絶對者認容の態度が明らかにされる。彼は人間創造に際して最も重要である『生命の泉』を自己のうちに得すしてミネルヴァ神の導きによつてそれを打開する事になるのである。勿論そこに取扱はれて居るミネルヴァは外在的な存在神ではなくして、彼の衷にあるゲーニウス、謂はば詩篇に現はるる『聖にもゆる心』の象徴的表現である事が知られるけれども、これを外在的象徴として表現するに至る動機卽ちわが衷にあつてしかもわが意志を以てしても如何ともする事のできない運命的な力、ゲーニウス或はデーモンのわれに對する關係をかうした表現によつてのみ說明し得たプロメートイスに於てわれらは正さしく絶對者の前に歸命せんとする宗敎的萌芽を十分に認知し得るのである。彼の自我は權威を失へる偶像に對して宣戰する。けれどもわが衷なる『聖に燃ゆる心』を目醒ました偉大なる『時劫』と『運命』とを認識するとともに、此の創造に燃ゆる心に對し、それが生命の源泉に連るものとして宗敎的畏敬を致すのである。プロメートイスに於ける此の『聖に燃ゆる心』はそのままガニメートに見らるる『聖なる感情』に連るものである。われらは戰の人プロメートイスに於て充分に宗敎的歸依の人たるべき萌芽を發見する。彼の集我はやがて放我のリズムへ轉向すべき要意を持つものである。

ガニメートの Sehnsuchtsdrang にあつては、愛がそのまま Tat として動いて來る。絶對者への思慕は自己の意志の如何を問題にする餘裕さへも與へない程の必然性を以て動く。そこに選擇も躊躇もない。內面的必然である。物體が地球の中心に向つて落下する物理的なる必然性をさへ思はしめるものがある。絶對者の彼に對する愛はそのまま彼の絶對者に對する愛である。行かんとする意志は來れとの召喚と一體である。召喚の聲は運命的必然の命令である。もしガニメートにこれに對する批判の心、或は反抗の心が動くならば彼は此の不可抗の力と戰はねばならぬ。彼は正に九天の高みから九地の底に轉落すべき危地に立つものである。しかし彼に臨んだ運命はそのまま彼自らの意志となる。運命と意志とは玆に最も完全に合一して居る。絶對者の意志は同時に彼の意志である。Ich komm', ich komme! /Wohin? /Hinauf! Hinauf strebt's. と云ふ三句のうちに示されるやうに『われ行かん』との意圖が動くのは彼の意識の事實である。けれどもいづこに行くべきかも知らずに、抵抗し難き力に托乘して、昇高する彼のうちに動く力は、自己の意志を以て如何ともなし難い Es である。此の『或物』、わがうちにあつてわが意志に依屬せざるものこそ、均しくプロメートイスのうちに生くるデー

モンである。もしガニメートが絶對者を慕うて高昇する途上に於てその行手を遮る何者かがあつたならば、此の制し難い愛慕の力は忽ち最も激しい戰ひの力として現れるであらう。何となれば、それは彼の意志に屬せずして絶對者の意志であり、運命の意志である故である。この戰ひの心、主我的意志はこの詩篇のうちに於ては、プロメートイスに於けるよりも言葉としては明瞭に表現せられてはないにしても、絶對者の意志をわが意志とする事實のうちに何者の抗敵をも押し切らねば止まない力を充分に知る事ができるのである。

五

ゲーテの生活感情に於ける此の二つの分極的リズムはかくして常に一方より他方へ移行せんとする要意を示すのであるが、此の移行のリズムが一つの作品に於て極めて明白に跡づける事ができる今一つの作例をあげる事によつて兩曲の相關關係を表現する典型を示さうと思ふ。即ち『プロメートイス』、『ガニメート』の二篇に依つてゲーテの持つ生命のリズム、集我と放我との各々に就てそれ自體の本質を主として說明したのであるが、此の分極が極めて有機的相關の形に於て一全を示すべき消息を傳へて居るものは『マホメットの歌』である。此の詩篇によつてプロメートイスに求めんとした放我の心、ガニメートに探り得る集我の意圖が完全なる一全のうちに集約せられ、美妙なるリズムを示す有樣を見得るのである。それは分極の單純なるジンテーゼの意味ではなく、ゲーテに於ては、分極的交錯がそのまま彼の生命の眞實相であつて永遠なる生命を終局の目標とする者の進むべき生命の道は常にかうしたリズムのうちに示されるものである事を指示するのである。

さて此の詩に於て豫言者マホメットの生ひたちと活動とを象徵する爲に使用せられて居るものは高山の岩間から湧き出づる星にちまがふ清らかなる泉である。彼は天空の中から新鮮なる生命を受けて生れ、大理石盤の上に躍る。そしてそのふるさとなる天空に向つて歡呼の聲をあげる。彼の青春を養ふものは大自然のうちなる『よき靈達』である。かくして彼は潑剌たる生命に充ちあふれて人寰に向つて溪間を走り下るのである。彼は人生の旅に於て行く行く不斷に自己の友を合流し、その力を包攝する事によつて自己の成長をやめない。彼の長き旅路の目標はいづくにあるか。彼の生命のいぶきによつて咲き出づる草野の花が、その愛に充ちた眼なざしを彼に投げ、彼の膝にまつはりついても、彼の心はそこに止る事を知らない。やがて平野に入つて百川を併せて洋洋たる大江の姿を取り、彼の巨大なる力は今や幾百の巨舟をその肩に擔ふアトラスの姿となり、幾千の帆は天上に向つて、彼の力と光榮とを讃へ、天空を摩する高塔、眼も醒むるばかりの大理石の家家は彼の權勢に感謝の心を現はすのであるが、この人生に於ける最大の榮譽も亦かの美しき愛の誘惑と同樣に、彼の心を止むるに足ら

ない。彼の旅は一刹那と雖も休む事を知らない。彼はその力強い足を大地に印しながら一切のものを後にしてかなたへと進む。彼の旅路の終りに彼を待つものは永遠の大洋であつた。彼の旅の目的は彼を待ち受くる此の創造主の心臓に、よろこびに泡立ちつつ、身を投ぐるにあつたのだ。かくして彼の旅は絶對者から發して絶對者に歸る大圓を描いて終る。而して此の旅に見らるる溪泉の姿は一方に於ては自己の力と生命の自覺に充ちたる青年がその成長の極致に於て巨舟を負ふ巨人アトラスの勇姿にまで發展する。プロメートイス的極頂を示すと同時に、他方に於ては如何なる障礙と誘惑とを以てしても、その足を停め得ないあこがれのたましひガニメートたる事を示して居る。有力と無力、『我』と『無我』、求心性と遠心性とは、その境地に順應して自在無礙に轉換しつつ而もたましひの流れは刹那も停頓する事なく、『永遠の大海』へ歸還する。卽ちゲーテに見らるる分極性は此の詩篇に於て、その最も生生きした相關關係を示して、集我と放我のリズムは常に表裏相接してゲーテの生命のリズムを構成するのである。

六

此の分極性はゲーテの本質自體であるが故に彼の作品のすべてに於て跡づける事ができよう。今一一の作品に就て引證する餘裕を持たないが故に單に引例を項目として列擧するならば、ウェルテルに對するゲッツ、ファウストに對するグレートヘン、或は第一部のファウストに對する第二部のファウスト、イフィゲーニエに對するタッソー、或はタッソーに對するアントニオ、『修業時代』と『遍歷時代』に於けるウィルヘルムの對立、『親和力』に於けるエドゥアルトとハウプトマンの對立等は悉く此の集我と放我、自由と局限、激情と克己、奔放と法悅等の形に於て此の極性の相關を示すものである。ひとり作品に於てばかりでない。ゲーテに於ける一切の他の表現に於ても亦詩作に於けると同樣に此の生命のリズムを以て一貫して居る。若しこれを彼の學の原則と名附くるならば彼がそれを觀照の原則として採用してゐるのではなく、彼が卽ち此の原則自體であると言ふべきである。それは彼の觀照の形式自體であり、必然である。故にその有意識と無意識とを問はず、彼の觀照の態度には一貫せる透徹性を以て些の危氣もない。彼の思想の成長の過程よりすれば、ゲーテはその本然的なる赤裸裸なる自己を天地の間に投出してその本質の動くままに托乘せる天眞兒として出發した。つまり自己の衝動的動向から出發した。此の衝動的なる動向が或る成長のファーゼに達して意識面に刻印せられると共に、それが更に一切の觀照素材の整理に有意的に働いて來る。彼の學的業績は實にかうした觀點、卽ち彼の本質に卽する觀察によつて貫かれて居るものである。

七

最後に此の分極的リズムがゲーテの生命に對して如何なる意味を有するかに就て一言しなければならない。それは此の分極的リズムが單純にゲーテの生命表現の現象的說明に止まらずに、更に彼の天才の獨自性の意義と價値決定に關係して來るからである。彼の天才の獨自性とは要するに不斷の成長を意味するもの、卽ち創造的發展を意味するものであるが、分極的リズムは此の創造的發展の持つリズムに他ならないものである。

ゲーテが植物の成長の現象を說明して廣張（ausdehnen）と收縮（zusammenziehen）なる矛盾的作用の同時的現象によつて高進（Steigerung）を實證するに至ると見てゐる。此の事實は一般有機體の生命の成長に於ても云はるべき事實である。生命の健全なる成長は此の矛盾的分極の有機的相關作用によつて行はれる。而して異常なる天才の生命にあつては、この振子動も強く鮮やかなリズムを示すものである。このリズムは先に述べた樣にそれは分極間に於ける相破と同時に相成の作用である。生命は凝滯を嫌ふ。凝滯は死である。相破の作用は卽ちこの死を破る作用である。しかしながら兩極の有機的統制を破る底の分裂に導く相破であつてはならない。兩者は飽くまで相寄つて一全を相成する關係

に立たねばならない。ここに entsagen が又生命の成長に必要なる要件となる所以である。ゲーテの作品にあらはるる分極的傾向は、ゲーテの生命の創造的成長のリズムに外ならないものである。彼の作品は此のリズムをそれぞれのファーゼに於て示すものである。從つて彼の作品は全體として此のリズムの大なる交響樂を構成してゐるものであるが、今一個の藝術的體形に於て彼の生命の流れ、謂はば『マホメットの歌』に示される流れに彼の生命の全進展を盛つた作品を求めるならば、それは『ファウスト』である。『ファウスト』は彼の詩的創造の生活の全程にわたつて常に彼の伴侶であり、彼の生命の懺悔告白の書である。謂はば彼の全作品が構成する大交響樂の中心主題であり、その大動脈である。故にわれらは此の作品により、それを通してゲーテの分極的生命のリズムが彼の創造的成長のリズムである事を具象的に示し得ようと思ふ。

『ファウスト』はその主題から見るならば前述の如く第一部と第二部の對立的關係に立つものである事はやがて青年ゲーテと老ゲーテとの對立に照應するものであるが、これを一貫せる生命の流れとして觀察するならば、不斷に精進してやまない天才の典型的生活の描寫に他ならない。彼の究竟の願念は『世界をその深奧に於て統合するものの認識』と把握であつた。卽ち彼のたましひは絕對者なる神を目指すものであつた。かくして彼の人生の旅は始るのであるが、彼の人生行路は謂はば迷へる人の旅であつた。蹉跌と過失、罪惡と失意の連鎖であつた。無垢なる少女を誘惑して、その家庭を

破壊し、血を流し、遂に彼女をも死に至らしめた。正しからざる多くの方法によつて國家の統制を亂し、事業の欲望を滿す爲に多くの人人の勞力を犧牲にし、遂には神の如くに平和なる人人の家を燒き、これを殺した。彼の一生は誠に犯罪者（Verbrecher）の一生である。しかも神は彼を以て Mein Knecht であるとなし、ein guter Mensch としてこれを嘉納されて居る。神は何故彼に對して寛大であるか。それはファウストの魂が不斷に眞理に向つて精進するものであり、彼の犯罪はすべて正しき意圖から發しながらこれを徹底せしめる事のできない人間の不完全性に基くものであるからである。Es irrt der Mensch, solange er strebt. と神は言はれる。正しき意圖と全力的精進こそは彼の犯罪を是正する。彼の行爲の倫理的解剖はわれらの目的ではないから、われらは玆では唯彼の精進過程が何を意味するかを見れば足りる。彼の不斷の精進は不斷の破壞であつた。彼は人生の新しき境地を打開し、そこに進展する爲に固定せるもの、法則性を以て彼の進行をはばむものを絕えず蹂躙り、新しき世界の創造を願念實行したものである。彼の生活は此の破壞と創造のよどみなき交流である。そこには停頓がない。停頓は卽ち死である。惡魔は此の刹那を覗つて彼の魂をうばはうとする。『いざ停れ、かくも汝は美しければ』とその瞬間に向つて叫ぶ停頓の刹那が、彼の生涯の最後の刹那でなければならぬ。しかもファウストはかうした刹那の間隙さへも惡魔に與へない程全力的精進の人であつた。創造作用はそれ自體の必然性によつて停頓がゆるされない。卽ち『創造』は『作用』と『被造物』から成る。創造の作用は必然的に被造物を生むが、生れたる被造物は固定的存在として、作用に對する障阻を形成する。卽ち前の瞬間に創造せるものは後の瞬間の創造を制限する。後の創造作用は前の被創造を破つて前進せんとする。メフィストの所謂 Beim Ersten bist du Herr/Beim Zweiten bist du Knecht. である。永遠に『主』たるべき爲には不斷に被造物を克服しなければならぬ。運如上人が生きたる信仰の光景を說明して『引き破り引き破り進むべき』事を述べて居る事はそのまま此のファウストの停頓を知らざる生命の進展に照應するものである。それは永遠の否定と同時に永遠の肯定である。自由と法則の交錯である。被創造は固定して法則となる。これを打開して新しき自由の天地に更に新しき創造を營まうとする事が、不斷に生長を求むる生命の必然的要求である。成長に於ては生の分極的傾向が、緊密なる有機關係を以て相破相成する作用が、その唯一なる眞相を說明してゐる意味はここにある。而してファウストがかかる表現によつてゲーテの創造的成長の眞實相を映し出すものである事も亦理解できる。卽ちプロメートイスとガニメートが渾然として一全を構成してマホメットの流れとなり永遠の大洋にそそぐ光景はファウストに於て一箇の雄大なる藝術表現として統合せられて居るのである。故にファウストの魂の運命の上に天使の和唱がひびいて Wer ewig strebend sich bemüht, den können wir erlösen. と宣言する言葉は流れてやまざる彼の生命の流れが、遂に彼の父なる永遠の大洋に注ぎ入つた事を告げるものである。彼の生命の不斷の分極的リズムはそこに最後のジ

ンテーゼを見出して永遠のやすらひに入るのである。

「卽ちゲーテの示す生命の分極的リズムは單純なる現象として見るべきものではなくして、彼の天才の成長のリズム、創造的發展の必然的に持つ運命的リズムである。從つて彼の生命の續く限り、その不可避なる表現形式として現れ來るべきものである事が知れる。然しそれは內部に常に絕對的ジンテーゼを分極の根幹として持つものであり、生命はその唯一なる根幹からの出生分裂であり、しかも常に此の絕對的ジンテーゼに歸らん事を生命活動の動機として持つものである。ゲーテの生活感情表現としての藝術制作がこの絕對なるものをその根柢とする點に於て著しく宗敎的なる意義を持つに至る所以は玆にある。」

ゲーテのスピノーザ研究

一

ゲーテは『詩と眞實』の第十四卷に、『かくも決定的に予に働きかけ、予の全思惟法にかくも大なる影響を持つ』者としてスピノーザの名を擧げてゐる。更に、彼は晩年友人ツェルテルに宛てて、彼がその生涯に於て最も大なる影響を受けたものとして沙翁、リンネと並べてスピノーザの名を擧げてゐる。同樣の事は彼の『植物學研究の歷史』の中にも繰返へされてゐる事である。ゲーテが嚴密なる意味に於て果してスピノチストであつたか否かは一つの問題として、これまで幾度となく論議せられ、むしろ、多くの場合否定的結論に到達する事が普通とされてゐる。ゲーテ自身已に、『予が彼(スピノーザ)の著述を肯定して、字義通りにそれに歸依したといふ風に考へて貰ひ度くはない。何となれば、何人も他人を理解しない事、何人も同一な言葉に於て他人が考へたと同一なことを考へないこと、同一の對話、同一の讀書が異なれる人間に在つては異なれる思想の關聯を催起する事は、已に餘りにも明瞭に予の理解する處である。』(『詩と眞實』第十六卷)と言つてゐる。ゲーテは沙翁の弟子でもリンネの弟子でもないと同樣に、スピノーザの弟子でもなかつた。『予がその著述(『エティカ』)から何を讀みとり、何を讀み込んだかは、予の解明し得ない處である。』その種の解明は他の人人に打ち

まかせて、ゲーテは唯わが心の引かるるがままにスピノーザに沈潛した。それは研究ではなくして、求道者の態度であつた。スピノーザの哲學の習得と言ふよりは、それによつて、自己の內面生活の整理と成長を求める切實なる心の要求に從つたものであつた。その限りに於て『エティカ』から『讀み取つた』ものは、客觀的なるスピノーザではなくして、畢竟ゲーテ自らの姿であつた。ゲーテは生活過程に於ける種種なる障礙の超剋を、その藝術創造の活動によつてなし得たと同じ意味で、スピノーザから與へられた思想的滋味を攝受しこれを自己の力となした。攝受は、此の場合單純なる受動の作用ではなくして、自己の內面生活の整理、構築の能動的創造作用を併せ含むものである。ゲーテが沙翁に於てもヘルデルに於ても、又スピノーザに於ても、その攝受の態度に於て常に自己の自由なる選擇、その『讀み込み、讀み取る』ものに於て極めて放膽で能動的である事は、それらのものが、彼のその場合場合の生活局面に當つて、自己の生存の爲に必然的なる要素として提示せられるが爲であつた。されば、ゲーテが沙翁を讀んだ最初の印象を記して、『彼を讀んだ最初の頁は、予をして終生彼のものたらしめた。而して最初の曲を讀み了つた時、予は、奇蹟の手が一瞬にして視力を授けた盲目者の樣であつた。』と言つてゐると同じ樣に、スピノーザに接したゲーテは、『偉大にして自由なる展望が、官能と道德の世界に開けた樣に思へた』のである。此の言葉は、當時ゲーテに於て、『官能と道德の世界』が閉塞して打開の道を見出すに困難であつた事を物語るものである。若きゲーテの藝術創造に對し、新しき表現形式の道を提示したものが沙翁であつたとすれば、激情のあらしに人生の道を亡失せんとした時、彼を導いて彼岸の地を指示したものはスピノーザであつた。ゲーテがスピノーザに親しみ、特にその思想に傾倒する機會を得たのは、生涯を通じて三度である。此の三度の機會はそれぞれその動機を異にして、從つてゲーテのスピノーザを見る態度、その觸るる問題の側面に多少の相違があるにしても、彼が最初にスピノーザを發見し、彼の思想を自己の內的葛藤整理の鍵として摑んだ時に深く彼の心にゑりつけられたスピノーザの認識は、後年に於ても常にゲーテのスピノーザ觀の基底をなして變化するところが無かつたものである。われわれは、ゲーテがスピノーザに接した上述の三度の機會を歷史的に記述する事に依つて、ゲーテを中心として、ドイツ文學及び思想に印したスピノーザの姿を偲ばうと思ふ。

二

ゲーテがスピノーザを知つたのは、已にそのシュトラースブルク大學時代前後、卽ち一七七〇年前後である事は、當時のゲーテの讀書日記なるエフェメリーデスの中にスピノーザからの引用語が見らるる事で知られる。恐らく彼は Bayle の辭書中にあるスピノーザの解說、Brucker の哲學史、

Johan Köhler のスピノーザ傳、或はゲーテが愛讀したと告白してゐる G. Arnold の『教會・異端正史』に於て可なり詳細にスピノーザの人物の輪郭を知り得たことであらう。しかし、それはスピノーザがゲーテに對して、生命の糧として働きかけたのではないから、未だスピノーザがその眞實の相をゲーテのたましひの前に現はしたといふ事はできない。勿論ゲーテの上にスピノーザが活らき始めたのは、かうしたスピノーザに關する知識がその機緣をなした事は充分に考へられる。スピノーザがゲーテの上に眞に活らき始めたのは、一七七三年の春である。當時ゲーテは友人ヘップネルに宛てた手紙の中に、メルクの手からヘップネル所屬のスピノーザの著作を轉借した旨を報告してゐる。そして、『どこまで自分が此の人物（スピノーザ）の Schachten と Erdgänge を追求する事ができるかを見度い。』と書きしるしてゐる。このさりげない言葉だけでは、唯、世の常の學究の研究意圖を表明してゐるに過ぎない樣に見えるけれども、ゲーテが當時置かれたコンステラチオンを考へ合せ、七三年から七四年に亙つての手紙と、自傳に於けるスピノーザ接觸の記述とを照合するならば、當時ゲーテがスピノーザを求めた眞相を彷彿する事ができよう。七三年から七四年にかけてのゲーテは、その生涯中に於て恐らく最も危險なる試錬の前におかれたものであつた。彼の Taedium Vitae の時代、『ウェルテル』醱酵の時代である。前年の夏、斷ち難い愛欲のきづなを絶つて故郷の地に逃げ歸つた彼は、もとより、故郷の町の沈滯した生活雰圍氣に安住の地を見出し得べくもなく、ロッテへの思慕の情は愈愈その激しさの度を加へ、眞に『ウェルテル』を文等通りにわが血汐を以てわが心に銘記し、わが身に體驗した時代である。而して此の熱情の惑亂は、七三年の春、卽ち彼がスピノーザを求めた時にその高潮に達してゐる。それは種種なる動機が一つに結合して、彼を窘窮の頂點に追ひつめた觀がある。此の年の四月の初めにロッテは遂に結婚して人妻となつた。それさへあるに、當時彼の唯一の慰安者であり、相談相手であつたメルクは五月に遠く露都に去り、彼がせめてもの無聊を慰め得られたダルムシュタットの女友は、或る者は死し、或る者は結婚して同地を去つた。彼は全く孤獨を痛感した。當時の手紙を見ると、『ひとり』とか『孤獨』といふ言葉が幾度か繰返されてゐる。語るべき友と離れて情熱のはけ口を失つたゲーテは、唯僅に創作に活路を見出したに過ぎない。『予は充分の仕事があるので滿足だ。孤獨は予の身の爲になる。』などと、事實負惜みの意味なしに孤獨を喜び得た刹那もあるにはあつたが、彼の內部は渦卷く情熱の大浪におされて、身を處すべき術を知らない多くの時を持つた事は、當時の手紙に繰返される激しい告白の言葉で充分知る事ができる。ヘップネルに宛ててスピノーザの轉借を求めた同じ手紙の中で、『荒天に當つて、いづこに頭をかくす可きかも知らない。』と嘆息する言葉が、やがてスピノーザに言及する序詞となつてゐるのも注意をひくが、ロッテの夫なるケストネルに宛てた手紙には一層傷ましい多くの告白が見られる。『予は水なき荒野にさまよふ。予の頭髮は予に木蔭となり、予の血は予の泉である。』とか、『予の憐むべき存在は荒凉た

る嚴と硬化した。』と言ひ、『カインの呪がわが上に横つてゐる。』と人人の嘲に上る迄になつた自己の姿に就て書き送つてゐる。ゲーテが夜毎に短劍を床頭に置いて、時時その切先を胸深く沈めんと試みたのもまさしく此の時代の事と思はれる。

スピノーザがゲーテに活らきかける動機とその強さを知る爲には、彼の置かれたる心境の特殊事情を充分に知つておく必要がある。かくして始めて、彼がその自傳のうちに描いたスピノーザに對する最初の感銘の内容を、その充分なる深さに於て知る事ができよう。『予が、全世界に予の奇異なる本質の教養手段を求めて得なかつた後に、遂に此人物（スピノーザ）のエティクに逢着した。予が此の作から何を讀みとり、何を讀み込んだかは予の說明し得ない處である。兎に角、予はここに予の情熱の鎭靜を見た。官能と道德の世界の上に、偉大な、自由な展望が予に開かれた樣に思はれたのである。併し特に予を彼に牽きつけたものは、一一の文章から輝き出づる限りなき無我の心であつた。眞に神を愛するものは神が彼に愛を以て報ゆる事を要求してはならないと言ふ彼の驚くべき言葉は、その言葉の基礎を爲す一切の前提、及びそこから發生する一切の結論と共に予の全思想を充した。一切の事に於て無我である事、愛と友情に於て最も無我である事は、予の最高の怡樂であり、予の箴言であり、予の修業であつたので、Wenn ich dich liebe, was geht's dich an? と言ふ大膽なる後年の言葉は、（註『ウィルヘルム・マイステルの修業時代』中の言葉）予の眞心から洩れた言葉であつた。且

又ここで誤認されてはならぬ事は、本來最も親密なる結合は、對立的なるものからのみ由來する事である。スピノーザの一切を宥和する冷靜は、予の一切を昂奮せしめるあがきと對立した。彼の數學的方法は、予の詩人的官能性とその表現方法との對照であつた。而して、道德的なる對象には適合しさうにも考へられないかの几帳面な取扱法こそは、予をして彼の熱情的なる弟子たらしめたもの、彼の決定的なる崇拜者たらしめたものである。Geist と Herz、悟性と官能は必然的親和力を以て相互に探し求めた。そして、これに依つて、最も異なれる本質間の結合が成就したのである。』といふゲーテの告白は、ゲーテがスピノーザからその最初の遭逢に於て獲得したものの内容を端的に說明してゐる。『愛と友情とに於て最も無我である事』は、當時のゲーテに課された最も大なる課題であつた。これを解決する事はその最後の目標であり、『予が最高の怡樂であり……修業』であつたのである。けれども、死を以て脅威する程の情熱は、容易に此の課題の解決を達せしめなかつた。ゲーテがライプツィヒ時代、その放逸なる生活と奔放なる情炎から遂に病患に仆れようとした時、彼の魂をその煉獄の苦患から濟つたものは聖書であつた樣に、ウェッツラー時代以後の成長のファーゼに於て、均しく情炎の紛糾から彼を濟つたものはスピノーザの哲學體系であつた。ゲーテは、玆に心憎いばかりの冷靜と徹透せる論理を以て人間の愛欲が俎上に解體せられ、その根源的實相が究明せらるるを見た。此の人間の内面生活の數學的研究者は、世にも複雜なる感情の幾何學の線のもつれをいづこまでもと追及して行

く。そして凡ゆる生命體の根源本能たる自己の存在擁護の源流にまで押し究め、そこから一切の愛欲の生活を解說し來る。人間が此の愛欲の奴隷として如何にみじめな生活を辿らねばならぬか。人間の大なるなやみの源は、要するに此の奴隷的迷誤に住するが故である。それはものの眞相を直觀する事ができずに、あたかも、われらが世界の中心であり、事物をわが意のままに動かし得る當然の地位に在るかの樣に思ひ上つてゐる處から由來する。けれども一切の事象は人間のわがままなる欲求に關係なく、それ自らの必然的法則の道を辿る。そして我執の海に漂ふ者を失望、憤恨のうちに取り殘して行く。此の迷惑の大海から救はるべき福音は、眞理の直觀から生れる。そこには精神の自由とよろこびがある。迷のある處奴隷の生活があり、眞理の宿る處自由のよろこびがある。而して此の眞理のうちに生くるもの、卽ち我執に依つて世界を見ずに、事物の必然的相關の法則を認識して自己の本性に安住するものに取つては、凡てが自己の成長の促進となるのである。そこに眞のよろこびの感情がある。常に自己と世界の正しき認識に安住するもの、卽ち眞理を求むる生活を爲すものは、凡てのなやみから解放された自由の人である。彼は自己の法則から生くる人である。世界も亦、彼の成長を促進せしめるものとして彼のよろこびである。世界は卽ち神である。世界に對するよろこびは神への愛である。自由人は神の愛のうちに生きる。神を愛するものは、神よりの愛を求める事をしない。何となれば、神は絕對者である以上、神への愛も亦神に屬する愛であるからである。神は眞理である。眞理を求むるものは神を求むるものである。――かうしたエティカの敎へがゲーテの惱亂した心裡に一脈の凉氣を吹込んだ事は、想像に難くない。曾つて聖書が眞に自己の爲に書かれた言葉として生き返つて來た樣に、當時のゲーテに對して、スピノーザの言葉は、單純に一般的な哲學體系に止らず、彼自身の導きとなるべき信仰の書として與へられた事を感じた。ゲーテがこの告白に於て、自己とスピノーザはその本質を異にするものであり、まさしく異なれる本質なればこそ眞實の結合が行はれたと書いてゐる事は、これを當時のゲーテの心境を考察せずして言葉通りに考へるならば、ゲーテがその思考方法に於てスピノーザと對蹠的立場にある樣に思はしめるものがあるが、事實はこれと反對に、ゲーテの本質、その思惟法に於ては、スピノーザを知る以前に既にスピノーザ的なるものを持つてゐた事は學者の指示する處である。(C. Gerhardt, Spinoza. S. 59) 更に後に見らるる如くに、ゲーテはその自然觀照の態度をスピノーザに於て學び得たと告白してゐる言葉を照合するならば、兩者の世界觀、自然觀照の根柢に於て相通ふものがあつた事を知り得る。對蹠的なる本質のみよく結合し得ると言ふゲーテの言葉の眞實は、その根源に同質なるものを以て分岐せる對蹠である場合にのみ實證せられる。スピノーザの哲學體系を客觀的に檢討して、これをゲーテの世界觀に照合する時、ディルタイの言ふが如くに、『ゲーテは決してスピノーザではなかつた。』(Dilthey, II. S. 408) と言ふ結論に達するかも知れない。ゲーテ自身も後年ヤコビに宛てて、自分は一度もスピノーザの著作を逐一讀

み通した事もなく、彼の思想の全構成は決して完全に明瞭に自分の心の前に立つた事はないと言つて、決してスピノーザの忠實なる研究者乃至弟子であるとは言つてゐない。それにも係らず同じ手紙に、『しかし、予が彼のうちに見入る時彼を理解する樣に信ずる。』と敢て主張する事を禁じ難いものは、彼の本質の內部に、眞理研究の態度に於て、スピノーザ的なるものが打消し難い中核的形式として潛在するものがあつた事を語るものである。それは直觀的認識の態度である。此の眞理觀照の方法に關して、ゲーテが明白にスピノーザを師表と仰いでゐる言葉は第二次のスピノーザ研究の時代に屬するが故に、後に再說するであらうけれども、兎に角此の根源的なる同質性の或る側面、卽ち愛欲の情炎にやかれつつある當時のゲーテに對して假借する處のない眞實直觀の、水の如くに澄んだ批判的精神がスピノーザに依つてゲーテの內部から摵り醒されて來た。それは本來的にゲーテ自らのうちにある處のものである。ゲーテを以て殉情的な一元的抒情詩人と考へる事は、彼の本質を誤認するものであつて、彼の常に動いて止まない感情の波の下には、恐ろしい程に澄み切つた理性の水深が湛然として力强くひそんでゐる事を思はねばならない。それは彼のデーモンである。彼が幾度か生の危機に臨んで、愛欲に仆れようとする每に異常なる力を以て斷ち難いきづなを一刀兩斷して、一切のわづらひを超剋し得た力は此のデーモンに內在する力である。ゲーテの所謂『自然は、神自らにも一分の變更を許さない程に神聖にして永遠であり、必然である法則に從つて動く』(詩と眞實、第十六卷)その自然の法則の如くに、彼のデーモンは一切の人事の些細なる感情のもつれや羈絆を一擧にして蹂みにじる容赦なき力である。併し此の力の道は、ゲーテに於ては、衝動的と名づける事のできる程本然的なものであるにしても、それが決して盲目的、破壞的ではなくして、徹透せる理性がそのまま力となつて動いて來るかの樣な、冷たい熱情とでも名づけらるべき性質のものである。彼が愛欲の海に沈湎する間に、率然として彼のデーモンなる此の冷たき熱情が動いて、凡ての動搖が克服せられる。ウェッツラーの體驗後に於けるフランクフルト時代、彼に働きかけたスピノーザは、彼の此のデーモンの覺醒に主要なる役割を演じたものである。言ひ換へれば、スピノーザは、ゲーテをその天才性の本質に引き戻したものであるといふ事ができる。從つて、『詩と眞實』に於て彼がスピノーザとの對蹠的相反關係に立つものとして列擧してゐる諸項は、そのまま彼自身のうちに見られる矛盾の相に移して考へる事ができる性質のものである。卽ち彼の內的生命に見らるる分極性に他ならないものである。此の分極的動搖は彼の生命の成長過程に於て必然的に見らるる形式ではあるが、唯その際彼に課された任務は、その分極性の運動形式を一層純粹なるものに高進せしめる事であつた。生命の成長とは、その無限なる純粹化に名づけたものに他ならない。而して、此の純粹化はカオスをコスモスの狀態に移し、混亂に秩序を、暗黑に光明を與へ、運動に法則を見出す道程であるが故に、必然的に全體的有機的意識の統制のもとに不要なるものの捨離が要求せられる。そこから、Entsagen の思想が生れて來

る。ゲーテは、スピノーザから學び得た點を『詩と眞實』の第十六卷には、叡智に基く Entsagen に見出してゐる。Entsagen の哲學がゲーテの後半生の人生觀の主脈をなしてゐる事を思ひ合せるならば、彼がスピノーザを學ぶに際して此の點に示唆を受けた事は大なる興味がある。Entsagen はゲーテ自らに於て意味さるると同樣に、スピノーザに於ても決して强要された消極的諦念ではない。それは、自然の正しき認識から生れる極めて positiv なる意圖を持つ。「われらの種種なる生活事情は、われらに多くの斷念を强要する。而してわれらは多くの場合苦痛を以て餘儀なく運命に屈する。併し少數の人人は自然のうちに行はれる『永遠なるもの、必然なるもの、法則性なるものを確信する。』此の不壞なる眞理に生きんが爲に、彼等は多くの欲求に對して斷念の必要を認識するのである。此の認識を實行に移す爲には、大なる勇氣が必要である。眞理の爲の聖戰にその生涯を捧げた勇氣をスピノーザに於て見たゲーテは、自己の生活の整理に如何に大なる力と勵ましを得た事であつたらう。『予はその繙讀に耽つた。そして、予自身を內觀すると共に、曾つて世界をかくばかり明白に見たと思つた事が無かつた。』とゲーテはその告白に書きしるしてゐる。」

一七七三年の春に始まつたゲーテの第一次スピノーザ研究は、翌七四年の夏、ゲーテがラファーテル、バゼドウと行を共にしたライン旅行の途上エルベヘルトで初めて逢つたフリッツ・ヤコビによつて著しく促進せしめられた。ゲーテが此の旅行中に於て、如何にヤコビに依つてスピノーザの世界に導き入れられ、啓發せらるる處が多かつたかは、『詩と眞實』やフリッツの兄なる詩人ゲオルグ・ヤコビの日記、更に後年フリッツが當時を回想してゲーテに書き送つた手紙等によつて覗ひ知る事ができる。此のラインの旅の最後に當つて、ゲーテがヤコビと行を共にした短い旅の間、兩者の對話は常にスピノーザを廻つて離れなかつた。ケルンに宿つた夜、月明のラインの河畔に臨む旅亭に語り更かし、臥床の後に更にゲーテがヤコビを訪ねてその夢を驚かした事は、兩者の長く忘れる事のできない思ひ出であつた。スピノーザ研究に於ては、ヤコビはゲーテよりも一日の長があつた。けれども、彼自身は決してスピノーザ哲學の流をくむ者ではなかつた。此の主感主義的哲學者は、眞實の認識を以て感情による單純なる認識のみであるとなしてゐる。彼にとつては、思惟の世界は第二次的なものであつて、根源的なる、最確實なる智は信仰にとどめをさすと言ふ。故に眞理は考へられたものではなくして體驗せられたものである。神の認識は冥想からは達せられない。そこから出發すれば結局スピノーザの如く神の否定に陷るといふのである。勿論スピノーザ乃至ゲーテの求めんとする神と、ヤコビが思惟する在來のキリスト教の『人格神』とは同一の概念ではないから、彼のいふスピノーザの神、の否定は必ずしもスピノーザの意味する神の否定とはならない。兎に角ヤコビの主感的態度は、シュトゥルム・ウント・ドラングの哲學を代表するものであつて、當時のゲーテが、彼の思惟に共鳴する多くのものを持つてゐた事は爭はれない事實である。唯此の主感主義の哲學者は、ゲーテの體驗しつ

つあつた『二つの魂の分裂』を經驗しなかつた。彼はどこまでも一元的信仰に立籠つた。その主感的側面に於ては、いふ迄もなくゲーテの共感を得た事であらう。けれども、ゲーテには同時に、均しい強度を持つ知的要求があつた。此の要求は神を認識の對象として、思惟の限りをつくして、神の相を明にしようとする努力を息める事ができない。神は愛なりといふ命題は若きゲーテの信仰の中樞をなすものである限り、神は直觀に依つて體驗せらるべきものであるといふ事實は言ふ迄もなくゲーテの承諾する處であらうけれども、それが理智の對境としても亦少しもその相を匿すものではなく、反つてそれに依つて愈〻その體用上の存在性を確實ならしめる。それは信仰の否定ではなく、打消し難い信念への道程である。信仰の絶對性はゲーテも亦ヤコビと均しく承認するにしても、そこに至る道に於てヤコビからゲーテを隔てるものは、此の理智の要求であつた。勿論當時、スピノーザに就ての兩者の研究が、兩者を截然と隔てるまでに進んではをらなかつたらう。それよりも寧ろ兩者をつなぐ友情の感激が一切を覆ふ程に強かつた。『かくしてわれらは、われらの求むる處が、その後、年と共に明白になつた樣に反對の傾向をとるであらうといふ豫感は全然なく、永遠なる結合の幸福な感情のうちに遂に別れを告げた。』のである。不幸にして此の『反對の傾向』が年と共に著しくなり、第二次、第三次のゲーテのスピノーザ研究に於て、ゲーテは遂にヤコビとは全く相容れない關係を明にせねばならなかつた。しかもゲーテがスピノーザに歸る機會を作るものは、常にヤコビであつた事は皮肉なる偶然であつた。

三

ゲーテの第二次スピノーザ研究は、一七八三年から八六年にかけてである。第一次のスピノーザとの接觸に於ては、上述の如くにゲーテはむしろ自己に對する當面の要求をスピノーザに托して、これを自己に反應せしめたともいふ事ができる。此の意味に於て、ズーファンやヘーリングの諸氏が若きゲーテのスピノーザ研究を以て、それ程に深いものではなかつたと斷ずる理由があらう。ゲーテはこの第二次の接觸に於て、眞に學的眞劍さを以てスピノーザを讀んだ。而して此の度は、彼に指導的影響を與へたものはヘルデルであつた。此の度の研究に機會を作つたものは、第一次のスピノーザ研究に際して主要な役割を演じてゐるヤコビであつた。併し此の度は、スピノーザに關する兩者の對立的立場が漸く明白になつて來た。ヤコビのスピノーザ問題に關する此の度の登場は、レッシングのスピノーザ思想を中心とするメンデルスゾーンとの論爭に關聯してゐた。此の論爭は、當時の代表的詩人哲學者の間に非常な關心を呼び醒したものであり、タールハイメルのいふが如くに、ドイツに於けるスピノーザ哲學への興味に一新紀元を劃したものであつた。ヤコビの著述は、『モーゼス・メンデルス

ゾーン氏に宛てた書簡のうちにスピノーザの學說を論ず』といふ二百頁の小冊子で、一七八五年に匿名で出版せられたものである。ヤコビは此の書のうちに、一七八〇年の七月、レッシングの死の數月前に彼をウォルヘンビュッテルに訪ねた際に交した對話を基礎として、レッシングが鞏固なスピノチストであると主張したものである。ヤコビは、レッシングの盟友メンデルスゾーンが亡友の性格と事業に關する著述に從事してゐる事を聞いて、已に一七八三年の十一月四日に、此の對話の報告をメンデルスゾーンに示してその參考に供せんとしたのである。素よりレッシングのスピノチストである事を信じないメンデルスゾーンは、これを認容しようとはしなかつた。しかし此の對話は彼にとつては大なる打擊であつた。友情を結んで幾十年、思ひ設けなかつた一面が友の歿後に明白にせられ、しかも永久にその眞僞を究明する機會なく、遂に友を知り得なかつたといふ世の嘲りとわが悲みはメンデルスゾーンの心を暗くした。彼は事實この論爭のうちに、この論爭の爲に仆れた。

此の論爭の直接の動機はゲーテの詩『プロメートイス』であつた。一七八〇年の七月、ヤコビがレッシングを訪ねたのは、Freigeist スピノーザの思想に對して自己の感情哲學を確實にし、レッシングを自己の有力なる味方とせんが爲であつた。然るに事實は全くその反對であつて、レッシングは極めて明白に自己がスピノーザの思想に共鳴する事を告白したのである。卽ちヤコビがゲーテの未發表の此の詩作をレッシングに示してその意見を訊ねた時、彼は此の詩の根本思想は全然彼自身のものと同一であると言つてヤコビを驚かした。『神に關する正統派の概念は、もはや予の同意し得ないものである。予はそれを享受し得ない。Ich bin alle (一卽一切)、予はそれ以外の事を知らない。此の詩の持論もそこにある。此の詩は非常に予の氣に入つた事を告白しなければならない。……若し予が何人かの說に同ずるものとすれば、これ以外の人（スピノーザ）を知らない。』と言ひ、『スピノーザの哲學以外に他の哲學はない。』と斷定し、世人は今も尙スピノーザを見る事『死せる犬』の如くであるけれども、かうした徹透した哲學に背をそむける事は、謂はば一切の哲學に背く所以である事を強調したのである。

ヤコビはレッシングとの此の對話を公刊する以前に、一七八三年十一月四日、メンデルスゾーンに送附してから間もなく、その寫しをヘルデルにも送つた。ヤコビは交を結んで間もないヘルデルからの返事を、大なる期待を以て待ち設けてゐた。ヘルデルはこれをゲーテに示した。『われわれは、大兄及びレッシングを相手に語り合つてゐる。』とゲーテからヤコビに書き送られたが、直接ヘルデルからの手紙は年を越して二月の六日迄待たねばならなかつた。ヤコビは此の手紙に於て、レッシングの場合同樣、否それ以上に強い言葉を以てヘルデルがスピノーザの思想に共鳴する事を確めた。ヘルデルは思ひかけずも、レッシングが自らの哲學的信條の同志であつた事を發見する喜びを述べて、『神の樣な』スピノーザに對する自己の好愛が、それに依つて一層強められる事を表明し、彼が豫て

計畫してゐたスピノーザ、シャフツベリー、ライプニッツに關する論文の著手を、此の機會によつて促進せられた事を述べてゐる。ヘルデルは、ヤコビの超世界的人格神の考へを斥けて、世界外に存在する神の如きは、神の概念とも世界乃至空間の概念とも矛盾する事を指摘し、スピノーザの神を單純なる抽象的概念と考へる樣なアンチスピノチストの謬見を擧げ、スピノーザの神こそは『最も現實的にして最も活動的なる唯一者』であると主張した。ヘルデルがヤコビに約束した論文は、『神論』の題目を以て一七八七年に發表せられた。ヘルデルはこれに依つて、由來スピノーザの哲學が永い間受けてゐた寃を雪がうと意圖した事が覗はれる。『無神論者』、『汎神論者』として、『宗敎の嘲笑者』として、『國家、社會の破壞者』そして『人類の敵』として、あらゆる迫害を受けたスピノーザの哲學にあつては、その困難なる構成を大なる忍耐を以て探求し、味讀する時、無神論者どころか『神の理念こそは彼には最初にして最後の理念である』事が明にされると言ふのである。ヘルデルのスピノーザ哲學の解釋はヤコビの發見したやうに、決してスピノーザの思想體系の忠實なる祖述ではなくして、自己の神觀をそれに讀み込んだ點が少くない。眞にスピノーザの哲學體系の客觀的理解は、ヘルデルよりもヤコビが正しい (Haym, Herder. II. S. 878)。唯ヤコビはスピノーザの形而上學の理論的方面にのみ注目する事が急であつて、此の哲人の思想の背後に在る宗敎的なるもの、道德的精神を讀み取る事ができなかつた。ヘルデルは此の點に於てヤコビと異なり、スピノーザに依つて自己の宗敎的信念を強められた。彼の見たスピノーザは、よし、主要なる點に於て unmeuten せられたにしても、それはスピノーザを殺したものではなくして、スピノーザの思想を同時代及び後の時代に活かし發展せしめる契機を爲した意味に於て、ヤコビの部分的に正鵠を得た解釋よりも生命があるものと見られ得る。

ヘルデルのスピノーザ unmeuten 中で最も重要なるものの一つは、神の屬性に關する解釋であつた。スピノーザによれば、神の屬性は思惟と延長である。延長卽ち物質の世界である。ヘルデルはスピノーザの神の物質性に關する見解を、彼の堅實なる體系中の最も大なる弱點であると考へた。スピノーザは時間と永遠とを明瞭に區別し乍ら、時間と全く同一に取扱はるべき空間を神の屬性と考へた理由はどこに在るか。ヘルデルの觀察では、スピノーザのかうした誤りは、彼の師なるデカルトが、精神と物質とを對立せしめて、物質と空間とを同義に取扱つた誤りから由來してゐる。スピノーザには精神と物質を結合する仲介物が缺けてゐる。これを見出し得る事に依つてスピノーザの思想體系に完全なる統一が齎らされる。ヘルデルはその仲介物をライプニッツの哲學から借りて來る。卽ちライプニッツの本質的力の概念である。かくしてわれらが神の屬性として認識し得る二つの屬性を、Denken と Ausdehnung とする代りに、根源力としての神が無限の力のうちに、無限の方法に依つて顯現するといふ考方が置き換へられたのである。同時に、物質が非物質的なる力に變化し得るといふ

見方によつて精神と物質との間の對立を解消し得たのである。物質は死物ではなくて生きてゐる。『何となれば、物質内には、それらの内部外部の機關に應じて幾千の生きた多樣なる力が活らいてゐる。われらが物質を知る事多ければ多い丈、愈〻多樣なるものをそこに發見する。かくして死せる延長なる空虛な概念は物質に於て全然消滅する。』かく物質の概念を以て置き換へた事によつて、スピノーザの幾何學的世界機構に著しい動きが取入れられる。此の動きの概念と共に、世界の發展の思想が結合して、自然卽ち神の世界に於ては不斷の進展が見らるるものであつて、有限の事物は常に最高の完全なるもの、神に向つて無限に高進する事をやめないといふのである。

第二次スピノーザ研究に際してゲーテは、第一次の場合とは稍〻事情を異にして、著しく學的研究の態度を示してゐる。第一次の場合と雖も、勿論學的關心がないではない。ラファーテルやヤコビとの間に交された手紙に於てその事は明に見られるのであるが、その動機に自己の心的生活の問題が關聯してゐる丈け、學的な表現に於て信仰の問題卽ちスピノーザの神觀が中心となつてゐる。deus sive natura の問題である。ウェルテルの所謂『自然の聖にしてもゆる生命』は、神の生命に外ならない。われらは此の神の生命をわれらのうちに體驗する。神は萬象のうちにあるものであつて、萬象の外に超絶的に存在してゐるものではない。詩『プロメートイス』に於て、超絶的なる神に對して何等の尊敬も權威も認める事ができなかつた意味はそこにある。神の認識は內的、直接的である。そこに何等

の介在物を許さない。一切のうちに神の生命と愛の充ち亙つてゐる事を敎へるスピノーザは、當時のゲーテに取つては、これまで信ぜられてゐた樣な無神論者でないのみならず、『最も大なるキリスト敎者』として映つたのである。當時、旅行を共にしたラファーテルは、此の問題に關して、その日記のうちに、『ゲーテは予にスピノーザ及び彼の著作に就て多くを語つた。彼は主張する。何人と雖もスピノーザ程神に關してキリストに近似な所說を爲したものは無かつた。』と書いてゐるのは、當時ゲーテに働きかけたスピノーザが、彼の精神生活に對して聖書の持つ信仰的な力に近いものを持つてゐた事を示すものである。而して一七八三年に始るスピノーザの研究にあつてはシュタイン夫人及びヘルデルと共同なる學的檢討が主體となつてゐる丈、第一次の場合に增して一層スピノーザの思想內容を明瞭ならしめ、それに觸發せられて自己の思想に著しい成長を促すよすがを得たものである。一七八三年の末、ヤコビからヘルデルに宛てて送られたレッシングとの對話の報告は、ゲーテ、ヘルデル、シュタイン夫人の團欒に多くの『たのしい夕』を齎らした事をゲーテは報告してゐる。年越えて八五年の秋、ヤコビが自らワイマルに彼等を訪ねた事があつてから、ゲーテは愈〻シュタイン夫人及びヘルデルと共同にスピノーザの研究に沈潛した。當時ゲーテはクネーベルに宛てて、『予はシュタイン夫人と共にスピノーザのエティクを讀んでゐる。彼の精神は予の精神に比べると遙かに深く純であるが、兎に角予は彼に非常に近い事を感じる。』と書いてゐる。八五年の一月にはヤコビに宛て

て『予はスピノーザに觸れて自己を修錬してゐる。予は反復して彼を讀みに讀んでゐる。……予は一切の判斷を保留するが、しかし、これらの題材に於ては、予はヘルデルと極めて同意見である事を告白する。』と書いてゐる。此の度の論爭に關しては、彼はヤコビをいたはる態度を示しつつも、しかも自己のスピノーザ觀が彼のそれと離れて、ヘルデルに左袒する事を隱さうとはしない。ヘルデルも亦、『ゲーテはスピノーザを全く予が理解してゐると同樣に理解した。』と言つてゐる。ヘルデルは一七八四年のクリスマスにシュタイン夫人を通して、ゲーテに彼の所有の Opera posthuma を寄贈し、『おんみが彼の氣に入らしめた賢者を彼に贈られよ。かくしてスピノーザをおんみらには常に聖なるキリスト教者たらしめよ。』と書き送つた。ゲーテは此の『聖なるキリスト教者』に就て、曾つてラファールテルに對して主張した樣に、此の度はヤコビに對して主張せねばならなかつた。一七八五年六月ゲーテはヤコビに宛てて『君は最高の實在を承認される。それは全スピノーザ思想の根源であり、自餘の一切はそれを基礎とし、一切がそこから流れ出づるものである。彼は神の存在を證明しない。存在は卽ち神である。而して他の人人が彼をその理由で無神論者と非難するならば、予は彼を最高度の有神論者、又は最大のキリスト教者と名づけ讃へ度いと思ふ。……』と書いて居り、更にヤコビのスピノーザ論爭の著書が公刊された後に、明白に自己が彼と立場を異にしてゐる事を宣言し、『君が知る如く予は此の問題に關しては、君と見解を異にしてゐる。予にはスピノーザの思想と無神論とは異なれる二つのものである』事を強調し、スピノーザの『エティカ』を以て、凡そ世に存在する書中に於て自己の思想に最も近いものとして擧げてゐる。當時ゲーテは、ヤコビの著述に於て自作の詩『プロメートイス』が論爭の渦中に卷込まれてゐるのを發見して意外の感を催したのであるが、併し彼自身は、ヤコビに對する手紙のうちに自己の態度を闡明してゐる以外、進んで自己の所見を發表する事をしてゐない。そしてヤコビに對しては、自分は今自然科學の研究に忙しいので、形而上學に關して議論する餘裕のない事を以て、論議の渦中に投ずる事を避けてゐる。異なれる信念に立つ者がかかる問題に關して論議する事の何等の效果を收めるに至らない事は、ゲーテには餘りに明白な事であつたらう。異なれる宗教的信仰に立つて、そこを議論の根據とも避難所ともするものに對しては、ゲーテがヤコビに對してなした如く、一切の論議を避けて自己の信念の最後的結論を以てこれに應酬する事が最も賢明なる方法であらう。勿論ヤコビから求められた批判を回避した事が、かかる理由から出たとは言はないが、ヤコビのスピノーザに對する見解の發表に依つて、その思想的立場の相違が兩友の間に極めて明白に示された事は事實であり、此の事實の前に最早多くの言葉を費す事によつて強ひて友情を濁す必要をゲーテは感じなかつたらう。併しゲーテの當時のスピノーザ研究に關して、その內容を覗はしめる材料がないではない。それはシュタイン夫人の手記になつた『スピノーザ論』である。これは恐らく一七八四年から八五年の冬に亙つてゲーテがシュタイン夫人とスピノーザ

を耽讀した際、ゲーテが偶〻シュタイン夫人に口述したものであると推定せられる。これは Suphan によつて一八九一年のゲーテ年鑑に初めて發表せられたものである。此の論文の内容の詳細なる研究に就いては、ディルタイの Aus der Zeit der Spinoza-Studien Goethes（ディルタイ全集第二卷三九一頁以下）を參照すべきであるが、唯一言その中心點を述べるならば、ゲーテは、スピノーザの全體系の綜合とも見らるべき言葉『存在と完全性の概念は同一である。』といふ前提から出發して、神の遍在に關するその信念を理論的に立證しようと試みる。世界以外に存在を考へる事は不可能である。空間の概念も世界の諸現象からの抽象である。故に世界以外に神を考へる事は無意味である。而して、有限の神を考へる事も亦同樣無意味であるが故に、神は全然存在せざるか乃至は世界に内在するものでなければならない。かうした考方は、ゲーテが一七八五年の六月にヤコビに宛てて、スピノーザの哲學は『神の存在を證明しない。存在は神である。』と書き送つてゐる言葉と照應するものである。而してわれらが此の存在と完全性の概念を、われらに可能である限りいづこまでもと追及して行く場合、無限と言ふ思想が生起して來る。『併し無限といひ、完全なる存在といふも、われらに依つては思惟せられない。』それはわれらの思惟の限界を絶するものである。茲に有限と無限、個と全體の關係が問題となつて來る。『一切の局限せられたる存在』は無限のうちにあるにしても、無限は有限なる部分を持ち得ない故に、その『局限せられたる存在』はそのまま『無限の部分たり得ない。』それが無限

の部分たり得る爲には、『無限に參與』せねばならない。茲にゲーテの世界觀に、かのヘルデルに見たと同樣に力乃至發展の概念が現れて來る。ゲーテが他の場所に於て『汝、無限のうちに歩み入らんとするならば、唯一切の方面に向つて有限の中へ歩み入れ。』と言つてゐる如くに、有限が無限を認識する事は、唯、無限なる行による内的體驗によるのみである。無限と有限は、概念としては遂に關聯を見出し得ざるもの、即ち有限は遂に無限の部分たり得ないものであるけれども有限が無限なる精進、即ち自ら無限の道に參與する事によつてのみ、超ゆるべからざる兩者の矛盾を統合し得るのである。

更に個個の事物、殊に有機體に就てもゲーテは、全體と部分の關係を外部から見ずして、内部から、有機的なる相關に於て見ん事を主張する。『即ち凡ての存在物はその存在を自己の内部に有する。かくして又その存在の規範たるべき一致をも自己のうちに有する。』各事物は、それ自體内に於てその絶體的なる完成の目的を達成すべき可能性を具有する。此の目的の爲に各部分は極めて微妙なる關係に於て有機的に作用し合ふ相關關係に立つものであつて、此の場合部分と全體とは相分離する事ができない。『部分は唯全體のうちに全體と共にのみ理解せられ得る。』故に有機體の理解に當つては外部から或る標尺を以て臨む事は許されない。彼は自體のうちにのみ自らの標尺を持つ。此の標尺は、個個の有限體がその部分の全體に對する關係に於て見られる。而して此の關係自體は、その内部に

『無限なるもの、生生きしたもの、究め難いものを持つてゐる』のである。個體がその存在を自己の內部に持つと同時に、それは又無限に參與する所以である。」ゲーテは部分の全體構成に於ける有機的法則性を、スピノーザに於ける實體の屬性としての modi から導き來つたものである。玆にヘルデルが力の概念を以てしたと均しく、ゲーテも亦スピノーザの延長の概念を有機的生成の概念を以て置き換へた事によつて、スピノーザの世界像に著しき生氣と色彩を注ぎ込んだのである。」

要するに此のスピノーザ論にも見らるる如くに、當時のスピノーザ研究の主題は有限と無限、個と全體との關係、實體とその樣態との關係であつた。個體の持つ有限性と、それが無限へのつながり、個個の對象の研究が單純に個別的分散的觀察に終らずして、やがて無限のかなたへの展望に通ずるとの認識は、自然研究に著手した當時のゲーテの立場を決定する上に極めて重大なる關係を有するものである。一七八五年六月九日のヤコビ宛の手紙の中で、『神的本質に就て議論せられる場合、予が沈默を喜ぶ事を許して呉れ。予はその神的本質を唯 res singulales（個個の事物）のうちに、又そのうちからのみ認識するものである。而して、その個個の事物の一層詳細にして一層深い考察に對しては、たとひ、スピノーザの目の前には一切の個個の事物がその影をひそめる樣に見えるけれども、何人も予をスピノーザ以上に勵ましてくれるものが無い……予は今、山の中で、木草や鑛石のうちに神性者を探してゐる。』と書いてゐる。當時のゲーテに取つては、たとひ彼がスピノーザに何を『讀み込

んだ』にしても、彼の學的研究の態度を根據づけ、彼を勵ましたものである事は明である。而して、かくスピノーザがゲーテの思想內容を豐かにし、その輪郭を明白ならしめたのみならず、最後に最も重要な事は、ゲーテの事物觀照の態度に最後的なる決定を與へたとも見るべき事實である。一七七八年五月九日、ゲーテはヤコビに宛てて次の如き重大な告白を書き送つてゐる『人は只神を信ずる事ができる丈けであると君はいふが、予は君に言ふ。予は直觀を重んずる者であると。而してスピノーザが Scientia intuitiva（直觀的學）に就て述べて、「此の認識の方法は、神の二三の屬性の形式的本質の妥當理念から出發して事象の本質の妥當認識に進む」と言つたが、此の數語こそは予の全生涯を事象の觀察に委ねんとする勇氣を予に與へたものである。……』個個の事象のうちに現れる神の相を直觀によつて掴まうとし、掴み得ると信じた詩人的科學者ゲーテは、自己の創造的天才の眼を直接に神の創造の內奥にまで滲透せしめ得たのである。かくして單純なる解剖眼を以てしては容易に發見せられなかつた人間の顎間骨の發見となり、イデーをまのあたり見る事を強調した Urpflanze の形態發見にまで進んだのである。彼の科學はやがて彼の哲學の全部といふ事ができる程、Denken と Schauen とはゲーテに於て相卽不離なる關係にあるのであるが、彼の Schauen をして、深い哲學的根柢に連なる事を敎へたものはスピノーザであると言ふ事ができるのは、上述の告白によつて知る事ができよう。

四

ゲーテの第三次、卽ち最後のスピノーザ研究は、一八一一年の末に始る。ゲーテをしてスピノーザに歸らしめたものは、此の度も亦ヤコビであつた。ゲーテはヤコビを友として尊敬する事をやめなかつたけれども、しかも、此の數十年の交友關係はスピノーザをめぐつて、遂にその一致點を見出し得ずして、スピノーザに關する論爭が行はれる毎に、ゲーテは常に此の友の論敵と結ぶ可き地位に置かれた。八十年代のスピノーザ論爭の時代に於てヘルデルと結んだゲーテは、此の度はシェリングに左袒してヤコビを敵として見なければならなかつた。ヤコビは、此の度も亦スピノーザの哲學を哲學體系としては最も徹底せる哲學として承認しつつも、依然としてこれを無神論として排擊し、自然哲學の創設者としてシェリングをも同樣なる見地から非難したのである。ゲーテはその『紀要』(アンナーレン)の一八一一年の條に次の如く書きしるして、ヤコビの著、Von den göttlichen Dingen に對する自己の態度を明にしてゐる。『ヤコビの Von den göttlichen Dingen は予に滿足を與へなかつた。心から愛してゐる此の友人の著書が如何なる理由で予に迎へられなかつたか。その中に一貫する主題は、自然は神を隱被するといふのである。予の純粹にして深い、生れながら具へてしかも修錬した直觀の方法、それは予をして神を自然のうちに觀、神のうちに自然を觀る事を斷乎として敎へ、その結果此の思惟法は予の全存在の根柢をなしてゐる以上、上述の如き奇怪な、偏狹な言葉が、予の愛敬する心情の持主たる世にも氣高い人物から、精神的に予を永久に遠ざける事は避け得られないではないか。が予は予の傷ましい不快に思ひなやむ事をせずに、予の古き避難所に逃れた。そしてスピノーザのエティクに於て數週の間予の日日のたのしみを見出した。そして、一方予の敎養が以前より進んでゐたので、已に知られてゐるものの中にも新しく異なつた姿を以て現れ、全く獨自に生生きと予に働きかける多くのもののある事を認知して驚嘆した。』と書いてゐる。かくして四十年來の友なるスピノーザは、ゲーテがその精神生活の高進と共に愈〻離れ難いものとなつて來る事を思はせる。一八一二年の春に、ヤコビを反駁するシェリングの書 Denkmal der Schrift des Herrn Jacobi を落手した時、『多くの考察』をなすべき機緣を得た事をクネーベルに宛てた手紙に述べてゐる。一八一三年の夏、ゲーテは『詩と眞實』の先に述べた第十四卷及び第十六卷に於て、スピノーザの青年時代の思出を敍述した。此の中には、當時のスピノーザに對する態度も亦尠なからず反映してゐる事を見逃せないのである。殊に第十六卷の記述に於て、これを跡づける事ができよう。一八一五年の夏はライン地方を旅行し、『西東詩篇』のズライカなるマリアンネ・フォン・ウィレマーと相聞の歌を交したのであるが、その際、老ゲーテが常に携帶して離さなかつたものはスピノーザの『エティカ』であつた。彼は四十一

年前同じ道を旅して、常にスピノーザをその思索の中心から離さなかつた頃の事を今にして回想し、此の哲人の思想が如何に自己に深い影響を與へたかを深く銘記した事であらう。翌一六年再びリンネ、沙翁に並べてスピノーザを擧げ、彼を自己の Herr und Meister と呼んでゐるのである。

ゲーテの第二次と第三次のスピノーザ研究の間には、カントの先驗哲學がゲーテの視野のうちに現れた事を注目しなければならない。ゲーテはこの哲學に對して、更に自己の立場を考察しなければならなかつた。而してその神卽自然の同一原理の立場から、カントの先驗哲學と相容れる事のできない事を見なければならなかつた。彼がヤコビを批判するに際して、『精神を論ずるものは自然を、自然を論ずるものは精神を豫定するか、或は暗默のうちに認容してをらねばならない。』と言つてゐるのは、やがてカントに就ても言はれる事である（Gerhardt, Spinoza. S. 65 參照）。ゲーテは此の度はシェリングの自然哲學の立場によつて、ヤコビの感情哲學を排した。一八一二年の春、クネーベルに宛てた手紙の中で、『精神と物質、靈魂と肉體、思想と延長、或は（新らしいフランス人のいしくも言つた樣に）意志と運動が、宇宙の必然的なる二重成分である事が過去も現在も未來にも變らず、此の兩者は同樣なる權利を自己に要求し得るものであり、その故に兩者は共に神の代理者と見做され得べきである事を理解し得ない樣な人間――かかる考へにまで到達し得ない樣な人間は、當然疾の昔に思索する事を止めて、大衆的俗論にうき身をやつすべきであらう。』と極めて激しい調子でヤコビの思惟

法を排擊してゐる。

五

かくしてゲーテの第一次のスピノーザとの遭逢に於て、學としての影響よりむしろスピノーザの倫理的體系の持つ宗教的感銘によつて忘れ難い影響を受けた時代から、第二次の實體と樣式、無限と有限、全體と部分の關係に關するスピノーザの哲學の學的體系の究明乃至それによる自己の思想體系の確立の時代を經て、第三次の研究に於て、自己が自然研究の體驗的實證を以て神卽自然の問題を強調し、青年時代のスピノーザ研究の出發點をその實證によつて確立した。卽ち神の屬性として自然の種種相を、神の直接なる表現として觀るべき確信に達したのである。かくして靈を肉から分ち、物質を精神から抽出するが如き觀察態度を排擊して、自然の實相のあるがままのすがたのうちに神のはたらきを觀、そこに神の曲ぐべからざる法則性のあらはれを悟證したのである。所謂事理無礙の哲理に徹して動ずる事のない內的生命の光景を、晩年のゲーテはわれらに提示する。若きゲーテが自己の對極として眺めたスピノーザは、かくして彼自らの姿として眞に自己の Herr und Meister となつたのである。

ゲーテと東方思想

一

若きゲーテの心に劇的興味を催さしめた人物のうちにマホメットとプロメートイスがある。マホメット、東方の豫言者、唯一永遠にして一切に遍滿し、一切を愛する神の宗教の創始者である。その神は如何なる材料を以てしても表現することが困難であり、如何なる官能を以てしてもその全部を捉へ得ざる神、而も『いづれの靜かなる泉のほとりにも、いづれの花咲ける樹蔭にも會はれる』神である。更にプロメートイス、これは創造的英雄兒、戰士、力の人、行の人である。自己の力に信賴して人間性を強調して神をあざけり、おのれ自からの胸に神を見んとする勇者である。

この二つの人物の典型は、不思議にも若きゲーテの魂の中にひそんで、彼のいのちの呼吸、創造のリズムを構成する。彼の詩的創造はこの兩典型の葛藤相剋の所產である。この詩的創造の表現が常に彼の內的生活の『告白』に他ならない限り、この兩型によつて與へられる表現は、そのまま彼の內面的本質の最も必然的なる表示であらねばならない。この兩型を神に卽して云へば、絕對者の認識、それに對する絕對的歸命の態度と同時に、神性自我の自覺と、その無限大への伸長に向つての勇猛精進の態度である。この二つは矛盾相剋の相を呈してゐることは云ふ迄もないが、しかも、ゲーテはこの

矛盾に於て、唯一なる生命存在の必然的なる表徴を見たのである。彼の好愛する言葉を以てすれば、Ein- und Ausatmen, Diastole und Systole, 或は植物成生の原則たる Ausdehnen und Zusammenziehen 等の分裂的現象の背後に生命の必然的なる脈搏を觀たのである。唯天才の創造生活に於ては、このいのちの呼吸の旋律が極めて強く高く、且つその相關的關係が切實で、有機的なる整調を持つてゐる。われらはゲーテの生活と創作の凡てを通じて、この矛盾の原理が到る處に動いてゐる事に氣がつく。そして彼の長い生活と創造の系列の歴史は、このいのちの旋律がみづからの本質を自證して、矛盾相剋がまさしく唯一なる『我』の必然的分裂であること、卽ちこの分裂矛盾によつてのみ愈〻その存在を明にし得るといふ事の自覺を、無限に深め、無限に高進せしめる過程であると云ひ得る。

彼は自分のいのちに他ならないこの法則によつて、彼の生活圏内に入り來るすべての素材を消化して行く。われらは、茲で彼のこの創造の熔爐の前に置かれた東方文化に就て觀察する。

二

自然の一切處に神を見て、その神へ絶對的に歸命して行くマホメットの態度には、多くの東洋的なるものを見る。而して、人格個性の自覺の上に創造の生活を刻み行くプロメートイスは、明らかに西歐文化の特質を藏してゐる。ゲーテは生れ乍らにして、この二つの文化の所有する特質を、そのいのちの旋律として持つてゐたといふことができる。シュトゥルム・ウント・ドラング時代の彼の胸のあらしは、實にこの旋律の最も激しく波打つたことを語つてゐるものである。當時彼に東方の思想に對する目を開いたものは、實にヘルデルであつた。彼はこの師友によつて、自己のうちなるマホメットを見出し得たのである。

このあらしが過ぎてから、彼はしばらく東方から目をそむけたものの如くであつたが、十九世紀の初頭から動き始めた浪漫派の思想が、その目を東方に向けて宗教的新生の泉を、そこから汲み來らんと企圖した時、ゲーテのうちなる東方への憧憬が再び目醒め始める。

この東方文化への目醒めは、實にゲーテの內的生活に於ける青春の復歸を意味する。クラシック藝術の清朗典雅なる形式の殿堂に、自己の藝術を圓熟せしめつつあつた老ゲーテが、ペルシャの詩人 Hafis の魂にふれて再びその潑剌たる若やかさに立ち歸り行く姿は、一つの驚異である。彼はその步みによつて、これ迄嚴めしくも立て籠つてゐた形式の殿堂を破つて、再び若きゲーテに歸つて來る。そして、かほり高き葡萄酒に青春と愛の陶醉を歌つたペルシャの老詩人に和唱するのである。彼に於けるこの東方への動きはロマンティーク運動の刺戟と共に、內面的には永遠に若やかな天才の魂が、彼の所謂 Suleika なる Marianne von Willemer に對する新なる愛に燃えた事が直接の原因であり、外

的には當時の西歐文化からの逃避から發してゐる。當時ナポレオンをその代表としてゐるヨーロッパの精神生活は、爭鬪、政策、主權以外の何ものをも見なかつた。彼を圍むものは、フランス革命の擾亂以來、走馬燈の如くにめぐる戰亂紛糾のみである。實に『ファウスト』第二部に於けるメフィストの言葉の如く『名は自由權の爲の爭でも要は奴隷と奴隷の爭である。』この噴火山的動搖の生活は、決して人間の求むべき本來の生活ではない。人間生活のこの政治化は、正さしく永遠なる人類の文化を危くするものであるとゲーテは觀た。且つ自己の本來の使命がこの混亂の渦中に卷込まれて、その姿を見失ふ事を恐れねばならなかつた。彼は目を東方に轉じて、わが魂の安息處をそこに求むると共に、西歐の精神的動搖を救濟するの鍵は、正さしく東方文化にある事を思うたのである。彼の心には、東西文化の融和の理念が萌して來る。West-östlicher Divan は實にその融合企圖の詩的表現に他ならない。

三

ショーペンハウエル以來、ドイツに於ける所謂東洋思想の代表は佛教が主要なる地位を占めてゐた。云ふ迄もなく、當時ヨーロッパに紹介せられてゐた佛教思想は、極めて素描的のものに止り、それも、支那・日本に發達して來た大乘佛教でないことはいふ迄もない。從つて、人生の苦惱を強調して、その苦惱が幾世に轉廻する事を敎へ、速かにこの生活の苦惱裡から出離せんがためには、先づ生に對する意欲を斷つことのみをすすめ、隱遁獨善の消極的生活から理想の Nirwana を打開することを敎示してゐる小乘的敎理は、勿論ゲーテの魂を打つ程の力がなかつたのである。ゲーテの思想體系の本質から云へば、彼は實に大乘佛敎の行者であると見たい。これは勿論玆に說く機會がないが、均しく佛の敎說でも、その強調する方面の差がやがてその影響する方面に如何に大なる距離を得來るかを知るものには、ゲーテがその時代に知られた佛敎思想に何等の共鳴を感じなかつたかを充分に理解し得られると共に、彼の思想の本質が偶〻佛敎の大乘的敎說の強調する方面に著しく接近してゐる事も否定できない。生の讃美者である彼は、青春復歸の當時に於て、殊に人間の世、大地の美に歡喜を感じたのである。いふ迄もなく彼と雖も、人生の樣樣な苦惱の姿を見、深く身に體驗し來た事は、彼の創作を通じての告白によつて明らかであるが、しかし、この苦惱にも係はらず、否正さしくこの苦惱によつてこそ愈〻人の世に愛著を覺えたのである。彼はこの苦惱から遁れて獨善の生活に入る事によつて、この苦惱を離脫したのではなくして、正さしくこの苦惱を藝術に淨化することによつてこれを克服した。そしてこの克服から生の大なる歡喜を經驗し得た天才である。彼の興味は飽くまでも『人』にかかつてゐた。故に人間を逃れる敎理は、彼の理解し得ざる處であると共に、當時浪漫派によつて紹

介されたインドの造形美術、主として波羅門教、印度教等の奇怪なる形態は均しく彼の興味を惹き得なかつた。この點に於ては、彼は依然として古典主義を奉じてゐたのである。

唯印度文化のうちで、深く彼の興味をそそつたものは印度の文藝であつた。殊にその劇詩『サクンタラ』の劇的構成が『ファウスト』に影響を與へてゐる事は周知のことである。彼が茲で喜んだものは、永遠なる人間の姿であつた。彼は茲で最も純なる、最も自然なる人間の生活を見得たのである。至純なる女性の德、無垢なる忍從、子を介しての父母の融合、これらは、然し必ずしも印度思想に特殊のものでなくして、眞實の人間の生活に不滅なる價値を賦與するものである。ゲーテがこの『サクンタラ』に感じた歡喜は、自己の求むるものが、遠く印度の昔に生きてゐたことを確め得た喜びである。この喜びは、時劫と方處を超越した汎人間的價値發見のよろこびである。ゲーテはこの喜びを支那に於てもペルシャに於ても、感じたのである。しかし、これらは殊に彼の目を東洋に向けしめた主因でない。それは、彼の本質に根ざしてゐる東洋的なる或ものが、ギリシャ、ヨーロッパ的形式を以て滿飽し得なくなつた內面的必然性に基く。東方文化はかくしてゲーテのうちなるこのあるものを開闡する使命を帶びて彼に臨んだのである。

四

茲に東洋と西洋に於ける重なる差別的特性に就て述べて見る。それを一言にして云へば『知』に對する兩精神の差である。古い東方の思想に於ては、ギリシャにその淵源を發してゐる『愛知の學』卽ち哲學が無い。卽ち『知』と『眞理』を、他の一切の生活や目的から切離して、純粹にそれ自身の目的の爲に考究する態度は東洋の思想と大なる隔りがある。この知の爲の知、眞理の爲の眞理は、自然これを考究する人人をも、社會共存の集團から切離して獨自の立場に孤立せしめる樣になつて來た。彼等はその到達し得た『眞理』の爲に、集團生活の基調をなす宗教と矛盾に陷り、その結果多くの戰ひや、受難を經驗し、果ては自己の生命をも犧牲にせねばならぬ樣になつた。それに反して古い東洋の人人は、この矛盾に陷ることがなかつた。彼等は始から全然宗教的集團の人人であつて、個體としての彼等の存在は、その基礎を深くその宗教の上に植ゑつけてあつた。從つて彼等の『認識』、『知』はそのまま宗教であつた。その『知』には目標がある。それは卽ち神との一致であつた。東洋に於ては生と生の學との區別がない。歐洲に於て見る樣な認識の主體と客體との區別は茲には存在しない。彼等の最上の智は菩薩智である。彼等の眞理は彼等の宗教であり、彼等の聖者は卽ち認識に透徹した

覺者である。

處でゲーテの思想の特性を見るに、西歐の哲學とは如何にしても照應し難きものを持つてゐる。彼は西歐の哲學に見る主觀と客觀を分離することを知らなかつた。彼の思想並に彼の學的研究の方法を最もよく特色づけるものは、彼の自然研究の結果である。彼の出發點は常に生きた『一全』である。その『一全』から有機的なる『部分』への觀察を深め行かうとするのである。機械的なる分解、所謂科學的と稱する研究方法に對しては、彼は多くの價値をおくことができなかつた。Heinroth が、彼の思想の方式を說明して gegenständlich tätig であると云つた時、彼はまさしく知己の言として喜んだのである。彼はこの言葉を自ら筆をとつて說明して、『わが觀照そのものが思惟であり、わが思惟は觀照である。』と云つて、彼の思惟卽ち思惟の主體は、思惟さるる客體から差別され得ない事を宣言してゐる。西歐の學的方法である分析、抽象は彼の關知しない處である。彼の本質を構成するものは直觀的な統合的な力であつて、この力が彼を外界と調和せしめたものであり、これが彼の認識であり、これが彼の宗教であつた。彼が西歐の哲學者の間に於て早くも Spinoza の哲學に傾倒したのは、偶〻この哲人の所說のうちに自己の本質を反射するものがあつたからである。主客の分離を最後の統一のうちに融合せんと努力したこの哲人の思想の基調は、實際又、その淵源を東方の思想に發してゐる事に注意せねばならない。

五

ゲーテが東方思想に於ける種種なる發見、そこから得來つた多くの啓示は、謂はば彼自身のうちなる本質の實證であり、彼の生命の法則の自覺の深まりである。卽ち彼の東方思想研究の時代は、彼の生命のリズムである二個の相關典型中のマホメット的傾向の強調と見る事ができる。われらが早く已に彼に於て『ガニメート』(彼の詩)を通じて見ることができた最も謙虛なる宗教的沒我の一面が、極めて純に、極めて力强く彼の表現のあらゆる方面に示されたる時代である。玆に西歐思想の基調である個體意識の強調は、彼の前に暫くその光を失ふ。一八一三年の戰亂の渦中に、彼は眞摯なる態度を以て支那の思想に注意を向けた。彼は個體意識の強調の前に、社會共存の團體生活の諧調に深い意味を見ると共に、支那の思想の主潮をなしてゐる儒教の思想に多くの共鳴を感じた。個體が團體のうちに融合するのみならず、所謂天地人の三才に亙つて整整たる諧調を保つて、そこに展開さるべき音樂的なる調和の生活に於て最高なる道德の理想とした孔子の教へには、確に『ウイルヘルム・マイステルの遍歷時代』に現れてゐるゲーテの社會生活の理想がうかがはれる。孔子の教へは個の道德的修養にあるにしても、それは常に個の社會人としての教養を主眼とする。如何にして最も善き市民たるか

にある。仁義禮智信の五常の道は、個が如何にすればこの永遠にして嚴肅なる人類生活の法則に順じ、その諧調ある生活に參與し得るか、を敎へる宗敎的意味を持つものである。個の存在は相對的存在として考へなければならない。卽社會的相關的關係以外に個の存在は考へることはできない。個の絶對的獨存は、卽ち直ちに個の存在の否定を意味するものでなければならぬ。これは孔子の思想であると共に、ゲーテには不幸にして知られなかつた大乘佛敎の思想でもある。ゲーテは實に、この孔子の思想に自己の意味を讀み込んだ。彼の『遍歷時代』が、この集團生活の單位ともいふべき家族、卽ち『神聖なる家族』から始まつて遂に社會的結合の理想にまで展開して行く事は注意すべきものである。この永遠なる法則の參與、卽ち定められたる絶對的なる道に歸命する所にゲーテの宗敎的意識の表示を見るのである。『絶對的なる歸命こそ最高なる政治、道德、宗敎の法則として宣言さるべき』ものとなつて來る。かくしてゲーテは永遠なる『必然性』の前にぬかづくのである。彼が、われらは皆 Islam に改宗せねばならぬ、と云つた言葉は、必ずしも言葉通りの意味に於てマホメット敎を全的に是認したと見られないけれども、マホメット敎に見られる絶對者への歸依感には、彼の宗敎意識の最高頂なる『畏敬』を思はせるものがある。彼はこの必然性を自己の外に拜むのみでない、否彼はこれを自己の外にのみ拜む運命主義者でなくして、實に自己のうちに動くやみ難い必然性を禮拜合掌するのである。

彼の藝術創作上の體驗が最もよく彼にこのうちなる Dämon の存在を敎へたのである。彼のやみ難い創造的ドランングは、彼をして最も自由なる天地に逍遙遊せしめたと共に、そのドランングは、彼の意志の力を以てしては如何ともすることのできない運命性を以て彼を驅り立てたのである。この創造的生活に於ては、彼は實に絶對的なる自由人であると同時に、絶對的なる運命のうちに支配されたのである。この時彼には自由卽運命であつた。かくして、ファウストの所謂『二つの魂』なる生命のリズムが、ゲーテに於て如何に調和されるかの消息を窺知する事ができるであらう。この點に關する研究は更に他の場合に於てなさるべきであるが、兎に角かうした絶對的必然の認識と、それに對する絶對的歸依の思想から生れ來るものは、ゲーテの宗敎思想の中樞をなす Entsagung の思想である。

Entsagen 卽ち離慾の思想は、ゲーテが Spinoza の哲學に於て見出した信條である。人間の一切の不幸は自己の限度を知らない慾念、無智の情炎、幸福を外に追ふ衝動から由來する。

これらの衝動は必然者、卽ち神の意圖を內に明知する者には、自ら消えて行かねばならぬ。玆に印度の聖者に見る禁慾的生活の信條を見る。この無知無明から解放された Entsagen の認識はやがてゲーテの藝術觀に影響を持つものである。彼が曾つて、われは神の樣な生活をしてゐる、そして喜びも悲みも持たないと云つた、この水の樣に靜かに澄み渡つた心卽無關心の心を以てして、始めて眞實に藝術觀照の心とすべきことを求めてゐる消息が理解される。

小さき主觀の慾念や、願望に塞がれてゐる心は眞に藝術の世界に逍遙遊する事ができないと說くのである。卽ち主客の一致に於て、眞實なる藝術的理解を求むる立場は、主觀を擧げて悉く對象の懷にをどり込むことを求める事である。これを宗敎的立場に移して云ふならば、自我の全部を擧げて絕對者に委ね行く愛の心である。スピノーザの報酬を求めざる神への愛である。完全なる『我』の放下である。西歐の思想の主潮として見られる『我』の主張、個性の尊崇、自と他との截然たる差別、それは多くの場合に於て所謂權利思想の强調に過ぎないものである特性は、ゲーテのうちに生きた東方人が左袒し得ざるものであつた。

Westöstlicher Divan の Suleika 章に出てゐる有名な句、

Volk und Knecht und Überwinder,
Sie gestehen zu jeder Zeit:
Höchstes Glück der Erdenkinder
Sei nur die Persönlichkeit.

は多くの場合ゲーテも亦人民、奴隸、征服者達に同じて人格を最高のものであると是認してゐる樣に取られてゐるが、それにつづく句に於て、ゲーテは明らかにそれ以上の境地の望ましいことを暗示する。

Doch ich bin auf andrer Spur:
Alles Erdenglück vereinet
Find' ich in Suleika nur.

卽ち彼は、民衆や奴隸や暴君から明に自己の行くべき道を區別して、地上の幸福をわが愛の對象の上に求め、狹苦しい『自我』の殼から解放せられて愛の懷に身を投じた時、彼の幸福の天地が開けて來ることを告白してゐる。

この絕對歸依の態度から始めてゲーテの意味する行（Tat）の意義が展開して來る。マホメットやガニメートと並んで彼の胸に生きるプロメートイスの眞實のいのちが理解されて來る。彼は、神に於て常に創造して息むことのない力を見てゐる。その力は盲目的なる動ではなくして、絕對なる光、卽明智の上に動く力である。それが卽ち大行（Tat）である。ファウストの聖書の飜譯に當つて『太初に道あり』といふ Logos を『辭』『意味』『力』の過程を經て行（Tat）といふに至つて滿足することができた消息は、行のうちに上述の一切を攝入して、そこから生れて來る創造を意味することを語るものと見たい。

この創造、神の Tat に參與し得るものは、先づ『我』の殼を破つて裸のままに神の懷にをどり込まねばならぬ。ゲーテが Divan の中で Stirb und werde! とさながら神の如く强く鋭く叫んだのは、『我』

に死して神の愛に蘇へるべき事を端的に要求してゐる言葉である。かくして蘇へつた時に始めて大行の天地が廓然として開けて來る、大死一番の後に蘇へる新生である。この死生の最も有機的なる更代、絶對歸命と神らしい創造の相關は、ゲーテに於て生命の呼吸として相分つことのできない唯一なるものの唯一なる表現形式であつた。卽ちマホメットのうちからプロメートイスが蘇へり、プロメートイスは限りなくマホメットのうちに死んで、そこから新鮮にして涸れる事のない生命の泉を汲まねばならなかつた。この矛盾分裂せるかに見える二つの魂の無限なる轉換のうちに、唯一なるゲーテのいのちを見る事ができる。この『唯一なるゲーテ』に向ふ時、東西兩洋の思想の主潮が渾然として調和せられて、而も東方人にもあらず西方人にもあらぬゲーテ、世界人が躍り出て來るのを見るのである。

ゲーテとその社會思想

ゲーテの思想に於て見られる最も著しい特徴の一つは、極めて有機的であるといふ點である。この言葉は多くの意味を含むもので、其處から彼の天才の全豹を說明する事ができる。有機的であるといふ事は普通にいふ體系的といふ事も含んではゐるが、それよりももつと生きた力の籠つたものである。哲學の體系とか經濟學の體系とかいふ風に一つのまとまりのある秩序の整然たる形式を具へてゐる一つの全體は、同時に有機的であり得る事もあるが、場合によつては有機的たり得ない事もある。色色な人の思想をただ體裁よく配列して一つの形式にまとめたものには、形の上の美といふものがあつても、それ等を貫く作者のいのち、たましひといふものが通うてをらなければ眞の意味での有機的といふ事ができない。ゲーテは體系的なる哲學を持たない。學としての哲學を所有してゐる哲學者ではない。それは彼の思想が、餘りに有機的であつた爲と云ひたい。これはパラドックスに響くが決してさうではない。卽ち彼の思想は彼の內面生活と餘りにも密接なる關係にあつて、思想が卽ち生活であつたからである。彼は思想を生活してゐた。これは哲學者の云ふ『哲學する』といふ意味ではない。彼は嘗つて自分の詩作は悉く生活の告白であるといふ意味のことを云つてゐるが、彼の思想も亦悉く彼の生活の告白であり、その生きた響きである。この生活の意味は、云ふ迄もなく彼の內面的な生活のことを主として指してゐる。廣い意味で彼の念願するところのかくあらねばならぬ生活の理想を

も含めるものである。その生活の態度が言葉の形式となつて表現されたものが彼の思想である。故に彼の思想は彼の生活以外に存在する學的體系の形を取り得なかつたし、また取る必要もなかつた。常に生命の法則に隨順してその天才の創造的過程の趨くに任せて、法爾として生きたゲーテの創作生活は自己が自覺しないで、而も最も有機的なる全體を暗示するものがある。丁度、健康や若やかな肉體はそれ自身では、自分の整うた有機的健全さを自覺しないでも、その健全さの自らなるあらはれは、見る者の心を喜ばさずにおかないやうに、ゲーテの內面的生活も亦この生命の健やかな、若やかさを溢れるばかりに示して、木の實が自ら熟して落ちるやうにその創作的發表となつて示されてゐる。彼の思想は、彼の生活の樹に咲いた花であり、生活の樹になる果實である。それは必然的なる成果である。必然的と云つても決してなるが儘に任せた結果の意味ではなくして、常に眞劍な生活態度を背景とする自然さであり、必然さである。靜かに立つてゐる樹木の生活は、如何にも安らかに樂しく眠つてゐるかのやうにも見える。併しそれが美しい花をつけ、匂やかな果實を生む爲には、實に多くの眞劍な努力と活動、外障に對する苦鬪を經驗することを忘れてはならない。若しこの不斷の努力を見なければ、美しい花も匂やかな果實も、機緣によつて促された一時的な偶發的な現象に過ぎない。ゲーテの有機的なる天才から生れる理想は、同樣に極めて刹那的一時的の思附きとも見られる事があるが、この刹那的の產物は深くして長い生活の流れから脈を引いて、我等の眼に觸れ來る波である。刹那的にして而も永遠の意味を象徵してゐる性質のものである。卽ちこの場合ゲーテに於て有機的であるといふ意味は、刹那的で永遠性を持ち、斷片的で持續性を背景とし、一見體系的性質から最も遠ざかつてゐるかの如くにして最も直接的に有機的生活そのものを表現するといふ事である。

それ故に彼の思想に接し彼の言葉に耳を傾ける者が、その有機的性質に充分注意を怠らず、彼の言葉の背後に流るる常に一貫して絕える事のない彼の內面的生活を見ようと要意するならば、彼の生涯は一つの生きた體系として我等の眼前に髣髴する。そして彼の言葉はその體系を說明する最も雄辯にして明白なる有機的體系である事が分つて來る。故に彼を最もよく讀まんとするものは、彼の思想を彼の生活の有機的體系に還元して、彼の言葉から一つの思想體系を構成せんと試みねばならぬ。彼には哲學はないが彼の哲學はこの意味で充分に成立し得るのである。

以上述べたやうに、彼の表現の總ては、彼の生活の基幹から發する有機的な性質を具へ、悉く彼のいのちの息のかかつたものであつて、彼の思想發展の或るファーゼを示すものである。併しこれ等を綜合して一つの『體系ゲーテ』を作る事は勿論困難な事業である。然もこの有機的發展の跡を辿るといふ事は全ゲーテを理解する上に於て最も必要であるとすれば、我我はこの困難を如何にして克服する事ができるか。それはこの發展の跡を最もよく表現してゐる彼の主要なる作を研究するにある。第一は『ファウスト』兩部であり、第二には彼の小說『ウィルヘルム・マイステル修業時代』及び

『遍歴時代』である。この兩者は孰れもその製作の時間が殆んど彼の創作的生涯の全程乃至大部分に亙つてをつて、彼の全思想の發展史を最も雄辯に物語つてゐる。ゲーテの人生觀の成長を最もよく物語るこの二作に於て、その孰れもが、主人公の戀愛事件に始つて、人類の爲の Tat に終つてゐる事は注意に價するものである。つまり主人公の個人的なる愛の感情が、遂に社會的愛の感情に終つてゐる。個人我への興味が人類我への興味にまで擴張せられる。佛教的に云へば小乘的なる見方から大乘的なる見方への發展と見る事ができる。これはかなり一般的なそして粗雜な云ひ方であつて『ファウスト』の第一部に於ても既に個人我が人類我にまで擴張する事を理想とする憧憬は見られるのではあるが、主人公の實際のハンドルングから考へて、大體誤りのないところであらうと思はれる。この個人愛から人類愛への推移發展は、『ファウスト』の第二部に於てはその作の性質上象徴的に表現せられてゐるに過ぎないのであるが、『ウィルヘルム・マイステル』に於てはそれが散文の小說である爲極めて明瞭に、極めて微細に說明されてゐる。殊に第二部である『遍歴時代』は一種小說の形を取つたゲーテの人生觀、世界觀であり、教育觀、社會觀であると見なしてもよい位、彼の主張を端的に表明し、彼の社會批評を展開し、兼ねて彼の理想を述べてゐるものである。その形式も幾つかの個個の短篇小說の結合であつて、主人公の同一が多くの珠を貫く糸のやうに全體の形式に一つの小說の概念を與へてゐるといふ風である。勿論この幾つかの短篇小說は決して並立的に存在してゐるのではなくして作者乃至主人公の思想的發展を象徴するやうに配列されてゐる。それだけこの作は優れた發展的な研究、ヘルデルがレッシングの『ラオコーン』を評して我等の眼前に於て成長し發展してゆくと云つたと同じ意味の研究なり人生觀の告白を讀むに類する興味がある。故に『ファウスト』の兩部及び『マイステル』の二卷を發展史的に研究する事によつて、ゲーテの思想の有機的進展を跡付ける事は非常に興味ある仕事である。それはかなり大きな仕事であつて、自分は今此處でそれを敢てする時間もなく、またその場合でもないと思ふのであるが、ただ後者卽ち『ウィルヘルム・マイステル』殊にその『遍歴時代』の主要部分を占むるゲーテの社會觀を中心にして、それがゲーテの全思想中の如何なる發展のファーゼにあるかといふ點に觸れてみたい。それは、ゲーテのかくあるべき社會を知る事によつて、我我のかくあるべき社會構成の理想にもいささか寄與するものがあると思ふからである。

『ウィルヘルム・マイステル』は一般に Bildungsroman の名を以て呼ばれてゐる。前にも述べたやうに、主人公が人生の色色の相を見、色色の經驗に觸れて、その人間的構成を完成しゆくその發展の過程を取扱つたものであつて、これが卽ちゲーテ自身の人生觀の成長をも意味するものである。その主人公ウィルヘルムが、人生への門出は何を以て始めるかといふに、マリアーネといふ女優に對する戀愛から始る。彼は俗的な人生に生きることを嫌つて人間の最高の理想は藝術に生くることにあると

見た。彼の場合に於てこの藝術は演劇の形で現れてゐる。彼の戀愛關係もこの演劇の愛好から機會を得てゐる。彼の理想はシュトゥルム・ウント・ドラング時代の青年と等しく飽迄自己の心情の要求に聞いて人生を享受するのに勇敢であることにあつた。ウェルテルがこの世に於て二つとない我が心情を愛兒のやうに甘やかしたと同樣、ウィルヘルムも亦人生の目的を以て俗流を逃れて純なる感情、空想に生きることのできる世界卽ち演劇藝術の世界にありと思つた。彼の經驗は併しその誤れることを次第に敎へた。全人間としての彼の要求は演劇の世界に於ては滿されないことを思ふやうになる。彼は舞臺に立つて成功はするけれ共、俳優の生きる感情は要するに他人の感情である。實際人生に於て自己の人格に生きようとすれば、自己を捨てる舞臺の生活とは兩立し難い。かくして彼の全人間的完成の欲求は藝術の世界から次第に實際活動の世界へ移つてゆく。これが『ウィルヘルム・マイステル修業時代』の過程である。

かく藝術至上主義の世界から Tat の世界への移動を暗示するに終つてはゐるが、併し『修業時代に於ては、興味の中心はまだ主人公個人であつて、彼の人格の確立、敎養の完成がその目的となつてゐる。それが『遍歷時代』になると、興味と活動の中心が全く變つて社會的生活、人類生活の完成を理想とすることになる。『個人の完成は個人の輪郭を非我の世界に對して鮮明ならしめることに他ならない。それは個人が自己の相に目覺むる事が深ければ深いだけ自己と自己以外との關係を鮮明にすることに他ならない。自己と社會との關係を明らかにするといふことは、自己を社會の一部として見た全體的生命に目ざめることである。自己の生活の眞意義に目覺めながら社會共存の有機生活の理想に目覺めないといふことは考へられない事である』。部分の完成がやがて全體へ成長してゆくのは必然的道程である』。この意味に於て我我が『修業時代』の後に當然『遍歷時代』を豫期しなければならない。

この社會意識への主人公の成長並びに社會意識それ自體の進展過程を取扱つてゐるものがこの『遍歷時代』である。殊に後者が主題として取扱はれ、主人公はこの主題の一要素として社會生活の進展の流れを漕ぎゆく旅人である。前にも述べたやうに一貫した小說の形式としては一見甚だ整頓されてゐないやうにも感せられるけれども、微細にこれを觀察するならば一貫した精神によつて貫かれてゐる事が明らかになる。一八二一年九月七日ツアウベル宛ての手紙に『關聯、目的、意圖はこの作そのものの內部にある、それは一つの作から(aus Einem Stück)成つてをらないにしても、一つの意味から(aus Einem Sinn)成つてゐる。幾つかの緣のない外部的出來事を一致的なものとして人の感情に齎らすのが正さしくその任務であつたのだ。』とゲーテ自身も云つてゐるやうに、假令多くの個個の短篇作品の集合の如きものであるにしても、一つの Sinn を以て貫かれてゐる。それは作者のイデーによつて貫かれてゐるといふ事を意味するのは勿論であるが、その事以外に近世の產業發展の史的過程の客觀的如相が如何にも鮮明に生生きと描き出されてゐる事をつけ加へねばならない。ゲーテの持つ偉大

な藝術的天才の客觀性は老境に入つた詩人の禪定的靜寂裡に、恰ち秋の湖水のやうに彼の生きた時代の眞實性を映し得てゐる。併し、それは單純にカメラのやうな寫映ではなくして、彼自身も亦その時代の空氣を呼吸し、その時代の史的過程を最もよく同生したものとしてこの客觀的なる社會相は、彼の主觀的なる生活態度、卽ちイデーとは切離して考へる事ができないやうに融合してゐる。從つてゲーテの意味する『一つの意味』は、客觀的社會生活の進展過程の緊密なる一つの流れを意味すると同時に、ゲーテ自身の人生觀の進展を意味してゐる所以が玆にある。

先づ主人公が個人主義的生活から社會主義的生活への轉入に當つて移された環境の第一は手工業者の生活環境であつた。卽ち『修業時代』を『遍歷時代』と結ぶものは、『遍歷時代』の卷頭を構成してゐる聖ヨゼフ第二世の生活である。彼はその名が示してゐる如く、キリストの父、マリヤの夫なるヨゼフを今の世に見る大工である。彼は傳奇的に求愛し得た美しい妻マリヤ及び彼女の亡き夫の遺兒と共に平和な生活を送るところの、自己の天職に最も忠實なる一手工業者である。『彼は自己の Handwerk に全生命を委ねて、自己の勞働を聖なるものにまで高め得る勞働人である。勞働の神聖は好んで用ゐらるる常套語であるが、この言葉に正しい意味を與へるものは、勞働者自身の心術である事を知るものは少い。勞働自體には聖、非聖の道德性が內在してゐるのではなく、これを聖ならしめるものは勞働者の態度である。勿論『勞働には經濟價値以外に必要がない。それ以外の價値づけを勞働に對して試みる事は多く僞瞞である。』と見るものには、何等問題にならないのであるが、Tätigkeit とその本體たる人間、職業的活動と全人的要求の間の矛盾を如何に調和すべきであるかを問題にし、その解決によつて勞働者に勞働の報酬以外に人間的なるよろこびと滿足を齎らさんとするものにとつては、假令それが現在に於てはユートピア的な一場の夢に過ぎないと見られようとも、等閑視し難いテーマである。何となれば、それは人間を機械にするか或は人間を飽迄人間へ生かし續けるかを決する問題であるからである。且つ近代の產業革命は手工業者へのあらしに他ならない。故にゲーテがこの革命的雰圍氣の中に來るべき社會の理想圖を描かんとするに當つて、先づ一手工業者の生活から出發した事は正しい順序である。それと同時に、如何に機械工業が發達分化しても、その勞働單位である勞働者自身は依然として一個體である以上、この社會團體の單位のかくあるべき態度を最初に究明する必要から、『ヨゼフ』の章を卷頭に置いたものと解釋すべきであらうと思はれる。卽ち近代社會史發展の客觀的事相と、そこに生じ來るべき問題に對する主觀的態度とは、既にこの『ヨゼフ』の章に於て渾然として融合してゐるのを見るべきである。

更にゲーテがこの社會構成の單位を、象徵として聖父の上に見た事は極めて意味の深い要意である。後に發展し來るべきかくあるべき團體生活の中心生命が如何に宗教的心情を必須の條件としてゐるかを照合するならば、『遍歷時代』の序文として聖ヨゼフの物語の如何にふさはしきかを理解する

事ができよう。

新しき社會構成の基本單位が、一つの Handwerk に熟達し、それを自己の天職とみてゐる勞働者であらねばならないとする考方は、聖ヨゼフの章に續くウィルヘルムとモンターンの邂逅の條に於て述べられてゐる。モンターンの云ふ所によれば、多方面的教養を主眼とすべき時代は過ぎた。それは全然不必要事として排斥すべき程ではないにしても、苟くも眞に意味のある仕事を爲し遂げようとする者にとつては多方面的欲求は遂に亡羊の歎に陷る危險がある。實にこの危險こそ若き日のゲーテが最も深く嘗め盡したファウスト的欲求に伴ふ試錬であつた。彼の宇宙的天才が長い生涯に惠まれ、幸福にもこの試錬を見事に克服し得たとは云へ、その試錬の度毎に無限への放散を恐れて求心的動向を一層強く感じたのである。彼の哲學に於て反復して述べられてゐる『自己克服』或は『自己局限』の要諦は、遂にこの『遍歷時代』がサブタイトルとして持つ Die Entsagenden の哲學に迄結晶するに至るのである。今はこの問題に立入るべき場合ではないのであるが、モンターンの唱道する集中主義は正にこの Entsagen の哲學の能動的半面を語るものである事を忘れてはならない。彼は云ふ、『人が仕遂げねばならぬ事は、第二の自我として彼から遊離し來らねばならぬ。而も若し彼の第一の自我が完全にその仕事によつて滲透されて居らなければ、如何にしてその事が可能であらうか。』(第一卷第四章)。

「苟くも求めらるべき仕事が、眞に生きたたましひの籠つたものである限り、それはその人のたましひの分身であらねばならない。さうした性質の仕事にして初めて強い作用性卽ち社會性を持ち得るものである。これをその勞働人に就て云ふならば、一つの Handwerk にたましひを入れて勞作の三昧境に沈潛する程度が深ければ深いだけ、彼は一個の勞働人から藝術家の世界へ移動してゆくものである。『よりよき頭腦にとつては Handwerk は一つの藝術である。』(同上)。而してこの體驗の終局に於ては不可思議にも、かの多面的教養が求めて得られなかつたのが却つて玆に求め得られる結果を將來する、卽ち『彼が一を爲すとき、一切を爲す。』(Wenn er eins tut, tut er alles.) のである(同上)。それは正しく爲されたる一つの Was の上に一切を爲し得べき Wie の象徴的なる具現を見るからである。一卽一切の妙諦はかくして一つの仕事にそのたましひを投込む勞働の心の上に刻印せられるといふのである。概念の荒野に行き暮るるよりも先づ『日の要求』にいのちを打込むべきである。この意味でモンターンは『今や Einseitigkeiten の時代である。』とも云ひ『一つの Handwerk に自己を局限することは最もよきことである。』とも云ふのである。

この態度、卽ち多角的教養を主眼とせずして一つの仕事に局限し、然も其處に全身的に生きる態度、所謂 Handwerk の藝術化を新しい社會構成の單位なる個人に要求してゐる作者は、產業機制の複雜化し來る後に於てもその考を變へないやうに思はれる。第一卷に描かれてゐる聖ヨゼフの牧歌的な勞働生活から伯父の莊園に於ける組織的なる團體勞働の機制へ發展し、第二卷に於て新しい社會單位

が如何に教育せらるべきかを示してゐる『教育國』から最後に第三卷へ轉じてこの『教育國』に於て教育せられたるものが中樞となつて構成する社會を說明する場合、その社會に於て近世の經濟生活が始る傾向を示して手工業が漸く機械工業によつて壓迫せられる時代へ進んで來るのであるが、さうした場合に當つても勞働者個人に對する作者の要求は、この作の冒頭に述べられてゐるところから變つてをらない。卽ち勞働の藝術化、勞働の聖化は新しい社會秩序を維持してその社會の有機的なる成長を目的とする者には、問題解決に缺くべからざる祕鑰であるとみる。唯聖ヨゼフの牧歌的個人生活が Arbeitsgemeinschaft の社會生活へ分化しゆく結果として、Hausfrommigkeit が Weltfrommigkeit へ進展しゆくのであるが、敬虔性を生活の信條とする點に於て變るところがない。一つの單細胞から無限に複雜な社會構成へ分化しつつ、それを貫く魂は宗教的な敬虔性である。分化は無限へ進展して行くが、その個個の單位を貫く魂は聖ヨゼフに發して聖ヨゼフに還る一大圈を描いてゐるものである。然もこの Arbeitsgemeinschaft の Band の各單位が、各〻象徵的聖ヨゼフであるが故に、複雜なる分化關係が悉く各個體のたましひに綜合せらるる無限なる圈圓の纖維から成る有機的組織體を構成することになるのである。ゲーテの社會觀は實にかうした有機的社會組織を夢みてゐた。

社會生活の單位なる勞働人の態度を述べるに際して稍〻結論へ飛躍した觀があるが、聖ヨゼフの生活を敍した後、ゲーテは伯父の莊園へ敍述の筆を移してゐる。玆で初めて社會生活の組織的光景が示

される。聖ヨゼフの章に於て勞働人の單位を個體の上に示したに對して、伯父の莊園に於ては一個の構成された社會組織の輪郭を主として描いてゐる。從つて如何なる構成單位が如何なる構成過程を經てその社會組織へ進展してゆくかではなくして、共同生活に對する深い理解と獻身的なる奉仕の一精神が周到なる注意を以て組織した理想社會が玆では示されてゐる。仕事の內容からいへば、聖ヨゼフの個人的なる手工業生活から農業生活へ移つてゐる。それは手工業と異なつて多くの人人の協力が一つの機制を組織し、各自の仕事がそれぞれ他人の仕事を促進させる性質のものであるが故に、一個人の明徹なる社會意識によつて創設された理想社會を示す爲に當然選ばれた仕事の形式である。

この莊園の主人公である伯父といふのは、廣大な土地の所有者であつて、彼は優に自己の所領內に於て一つの社會を構成するだけの廣さをもつてゐる。彼の祖父も父もアメリカに於て成功したのであるが、彼の代になつて古いヨーロッパの文明國に於て、自己の理想を行はんと志し、祖先傳來の土地を我が手に收め、それを整理し增大するにつとめてゐる。彼の考方は飽迄現實的であつて、無用なものを除いて有用なものを生かしてゆく事に總てが集中せられる。故に公園等でも整然たる果樹園や菜園であり、室內の繪畫や彫刻の代りに、地圖や重要な都市の設計がかかげられてあるといふ風である。人人の心は悉く Arbeit の上に集中せられるやうに出來てをり、不用な空想を働かす刺戟となるものは總て除かれ享樂的なる贅澤品は一切除かれてゐる。彼の目的はできるだけ多くの人人に生活に

必要なるものを供給しようとするのにある。彼は人生の目的を Arbeit の中に見た。從て社會問題の解決は、この Arbeit への力を目覺ますにあると見た。彼は勞働者に勞働への興味をそそる爲に勤勞の特別報酬を與へる。この社會にあつては宗教は個人の自由に委ねられてある。活動日である六日は多忙の爲に靜かに內省するの時を持たぬのであるが、第七日目には靜かに自己を內觀して、罪やその他の故障は、自己の力によるか或は友人の力を以てこれを除却するにつとめ、やがて新しい週間には新たなる力を以て進み出すといふことになる。この社會に於ける大切な標語の一つは Vom Nützlichen durchs Wahre zum Schönen! といふのである。卽ちその眼目とする處は有用事であるが、其處から出發して眞理を實現し、結局は美をも生み出す處にある。而してこの社會を最も特徵づける標語は Besitz und Gemeingut である。これは私有財產制と共產制を同時に認めてゐるかのやうな言葉であるが、兩者の渾然たる有機的な關係を巧みにいひ現はした微妙なる表示である。それは、所有が眞にその使命を果す爲にはそれが固定してはいけない。總ての人人がこれを享受し得て初めて所有が生きて來る。さうする爲にはそれが流動融通しなければならない。併し他の人人がそれを享受することによつて、それが忽ち分散消失しても亦所有とはいへない。最も理想的なる所有は、できるだけその形を失ふことなくして、できるだけ多くの人人がそれに與り得る性質のものでありたい。『所有のあらゆる種類を人間は保持せねばならぬ。人間は其處から共有利益が發生し得べき中心點とならねばならぬ。彼はエゴイストとならぬ爲にエゴイストであらねばならない。施すことができる爲に保存せねばならぬ。所有と財產を貧しい人人に與へるといふことはなんの意味があるか。それよりも彼等の爲に管理者として振舞ふことは一層賞讃すべきことである。これが Besitz und Gemeingut の意味である。資本は何人も手をつけてはならない。利息は勿論競爭次第で何人の所有にもなる。』（第一卷第六章）といふのである。卽ち財產の所有者である伯父は決してその財產を自己のものと見てをらない。『我』の觀念に捉はれて是を死藏すればその所有は死なねばならぬ。彼は巨萬の富を持つてゐても決してそれを自己のものとは思はない。何處迄も委ねられたるものとして最も聰明なる管理者たることをつとめるものである。これがこの言葉の眞義である。卽ち私有が同時に共產を意味するのである。

『修業時代』に於ては、個人本位の主觀的價値卽ち美的價値を强調したのである。それに對して『遍歷時代』に見られるこの社會構成は全體の生活を重んずる。客觀價値を主眼としてゐる所謂倫理的價値に進んで來たのである。主人公に見られるやうに、個人の健全なる成長から全體へと目覺めゆく自然の過程にあつては、この兩者の對立は對立としての存在ではなくして、極めて自然的なる融合を成就するのであるが、これを社會統制上の一般的現象としてみるとこの二つの對立は當然その調和を要求して來る。なんとなれば二つながらその長所と短所を以てそれだけでは存在することができないからである。『主觀價値偏重の弊害はエゴイズムであり、美的價値の偏重、卽ち耽美主義、殉情主義とな

り、ウェルテルの運命を追はねばならない。それは全體の生活を重んずる者の眼からは、單純なる痴情の爲に尊き生命を捨てるもののそしりを免れない。併し一方客觀主義の弊は、全體を重んじて個個を尊重することができない處から發する種種なる弊害である。觀察は主として外的活動の成果にのみ向けられる。そしてその活動の源泉となるべき個人の志操に對する注意は自然に輕くなつて來る。主觀の內發的なる意志は問題ではなくなつて、唯生活の必要の爲に强ひられる仕事の分量にのみ重きを置くといふことになつて來る。唯物的なる物の見方、經濟價値のみを偏重する立場から主觀的價値は度外視される。貧者の一燈も富者の一燈も等しく一燈であると見られてしまふ。併し全體の制度はそれによつて生きて來るか。成程制度としては、個人を强制する力によつて保つてゆかれるかもしれない。併し全體の有機的なる眞に生命のある社會的團體を得ることはできない。全體が有機的であらんが爲の前提は、部分が有機的であらねばならぬ。社會の構成要素たる個人が全體的自覺の上に組織された社會にして初めて有機的な生きた社會といふべきである。ゲーテが玆に示した社會は出來上つた總則としての理想的社會形式である。それは出來上つた組織として極めて有機的なる全體である。正しくかくあるべき秩序を以て總てのことが行はれてゐるのである。是を單純なユートピアとして眺めるだけであるならば何等の問題も起らない。併し如何にしてかかる社會組織を將來すべきかといふ實際問題として考へる場合には、この光景から實行的手段を引用して來る事が困難である。それはこの社會を構成してゐるのは一個人の力である。彼は自己の所有領內に於て絕對的なる權威を以てその意志を遂行してゐる。彼は權力と叡智と意力を完全に具へた專制君主である。領內の人民に對しては絕對權を以て君臨する支配者であり、カピタリストである。唯この君主、このカピタリストはいはば我執から離れて天の道に則した謙虛なる君子人であつて、資本家としては正さしくかくあらねばならぬ道を敎へてゐるもので、かの Besitz und Gemeingut の眞理は不磨の鐵則であるが、如何にせん彼が專制君主であるといふ事實は彼の支配下の人民卽ち社會組織の單位の自發的なる意志を問題にしてゐない。然も實際問題としては、この單位相互の關係竝びに個が全體に對する關係の規定を乘越えては全く解決の道がないものである。所謂 aufgeklärter Despot によつて創設されたこの社會組織を通じては、正さしくかくあるべき全體を知ることができるけれ共、その全體への內發的なる成長卽ち各組織單位からの分化作用としての全體への構成、部分と部分、部分と全體との關係は遂に求めることができない。この關係が明瞭にされて初めてこの社會は眞に生きて來る。故にこの理想的社會統制を眞に生きたものとする爲の手段は、實際問題として重大になつて來、避くべからざる問題になつて來る。この手段があつてこそ初めて上述の社會を眞に生かして、魂を其處に吹込むことができ、主觀的價値と客觀的價値を完全に調和せしめ、所謂自利利他圓滿の成果を齎らす底のものとなるのである。卽ち美的價値と倫理的價値を調和せしめるもの、主觀の要求と社會的業務との間の矛盾を調和させるもの、部

分と全體とを同時に生かし得べきものとなる。ゲーテがこの手段として提唱したものは卽ち宗教的價値である。彼は部分と全體を完全に融合せしめるものはこの宗教的價値をおいて他にないと考へた。これやがてゲーテにとつては近代の社會問題を實際的に解決すべき最後の鍵と思はれたものである。

この鍵を說明する爲我等は次に『教育國』に入らねばならない。ウィルヘルムがその子フェリックスを教育する爲に送るべき『教育國』こそこの來るべき社會の構成要素を教育する國であつて、其處に行はれる教育が卽ち理想社會の道程を物語つてゐるものである。其處では個性を尊重することは勿論であるが、もはや十八世紀の個人主義的教育が行はれずに、學童は皆團體生活にならされ、初めから共同的利害の觀念、つまり社會思想を強く植附けられるやうになつてゐる。而してこの社會思想を內面的に生かす最も大切なものとして宗教的情操を植附けられることになる。この宗教的情操といふのは總ての物に對する畏敬の念慮である。指導者の說明はかうである。『素性のよい健全な小兒達は多くのものをもつて生れる。……併し一つのものだけは何人も生れながら持つては來ない。然もその事柄こそは人間が總ての方面に亙つて人間たらんが爲に必要なる中樞である。』（第二卷第一章）。それは何であるか、この人間をして眞に人間たらしめる唯一のものこそ實に畏敬 Ehrfurcht に他ならない。若し一切の活動がこの畏敬の念慮から出發するならば、その活動は絕對價を以て生きて來る。『教育國』の教育者達は學童にこの畏敬の念慮を吹込むことを最も聖なる任務と考へてゐる。

この畏敬の念慮は、學童の思想的發展の程度に應じて三階梯に分たれてゐる。此等三階梯は內面的には有機的關係にあるものであつて、この三つの畏敬が完成して最後の目的に達する。第一の畏敬は、我等の上なるものへの畏敬である。卽ち天を拜するのである。之は宗教的な畏敬を理解することのまだ充分ではない少年に對してその能力に應ずるものであつて、之は人類の宗教思想の發展史に就ても亦見られるもので、自然の威力に對する原始民族の畏敬が卽ちそれである。之はキリスト教以前の總ての宗教の形式である。その最も純粹で代表的なる形式はユダヤ教に於て見られる。玆では超越的なる神の威力が一神教の形となつて表れてゐる。『教育國』の少年達は天上の神を以て道德の規範と考へ、その神の力は兩親や長上の上に啓示されて現れてゐると考へさせられる。小兒にとつては自己を慈愛を以て育む者を尊敬し感謝するのは極めて自然である。併し我等の生活の根據であるこの大地は必ずしも愛と喜びの母に止らない。小兒は自己の我儘や無思慮から多くの苦痛、衝突を經驗させられる。それは避く可らざる運命を敎へる大地であり、我等の弱少を自覺せしめられる母胎であり、第二段の階梯にある稍〻成長せる青年はこの大地を拜する事を敎へらるる。それによつて地上の生活の意の儘にならぬ事、然もそれは高き意志によつて定められたる物である事を感銘する。つまり我等の自由を拘束し、我等の我儘なる心、高ぶる心をへりくだらしめるもの卽ち人間の不幸への畏敬が敎へられるわけである、我等の下なるものへの畏敬である。歷史的に見れば、人類が自己の不幸や

死或は罪を以て神の働きと認識する迄には、最も長い時間を要した事であつて、是は宗教的階梯の最後のものである。卽ちキリストの死後に於けるキリスト教の境地である。併し『教育國』に於ける教育の順序としては、學童を活動的なる人生に導く事が主眼であるからこの順序を變へて、この下なるものへの畏敬から、第三階梯の我等と等しきものへの畏敬へ導かれる。卽ち同胞への畏敬である。我等は孤獨の力を以てしては、我等を襲ふ種種なる不幸や障礙を防ぐ事ができなかつたにしても、我等の左右に我等の同胞のある事を認識し、彼等と協力して事に當る時、多くの障礙不幸を克服し得るといふ經驗に達し、自己の中に新鮮なる勇氣の湧くを感ずると共に、共同の戰線に立つ同胞に對して深い畏敬を禁じ得ない。是は宗教史的には賢者の宗教或は哲學的宗教と云ふべきものに當り、神の啓示を人間の中に見るのである。卽ち畏敬すべき一切を人間に於て見んとするもので、一切の高きものを人間に迄引下し、一切の低きものも人間に迄引上げて、人間の働きの中に神の働きを見ようとする。イエスがその存命中に自己の神なる父を自己の中にありと敎へたのはこの境地に立つてゐるのである。

この三段の境地はその孰れをも切離すことのできない關係にある。『何となれば此等が一緒になつてこそ眞實の宗教を生み出すからである。この三段の畏敬から最高の畏敬が生れて來るのである。卽ち己自身に對する畏敬である。』（第二卷第一章）。人は自己を繞るこの三つの存在を通過して初めてその最後の對象なる自己に還つて來る。最も近いものを發見せんが爲に最も遠い道を辿つたのである。盡日訪春不得春、我が家の庭に見出した梅の香りに春の趣の一入深く感せられた詩の心を我が衷に感ずる。其處には一切の價値の源泉である『我』が初めてその眞面目の相を以て現れて來る。『我』に對して眞の畏敬が湧いて來る。この畏敬こそ最高の畏敬である。この人格に對する畏敬に到達して人はその最高なる宗教地に對したものである。而して曩の三段は更にこの畏敬から展開されるといふ圓融循環の關係となる。かうして『人間は神と自然の生み出した最も優れたものであると自分を考へる事が許され、この高地に逍遙して然も自負と我執の爲に再び凡俗に墮する憂がない』やうになるのである（第二卷第一章）。

人が一度かうした宗教的教育の洗禮を受けて、一切のものに對する畏敬の念慮をその活動の出發點とするやうになれば、その人は如何なる種類の活動に從事しようとも、その天分を全うして完全に有意義に且つ有意識的に社會全體の有機的機能に參與することができるのである。卽ち宗教的平等觀を背景にして初めて社會的職業的活動の差別が、價値の差別でなく、機能的な差別となつて來る。かくして眞に職業に貴賤の別がなくなる。

第三卷に描かれてゐる團體組織は、かうした自覺をその活動の出發點とする勞働人から成るものである。その人人の大部分のものは『教育國』に於て敎化されたものである。この團體に入ることを得

る條件は、必ず一つの Handwerk に堪能であらねばならない。かくして自己の仕事の中に充分に自己を生かし切ることを知つてゐると同時に、全體の爲に自我を捧ぐる事を喜ぶのである。其處には種種多樣なる人人が屬してゐる。生きた社會が限りなき多樣性を示してゐると同じ樣に、その人人はそれぞれの才能、天分に應じて自己の力を提供する。苦力の如きプロレタリアートの存在することはいふ迄もない。併し彼等には階級的差別は全くない。彼等は唯それぞれ異なれる活動の成果を以て全體へ寄與する。玆では個人乃至團體の權力による支配がない。專制君主の意志も、君主的多數決制も、ゲーテにとつて充分に滿足され得ないものである。兩者は孰れも個人への權力的壓迫である點に於て變らない。さればといつて無政府的なるユートピアを求むるものでない事は勿論であつて、目指す處は部分と全體が完全に生き得る世界である。其處には職工の組合の組織を模した三段の機制上の階梯、卽ち徒弟、職工、親方といふ風な秩序があり、その最高幹部は das Band といふ風な抽象的なる名で呼ばれてゐる。恰ちかの『敎育國』に於ける最高指導機關が die Drei といふ風な非人稱的單數を以て示された如きものである。ゲーテはかうした抽象的なる名稱を以て事態を神秘化せんとするのではない。部員の總てがその宗敎的敬虔性を以て對する全體、それは同時に己自身も亦その一部である處の全體を象徵する爲に必要なる表現である。それは團員の畏敬の對象ではあるが、決して權力的恐怖の主體でない。然もそれは社會の各單位なる個人を自主的に抑制して、全秩序內に於ける自己の地位を

常に自覺から去らしめないだけの權威を持つものである。

その他種種なる社會制度の說明が見られるのであるがそれは他の場合に讓る事にする。唯、ゲーテの求むる人類の理想的社會は、如何なる性質のものであつたかを知ると同時に、彼の思想の有機的成長の過程に於て個人の完成がやがて社會我へ移入して行つたこと、それが同時に十八世紀の文化思想が十九世紀の文化思想への變遷を物語つてゐることを見ればよい。トーマス・マンが詩人の生活を以て象徵的であると云つたのは、この場合最もよくゲーテに當嵌まる。彼の個人の思想生活がそのまま社會全體の思想生活を象徵し代表してゐたのである。多くの批評家は佛蘭西革命時代から獨逸の自由戰爭の時代にかけて、ゲーテが政治的に餘りに冷淡であるといつて、彼の愛國心の薄弱なる事を非難する。又彼の藝術が餘りに個人的であるのにあきたらない。或るものはそのブルジョア生活の偸安を罵り、ハイネの如きは彼を以て『貴族の奴隸』と罵倒してゐる。併しながら人若し『ウィルヘルム・マイステルの遍歷時代』を充分に研究したならば、彼の社會意識が如何に熾烈であり、全體の生活に對する興味が如何に旺盛であつたか、そして、やがて來らんとする十九世紀の產業革命の時代を豫見し、階級鬪爭が激しくなり、經濟價値の爲に人格價値が低下して、唯物的な見方のみが旺盛になるかを見、それに對する豫防手段迄も研究してゐたことを知ることができるのである。彼が革命に左袒し得なかつたのは、彼の性質上過激なる手段に訴ふることによつて多くの不祥事の勃發を怖れたからで